
黒く滾る炎

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒く滾る炎

【ZPDF】

Z0901

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

過去に負った深い傷から抜け出せず、闇に閉じた心から強い野望を持った男の物語

その〇（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

男の瞳は黒く燃えていた。

深き野望に心根を狂わし、乾いた時代への勝利に執念を尽くす。

それが生き様、それ

だけが。

優しさなんていらない。同情も、生温い感情も。沁みつたれた情動など願い下げだ。

金、それこそがこの心を満たしてくれる。

俺はその全てを手に入れてみせる。この手がどんなに汚くなろうとも。だって、そいつらを手にするのは欲望に溺れた不浄な人間だけなんだろ。なら、

俺は喜んでこの身体を汚してやるや。この心にある天使を悪魔と取り引きしても、俺は勝つてみせる。負け

け犬の遠吠えなんて、真つ平ごめんだ。この正義の薄れた大地へ勝利の雄叫びをあげてやる。

眼前に拡がる水平線にこの先の未来を映し、昇りくる朝陽に己を置き換えた。生きて

やる、炎立つ情念の「ごめく社会を。我欲にまみれた利己的な人たちを負かし、その

頂点であざ笑つてやる。そして、地べたを這つて命を乞う敗者へこう言つてやるのさ。

「何を言つてるんだ。俺はお前らと同じことをしただけだ」

勝ち続けてきた連中は敗者になり、初めてその気持ちを理解する。

それまでに、どれ

だけ俺のような敗者を蔑んできたのかも。ただし、そこで知つたと

ころでもう遅い。悪

に染まつた俺には負け脣の相手などしてゐる暇はない。脣は所詮は脣でしかない。過去の

栄誉など意味を持ちはしない。なあに、気落ちなんかしなくていい。お前らが前に俺に

してきたことじやないか。お前らには『氣落ちする資格さえない。ただ暗く淀んだ日々に

心を擦り減らせ、やがて消滅すればいい。消えたことすら『氣づかれないままで。

昇りつめてやる、この乾いた時代を。俺はそれに値するだけの人間だ。今までに俺がどれだけの悪魔と契約してきたことか。見てろよ、俺を卑下してきた肩ども。お前らの鼻を完膚無きまでに折れ曲がらせてやるから。

その1（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

男は雨に好嫌を抱いている。好きもあるし、嫌いもある。捉え方の側面によつて、好みは真逆になつうる。何も難しことははない。誰にでも、雨を望む日があり、晴れを望む日がある。要はそれだ。

ちなみに、今はと「好まない」に属する。理由は簡単だ。
勤務中だから。

仕事はタクシードライバーをしている。といつても、老齢ではない。むしろ、若い。

二十八歳、この職業にしては珍しいほどの低年齢だ。周りからは驚かれることがある。

別に、他に働き口がなかつたわけではない。何か訳ありなのかと疑われもあるが、それは否定している。訳ありはその通りだが、そこからこゝへ直結したことが違う。やうう

と思えば、いくらでも大手企業に潜り込むことは可能だ。盤石に出世の道を歩む自信もある。こんな汎えない職業をしてるからには当然に理由がある。
雨は作夜半から降り出し、朝になると雨足は増した。雨そのものが嫌いではないが、仕事に差し支えるのは勘弁だ。気分も萎えてくる。沈みそうにもなる。頭に、肩に、腕に重りを乗せてるような心的苦痛を伴つ。

こんな日は死んでしまいたくなる。いつそ、この呪縛を解いて楽になつてしまおう。

自由だ。俺は自由なんだ。そつ「口に叫ぶ。進行はそこで停止をする。

残念ながら、まだ

死ぬことはできない。俺には果たさなければならないことがある。

溜め息を繰り返し、雨道をゆっくりと走っていく。会社の車は乗

り心地がいい。他人

の所有物であることが変な緊張感を打ち消してくれる。この車に愛

情はないし、会社に

もない。

時刻は正午を過ぎた。あと五分も客がつかまらなければ昼休憩にしよう。大概の昼食

は弁当屋の温かいものに頼るが、今日は気分転換でもしてみようか。

喫茶店の軽食など

いいかもしれない。ああいつた類はたまに無性に食べたくなる。食欲というやつか。食

に一切のこだわりはないが、人間である以上はこうした欲も衝動的にやつてくる。そう、

俺は人間だ。人の体に魂を宿した悪魔の化身、そんな表現が合う。

そう考へてると、大通りの左手から適度なアピールをする姿が見

受けられた。客だ。

「はあ、今日は降つてんなあ」

車内に足早に入り込んだ客の第一声は男に向けられたものではなかつた。独り言だ。

独り言を独り言の音量を超えて発する人間は意外に多い。こちらに話しかけてるのかが

判断しにくい時もあり、非情に困る。一人で処理するのなら勝手にやつてもらいたい。

巻き込まれたくない。時間の無駄だ。

「どちらまで」

行き先を軽く促す。僅かに体勢を後ろに向けるが、軸はそのまま。

ドライバーと客の

距離感をそこに示す。体は捻るが、体ごと回しはしない。そんなに客に対して好意的に

出ることはない。この関係は仕事上、あくまで数区間のメーターの元に成り立つもの。

馴れ馴れしくしたり、愛想笑いを振り撒くことは極力避けたい。個的な意思もあるが、

余計な馴れ合いで関係を狭める意味もないと思つ。金を払う側と貰う側、そこに図式は

完成されている。それ以上に上下関係を如実に表することはしたくな
い。

「ヒルズ、行ってくれるか」

六本木か、ここからなら十五分もあれば行けるだろうか。

新宿近郊を出発し、車は雨を滴らせながら緩めの速度を保つ。車内には雨音とともに

ラジオが流れている。普段は消しているが、客がいる時は電源をい
れる。客が聞いてる
かどうかは別にして。

「雨、ずっと降つてんなあ」

「そうですね。止みそうにもないですよ」

客からの言葉には当然反応する。愛想笑いも浮かべる。相手がバ
ックミラーを通して、

こちらの表情を見ていることは知つてゐるから。悪い印象を与えは
ない。程ほどにだ。

対人関係はそれに限る。

「おたくはいいなあ。雨に降られんでいいから」

「そうですね。助かります」

客は派手に笑い、男も同じ程度に笑う。こんな乗りのいい客もた
まにいる。大抵は仕

事に疲れ、当てもなく窓外を眺める人間が多い。景色を見たいわけ
でもなく、都会の流

れを客観的に見ていいだけだ。毎日そこで戦っている自分の休息、傍に存在を移すこと

で感情に浸ることができる。

「こっちは大変だよ。これから戻つて、すぐ仕込みにかかるないと」

「飲食店でもやられてるんですか」

仕込みという言葉にピンときた。職業柄、様々な人間と接する機会があるので人物像

の判別にはいささか慣れれている。少々の小太り、穏やかな人柄を見るところ、中華料理屋の主人と思える。

「ああ、こう見えてもねえ、店を持つてるんだよ」

「本当ですか。凄いですね」

店を持つてるということはオーナーシェフか。ヒルズってことは、相当腕のいい人物

なんじやないだろうか。六十歳の手前、この語調からも人の良さが窺える。

男は心にあるモードを切り替える。奥に眠る悪魔が顔を出す。

「六本木ヒルズに店を持たれてるんですか」

「そう。割と繁盛してるよ。明天家っていう店、知ってるかな」

「知っていますよ。名店じゃないですか」

「名店か。それは嬉しいな」

明天家といえば、多くの人間が一度はその名を耳にしたことのある名前だ。本場さな

がらの四川料理が人気を博している。そのオーナーシェフが今ここに、俺の後ろにいる。

こんなチャンスを逃さない手はない。

「一度だけ、食べに行かせていただいた事があるんですよ」

「本当にかい。君みたいな若い人が珍しいな」

嘘ではない。男は偶然にも明天家で食事をしたことがあった。美

味しいものを食べたり

せてあげる、という裏の魂胆の見える女の財布で。ここでそれを明け透けにすることはないが。

「いえ、僕も上司の奢りで連れてつてもうつただけで。あそこでの料理は何を食べても

素晴らしい

「おいおい、お世辞かい」

「そんなんじゃありません。素直な気持ちです」

「そうかい、それならこっちも素直に受け取つておくよ」

客は上機嫌だ。男の言葉に気を良くしている。攻めるなら今だ。

「ただ・・・・・」

「何だい」

「いえ、何でもありません」

男は言いかけた言葉を噤む。無論、初めからそのつもりで。相手がそれに乗つかつて

くれば、ペースはこちらのものだ。

「途中でやめるなんて気持ち悪いじゃないか。いいから言つておくれ」

掛けた。人は会話の歯切れの悪さに違和感を覚える。それが自分に関わることなら尚更のこと。

「気にしないでください。僕みたいな若僧の思つことなんて、きっと大したことない

ですから」「いいや。そういう意見こそ、是非聞いてみたい。教えてくれないか

「じゃあ・・・・・よろしくでしようか」「うん、と客は頷く。車はちょうど赤信号で停止した。男は申し訳なさそうに言葉を並

べていく。

「接客でいくつか気になつたことがあります。若い男性店員が髪型を気にして触つて

いて。その後、その手を洗うことなく物に触れていたことに幻滅しました。女性店員同

士が談笑している場面も何度か見られました。あれでは、客が声を掛けにくいかもしだれ

ません。あと、水を客が頼む前に積極的に注いでくれるのはありがたい心掛けですが、

グラスに水がなくなつてから注ぎに来る」とが多く見受けられました。どうせやるなら、

水はグラスの半分以下になつた頃には注いでもいいと思います。四川料理ですから、水

の減る量も必然として多くなりますし」

男の発する言葉はどれも目的を得ていて、客はその様に引き込まれた。どこか馬の骨か

も分からぬ運転手の若者が一度来ただけの店をこれほど捉えていたことに感心の一手

しか生じてこない。

信号は青に変わる。男はそれに気づき、車を再び走らせる。

「すいません。今言つたことは忘れてください」

「何を言つてる。とても参考になる意見だったよ。オーナーといつても厨房にいること

とがほとんどだからね。接客についてはフロアマネージャーに任せてるんだ。君の意見

は大変参考にすべきものだ。ありがとう」

客の真つすぐな言葉に男は恐縮する。

車道の上から伸びる看板が六本木に入つたことを示す。車はまもなく目的地へ着く。

客は名刺を差し出し、男に感謝を述べる。名刺には確かに先の通

りの肩書きがあつた。

自分の手を開くには充分の人間だ。

「またウチの店に食べに来てくれないか。君のよつな人には是非とも来てもらいたいんだ」

「そうですね。ただ、僕みたいな庶民には近づきがたくもありますけど」

「なあに、ろくに味も分からぬくせに金だけ持つてゐる人間よりも余程マシだ」

「ありがとうございます。機会があったら、伺わせていただきます」

車は目的地へ到着し、料金は表示額より多めの札をもひつた。情報提供料だからと、

お釣りはいらないと言われた。遠慮がちに男はそれをポケットマネーへとする。

「そうだ。君の名前を聞いておひづ」

「僕ですか。大田恵一といいます」

客は満足気にビルズの高級観へと紛れていった。男は名刺を片手に揺らしながら雨空へ掲げる。思わず、奇妙な笑みがこぼれていった。

仕事が終わつた夜中、男は渋谷に向かつ。泣き続けた雨雲は、この頃には小降りに変わっていた。黒傘を差して歩くと、その先から適度に雨が垂れていく。まるで、雨雲につられて傘まで泣いているようだ。そつか、お前も悲しいのか。奇遇だな、俺も悲しいんだ。悲しくて悲しくてたまらないんだ。こんな不定な感情、どこかに捨ててしま

いたいけれどダメなんだ。俺はこのやりきれない思いを抱えて生き

ることを決めたから。

忘れてはならない過去を背負つて。

なあ、雨雲よ。お前はどうして泣いてるんだ。

渋谷の高級マンションの一室に着くと、合鍵を使って中に入る。そう、この部屋は男のものではない。所有者は今は不在なのは知っている。男は荷物をリビングに置き、体をシャワーで洗い流していく。一田の膚を落としながら、皿ひと枚め合う。外部の汚れが消え、現れる内部の本性。その卑しさが本物の自分である」との確認。

俺は汚い。心の曲がった歪な人間なんだ。

風呂上りに硬水を口に含ませ、窓から外観を見下ろす。すでに明け方となり、辺りは

白く透けた世界が芽吹きだしている。毎日変わらず訪れる世界、不秩序で不調和な欲望

の彷徨う世界。俺はここで生きている。そして、俺も例外になることなく危険な世界の

一片となっている。ただ、一片だけで終わる人生など送るつもりはない。俺はこんな廃

れた集団に埋もれる逸材なんかじゃない。一片どもを踏み倒し、伸し上がるべき人間なん

んだ。

「あつ、来てたんだ」

インターホンとともに、女は部屋に入ってきた。男を視界におさめると、表情は急に明るくなる。女はこの部屋の所有者だ。二十五歳、男よりも年下になる。それが何故、こんな身分不相応と取れる部屋に住んでいるのか。答えは簡単だ。それに見合った金を

持つているから。

「ずいぶん変わった趣味の男じゃ帰宅だつたな」

「違う。あれはアフターに強引に誘われたから。結構良いボトルとかオーダーしていく人だし、断りきれないの。そこでなけりや、誰があんなもつさい奴なんかと一緒にいるのさ」

女はキャバクラで働いている。それも、そこそこ有名といえる高級店で。その業界にどっぷり浸かってしまった人の間なら、おそらく名前を知っているであろうレベルだ。

女はその店でナンバーチームの座に就いている。元々持ち合わせている美貌に加え、甘え

上手の聞き上手。女性関係に苦労している男性ならば、一発で勘違

いしてしまうだろう。

そして、今さつきマンションの下で女の隣にいた奴もその中の一人になる。見た感じは

五十代、スーツから窺うに役員クラスの会社員といったところか。収入はそこそこにあ

るし、家族も養えているが、異性に対しての胸の疼きがどうにも欲しい年齢なのだろう。

男としての機能、その最後の悪あがき。惨めな分、哀れみで許してやりたくなる。

女は後ろから近寄り、男の裸の背中に身を寄り添わす。

「私が愛してるのは恵一だけだから」

息を吹き掛けるような柔な声を背に伝える。頬をそつと擦りつけ、唇を何度かつけ、

男の体に回した両腕の指先で胸から腹部あたりを摩る。愛撫に入ろうとする女の両腕を掴み、解いて下げる。

「疲れてるだろ。無理しなくていいよ」

「そんなことないよ。恵一がして欲しいんなら頑張るし」

「そう言い、男の乳首を捏ねぐる。女は異性の乳首が好きらしい。遊んであげれば素直

に反応し、突起してくる様が愛らしく」と言つていた。自身についても、そこが性感帯と

主張している。なので、性交渉の時には入念に攻める」としている。女はなんとも言え

ない喘ぎ声を届けてくれる。性器も同じ変化を起こすが、過去の経験から嫌気が伴つて

いるようだ。女はキャバクラの前に泡姫としても働いていた。数ヶ月の期間だったが、

毎日数人の性器を感じさせることが嫌になつて辞めたらしい。元来、そんなところに格

好のいい男性なんて来るわけもない。応対するのは年齢もいき、不潔さも備わった奴ら

ばかりだ。そんな性器を触り、舐め、口に含むことに抵抗感を憶えるのは普通といえる。

女はそれから本番のないキャバクラの仕事に移り、そこで成功をさせめた。泡姫時代の

客も来てくれるようで、出だしから女の成績は伸び続けたようだ。

「仕事の後は眠つた方がいい。休みになつたら、いくらでもしてあげるわ」

「はあー」

不貞腐れぎみな女の頬を手のひらで撫で、唇を奪つ。強気に押しつけていくと、気が

高揚したような声をあげていた。女を手なずけるぐらい簡単なものだ。異性としての武

器を最大限に使えばいいだけのこと。

男は仮眠をとり、七時前には女の部屋を出た。自宅にも戻らず、会社に向かうため。

タクシードライバーは勤務時間が長い。実働だけでも一日で十五時間近く、事務や洗車

なども含めれば大した重労働になる。運動量は少ない職種だが、あの座席にそれだけの

長さを過ごすのも労力は問われる。慣れないうちは気が滅入ることも多い。それでもこ

の仕事を続けるのは相応のメリットもあるからだ。昨日の一件が例になろう。ヒルズの

明天家のオーナーシェフ、あんな出会いはそうそうあるもんじゃない。男が平穏に普通

の人生を送つていれば、おそらく無かったであろう関係だ。不思議なもので、物事とい

うのは強い信念に共鳴されるというがある。普通の男には普通の人生があり、そこでは

ない男にはそうではない人生がある。男の願いには数奇な巡り合わせが必要だ。そして、

それを強固に望む人間にそれは訪れる可能性が高い。

男は過去を秘密にしている。隠すべき過去がある。悲惨な人生を送り、選び、二度と

そこに戻らぬことを決めた。環境による拒否権のない己への罰、自らの手で下した他への罰。それを忘れず、心に刻んだまま生きてきた。忘れようにも忘れることが無理だ。

だから、深く深く刻みつけた。傷の深さがバロメーターとなり、この体の内側を幾度となく叩く。伸し上げられ、どんな手を使ってでも。そう叫んでいる。

悪魔に魂を売った男に恐いものなどない。男を踏み、女を抱き、人間を騙す。選択肢

は少なくていい。進むべき道は決まっているのだから、余計な迷いは不要ない。知恵と

情報に長け、残酷な判断を下せる者に勝者の切符は渡る。下手な正義感を翳し、聖者の

フリをしている者が勝つことのできない不条理な世であることがぐらい悟っている。その

道を渡るために、今は地味な仕事を地道にこなす日々を選んでいるのだ。

白い靄を粧しこみ、太陽が光っている。我を主張するその様は悪くない。民衆に期待されながら、雲に邪魔されることも多い。主役だが絶対的ではない。弱さを見せることが

は好感を呼ぶ。太陽が女だつたら惚れてるかもしれない、そつ思つた。おそらく、男を

惑わす存在のはずだ。自分に通ずるものがあり、共感が生まれる。連なる建物の数々の流れは気持ちを固くさせる。都会はこんなにも刺激的なのに、ど

こか中身の無さも感じる。執拗に飾りすぎ、内容が伴つていない部分もある。様々な関

係が詰まつてゐるのに孤独感も否めない。樂園の集合体のような場所なのに不快でもあり、

情報が飛び交つてゐるのに不都合もあり、それぞれが自口をこれでもかと発信してゐる

のに不思議でもあり、ありとあらゆる物が揃つてゐるのに不自由でもあり、大抵が底を

つくような生活を送つていいのに不機嫌でもあり、普通な望みな

ら大概が叶えられる

のに不平不満を漏らす。全員が独りぼっちなんだ。単体が複数いるだけの淋しい世界、

そうでしかない。我光ると燃える太陽だつてそうなんだ。

そう考へてると、大通りの左手から適度なアピールをする姿が見受けられた。客だ。

女性二人、一方は五十歳代とみられ、一方は四十歳前後とみれる。前者は全身を高級品

でどうだと言わんばかりに着飾つた貴婦人のようで、後者は適度に洒落込んだ洋服だ。

明らかに、前者が主役、後者が引き立て役。それを両者ともが理解し、納得している。

タクシーに乗り込んでくる様で存在感の強さが分かつうる。前者の醸し出す気は一般のものとは違う、奇抜で重みもある静かなものだ。後者は前者になぞらえるようにし、前者の存在をおろそかにしないための振る舞いをする。この女は一流だ。男はそう直感を働かせた。

「どちらまで」

行き先を軽く促す。

「東京駅まで行つてちょうどいい」

言つたのは後者の女の方だった。そうだらう、それは引き立ての役目だ。前者の第三の手足となり、第一の頭と目を利かせる。完璧な裏方になる事で能力を際立たせ、前者を投影した縁に自身を映し込む事で己の存在を確立させる。曲折的ではあるが、こんな

人間は「まん」といる。上に立つ者の參謀としての役割を担い、それに全力を投じ、そこに才能を見い出す者もいる。それは時として、上を齎かすほどの仕事をやってのける場合もある。そう、人間は決められた日々を脱却し、逆転をする可能

性も秘めている。だ

からこそ、人生というゲームは面白い。

「十三時一十分発の新幹線に乗ります。しばらく時間が空くので、駅で昼食を摂りま

しょう。あと、先方様へのお土産も何か買つていきましょう」

後者の女の言葉に、前者はそつねと返す。言い慣れたようなやり取りに、常日頃の一

人の会話なのだろうと察する。新幹線で行くのは大阪か福岡だろうか。それ以外もあり

うるが、そこら辺が考えやすいところだ。

男は女のことを知つていて。無論、前者の方を。過去に交流があつたわけじゃない。

男が一方的に女のことを知つているだけだ。女の方は男のことなど知る由もない。映像

を通し、女の記憶が脳にインプットされているのだ。女は役者をしている。年齢からも予測できるだろうが、熟練の域に達した位置にいる。ミーハーな面のない男でも一発で

分かりえるだけの大物女優だ。作品にのみ限らず、情報番組や報道番組でも顔を見たり

する。男はどちらかといえば、そつち側で女を拝見する事が多い。点を突くような発言

は聞いていて口角を上げさせられる。

この女を手なずけさせたい。男はそう腹を動かした。表には出さぬ悪考が蠢き、全身に漲っていく。こんな、またとない好機を見逃すわけにいかない。この短時間の密室な

空間の中で勝負を決す。おそらく、相手は中々に手強い。ただ、そんなことに怯む自分

じゃない。やつてやる、決めてこそ咲花だ。

「ねえ、お兄さん」

きつかけは意外にもの方からだつた。じつ攻め出していくかと倦ねる中、手は相手から差し出された。

「はい。何でしょう」

語調は普通を心掛けた。接客業における普通は幾分が足される部分もあるが、過ぎる

ことのない程度の爽やかさで。緊張はしていない。映像で目にしていた人物を車に乗せている事ぐらいで浮かれたりはしない。そんな事をした時点で、そこに明らかに優劣が出来てしまう。自ら墓穴を掘るようなマネはしない。

「タバコを吸つてもいいかしら」

「はい、もちろん。そんな事、お聞きしないでいいですよ」

「そう。吸われるのが嫌な人もいるだろうから、一応聞いてみたの」

「そうですか。すいません、お気遣いいただいて」

バツクミラー越しに女と目が合つ。少しばかりの笑みも付属されていた。女は後部窓を開け、タバコに火をつける。その行為は女の体に馴染んでいて、その姿は様になつていた。

男はタバコを吸う女が嫌いだ。男が吸うべきものと差別するつもりはないが、女性にはどうにも合わない気がする。格好をつけてるよにして、様にはならない。それは元々に備わっていない要素なのだと思つ。長髪の金髪男性、筋肉質の女性、そんな感じに需要も供給も少ない。例外も当然にある。格好がよければいい。それを満たす者には

一切の文句はない。そして、女はそこに適っていた。

「お兄さん、タバコは吸うの」

次の一手を考えていると、また女からの手が伸びてきた。都合よく事の進む状況に男

も惑うが乗らない手はない。流れに着いていく。

「気分次第ですね。吸う人と一緒にいれば吸いますし、吸わない人となら吸わないし。

一人でいる時もそのときの心持ちで変わります。あまりタバコに執着はないんで、無い

なら無いでも構わないって『うぐらいですかね』

この言葉に嘘はない。男にとって、タバコは気休めか武器ほどでしかない。吸つてる

様に色気を感じるという女が相手なら何本でも吸うし、明日から法律で全面禁止される

というなら特に意見はない。

「そう。似合いそうだから、もっと囚われた方がいいわよ」

「そうですか」

「そうよ。お兄さん、中々綺麗な顔立ちしてると思つわよ。もう少しワイルドに男臭く

したり、格好つけたりしたら結構良い男になると思つわよ

「そんな・・・・俺なんか全然ですよ」

わざと萎縮してみせる。相手のペースに巻かれてるフリをしこちらの間合いに入れ

込む。上下関係は成立している。車内の二人の女性のように。ただ、

それをどう利用す

るかは本人次第だ。牙を剥き、上を食つてのける逸材の下位もいることを心得ていなけ

れば、それは下にどつてはやりやすい限りになる。

「お兄さん、モデルか演技の経験は御有りかしら」

「いえ、そんなのあるわけないじゃないですか」

「勿体ないわね。折角の素材なのに活かさないとダメよ」

男は魅力的な顔をしている。世の人間の十中八九は彼を男前と判断するに違いない。

それも、周辺にいるような仲間内のレベルではない。「この男には何かがある、と思わさ

れてしまうものがあるのだ。それは「うした一般社会の中に紛れていようと、分かる者には分かつてしまう。感性の鋭い人間は同じ類の者を察知する嗅覚があるものだ。

「ありがとうございます。お客様にそんなことを言つていただけたるなんて光榮です」

「なにもお世辞で言つてゐんじやないのよ。私、そういうことを言つ的好きじやないから。お兄さんはこんなタクシードライバーなんかでこちやいけないわ。どうかしら、

芸能の仕事に興味は

「芸能・・・・・ですか

「私のこと、知つてゐるでしょ」

「はい、存じてます」

女の名前は久留米雀だ。今まで気づいてる様子は出でなかつたが、最初からもちろん認識している。密のプライバシーを説明することはしない。相手から開放するまでは。

女は一本目のタバコに火をつけた。後者の女は前者の女の話に口を挟んではこない。

暗黙の中で一人には通じている何かがあるのだらう。出るべきところ、そうではないと

こひ、それが出来上がつてゐる。

「あなたは磨けば光る。だから、お兄さんにその氣があるなら私がサポートしてあげ

るわ。人脈は広いから心配しないで」

男は言葉を失くす。返答は決まっている。あくまで、悩んでいる

仕草をバックミラー

越しに女に届けているだけだ。流れる会話の一につにすぎないが、それは男の人生を左右

させるだけのこと。即答などするはずはない。そんなことするのには、余程の自惚れ屋か

頭の悪い人間だろう。

「すいませんが、今すぐに返事できる内容じゃないといつか

「まあ、そうね」

言いあぐねる男の気持ちを察したように女は早い言葉を投げた。放つた餌に難なく引っ掛かる素材に用はない。自分が名の通った女女の側からしても、優だから安心だろう、

と楽観した人間に興味はそそられない。

前者の女は後者の女に言い、久留米雀の名刺を男に渡させた。

「返事はいつでもいいわ。気が変わったら、その電話番号にかけてちょうだい」

女から要求を受け、男も自分の名刺を渡した。

「大田恵一ねえ、普通の名前だこと」

「すいません」

「いいのよ、自分で決めるものじゃないんだし。私もね、芸名なの。本名は教えないけど、いたつて普通よ。親からみても、子供の一生に係わる事だから無難な選択をするんでしょ」

車は目的地へと到着した。伝統的で古調な建築と未来的で新調な建築が周囲に並んでいる。人の往来は激しく、平日の昼間とは思ひがたい。その渦の中へ、後部座席へ乗つ

ていた女二人が巻き込まれていく。都会の人間はよくもあんな不規則な流れに対応して

いけるな、と思う。の中に放り込まれれば、男なら吐き氣を催す。いつからか、孤独

に身を寄せる生活を安息としてしまっていた。抜け出すのは困難な絡みに嵌つて。抜け

たいと思つたことなどないが。

女は去り際、催促の言葉を残していった。男はそれに作り笑いで応える。当然に似た

展開だが、全て男の思い通りに事は運んでいた。回答を先延ばしにしたのは次の展開へ

繋げるため。結果、女の名刺を手に入れることが出来た。並みの暮らしを続けていて、

こんな転機の出会いをする可能性など皆無に等しい。大物女優と会い、スカウトの誘いを受け、連絡先を知る事など。

男は自らの成果に笑みをこぼし、太陽へそれを持った。

その2（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

明朝、男は渋谷の高級マンションを訪れていた。良い獲物に会えた喜びもあり、気分も珍しくいい。しばらくしてキャバクラから帰宅した女も雰囲気からそれを察し、そこを突こうと甘えを出す。男もそれに応じ、行為は白い光の差し込む部屋で続けられた。

男の制圧、女の喜色、一つに繋がった二つの肉体から欲が噴き出す。行為が終わると、男は天井をどこといふこともなく眺めながら考えを巡らす。甘えて

くる女は適当に往なしておく。女は終わってからも男の体を物欲しげに毎度触つてくる

から。泡姫時代に嫌気が差したはずだが、血は男によつて再び戻つてしまつたらしい。

「そんなに俺の体が好きか」

「好き。大好き。独り占めしたい」

女は男の体を愛おしく抱きしめる。この体を自分だけのものにしたい。他の誰にも渡したりしない。

「困った奴だな、お前は」

「困っちゃう、私も。離れられないんだもん」

男は泡姫の頃の女を知らない。女と初めて会つたのは今も働いているキャバクラだ。

男はそんな場所に興味はなかつたが、別の興味があつた。なので、この手の店に通つている会社の先輩に仕向け、良店に連れていくつもりになつた。

そのときに男の隣

に座ったのが女だった。店での名前はしおり、今は光村沙耶として接している。最初は

今どきのギャルという印象だったが、よく話していくと客につまく溶け込む術を持つて

いると読み取れた。甘え上手の聞き上手、さらに容姿も口を挟むところはない。会話の

内容からも、客の立ち入った部分まで聞き出すことをしていることが分かつた。それが

男の望む、別の興味の部分だった。この女は使える、そう判断する」と男は女を口説きに

かかった。ミーハーなところのある女は男の外見に好印象を抱いており、その日のうちに

連絡先を交換する。それからメールでやり取りをしたが、女の文章が客に対するそれ

ではないことは分かりえた。すぐに電話でのやり取りへと変わり、会う約束を交わし、

初めてのデートで女の家で性交渉まで進んだ。女は泡姫の経験を隠していたが、ある日

に男へ打ち明ける。隠していくことが苦しくなるほど、男に嵌つてしまっていたから。

男はそれを咎めるどころか、変わらぬ態度を続けてくれた。それで、女の心は完璧に男に持つていかれてしまった。

女は男を愛している。結婚したいと本気で思っている。将来の家族像を妄想すること

は日常茶飯事となっている。子供は一人か三人、いくつになつても愛情の絶えない関係でいたい。そう切に願っている。ただ、女の希望には障壁が存在する。男は女を愛して

はいなかからだ。女には真剣な恋でも、男には見せかけでしかない。

この体を時間的に

遊ばせてやる代わりに、女の特性を利用させてもいい。それだけのこと。愛情は一方的

なものであり、女はそれに気づいてはいない。

「恵一、私のこと愛してる」

「ああ、愛してるよ」

「どのぐらい」

男は考える素振りを見せ、女の目を見ながら告げる。

「どうにかしてやりたいぐらい愛してる」

その言葉に、女は鳥肌が立つほど感動を覚える。偽者の愛情を疑うことなく、感情の

深さを本望と抱きしめる。その欲が愛欲ではないと知らずに。

女は男の過去を知らない。女が知っているのは男の出まかせの情報だけだ。その裏に潜む本性など知る由もない。もしそれを知つたら、女はどうするだろうか。恐怖に慄き、必死に逃げ出すのだろうか。真逆に、それでも男から離れられないほど愛してしまっていいるのだろうか。

男は夕暮れ前、女が仕事場へ向かう時に部屋を出た。この日は休日だったため、ジムや飲み屋で時間を過ごし、ほろ酔いで家に帰った。男は会社の寮に住んでいる。社員寮

といつても男性しかいないので、無意味なむさ苦しさが建物には充満している。住人の平均年齢も高く、何という理由はないが汚らしいような錯覚も生まれる。部屋は狭く、

快適とは言いかたいが、男性の一人暮らしにはこれぐらいで充分だ。

住み心地は悪くはない。労働時間の長い仕事なので、一ひとで暮らしている分は金は膨れていくばかりだ。

男は基本的に物欲に乏しい。愛欲にも飢えていない。その分は全て出世欲へと回つて

いる。人間として高い位置、それが欲しい。今まで自分に傷を与えてきた奴らを見下し、手玉に取れるだけの位置が。物欲も出世欲に繋げるための欲、愛欲も出世欲に繋げるた

めの欲 そう決めている。これまでの泥にまみれた人生の精算には
それが必要だ。男は

瞑想を巡らせる。どうすれば、形而上的に舞い上がる事が出来るのか。
日付の変わる前に寮の大田恵一の部屋の明かりは消える。その様子を遠くから眺めて

いる一人の男がいた。男は踵を返し、夜道を歩き出す。今日も何も変化は起こらない。

それでも、男はたまはこっそり大田の動向を窺っている。男は刑事をしている。名前は亀谷右京。大田を追っているのには当然に理由がある。

それは彼が起こしたはずの過去の事件によるものだ。その事件は解決している。大田で

はなし別の男性が逮捕され、加害者であることを認め、今も刑務所で罪を償っている。

いると確信し、こう

して仕事外の時間に現れている。
過去のあの男の目は何かをしでかした目だ。現在の目はこれから

を睨んだ田だ。あの男はこのままでは終わらない、そう思っている。何かが起こつてからでは遅い。未然に

食い止め、過去の過ちも浮き彫りにさせてやるんだ。そう決意した
男の目は夜の闇に光
を放つていく。

昼下がり、空席のタクシーを走らせる大田に予約の連絡が届く。
それはGPSによる
会社からの無線ではなく、男の携帯へと個人的に寄せられたものだ
った。年季の入った
ハスキーナ声には機嫌の良さも窺え、男は手応えの有無を事前に予
想しえる。

昼間から人通りの多い赤坂の名所近くへ位置づけると、約束の時
間まではあつたので
男は以前に手にした名刺を眺めていた。成功の空想を描いていると、
車窓を小突かれる
音がする。助手席の窓を開けると、女性が軽い笑みを浮かべて立つ
ていた。女性という
より、女の子と表現した方がいいような感覚を受ける。

「今、いいですか」

乗車をお願いする意味だろう。女の子がこちらに向ける笑みはな
んとも可愛らしい。

ちょっと首を傾げてるあたりがそれを増しへさせる。

「すいませんが、予約のお客様を待ってるんですよ」

えぐつ、と女の子は落胆する。隣にいる二十歳代後半にみられる

女性と一言二言交わ

すと、再び助手席の窓から顔を出した。

「分かりました。すいません」

そう言い置くと、女の子は女性と困った表情を見合わせる。よく
見てみると、女性が

二人で持つには過剰なほどの大荷物がある。男は腕時計で時刻を確
認し、身を乗り出す

よつにして大きく声を掛けた。

「どちらまで行かれるんですか」

振り向いた女の子の告げた行き先は近場だった。車なら五分もあれば着くほどの距離のところだ。

「いいですよ。乗ってください」

「えつ、いいんですか」

「はい。予約の時間まで少しあるんで大丈夫ですよ」

「やつたつ、ありがとうございます」

女の子ははしゃぐように喜んだ。その笑顔は女の子の先にある太陽に見劣りしないだけの質を放っている。若さから成る輝きは侮れない。倍数に等しいほどの力を持ち合わせているのだから。

大荷物はトランクに積めて、車内にもいくらかを持ち込んだ。後部座席に荷物とともに

に女性が座り、助手席に女の子が座る。左隣から移ろってきたのは甘みのある香水の匂いだつた。

「ありがとうございます。ホントに助かりました」

「いえ、僕は普通の事をしただけですから」

女の子は言葉の通りの表情を見せていく。言葉は弾み、表情は生き生きとしている。

このぐらいの年代なら、毎日が新鮮で楽しいのだろう。自分にはそんな時期はなかつた

けれど、そっちが通常だ。

「近いんですけど、荷物が多いから車じゃないとダメだなつてなつて。でも、あんな

大荷物ぶらさげてタクシー待つてるとか超目立つじゃないですか。だけど、ちょうど

いいところにタクシーがいてくれて。しかも、お兄さんみたいに超良い人でラッキーでした

した

「運がいいですね、お客様

「ホント、そうですよ」

よくいるタイプの若者といった感じだろうか。少なくはあるが、この年代の子を後ろに乗せることがある。運転手なんかにはまるで興味がなく、後部座席で携帯をイジつていることがほとんどだ。話を耳にしていると、とても着いていける内容ではない。そうしようとも思わない。もちろん、若者の全員がいつであるとは思つちゃいない。そんな奴らのために、一部の優等生を同じ括りにするようなことはしない。そんなことしたら、

男まで昔はそんな括りの中の人間だったことになってしまつ。

「ずいぶんな荷物ですね」

「そうなんですよ。重いつたらないし。だからって、引きずつたりできないし」

見たところ、大荷物の正体は衣類だと思われる。外から見えるものもあるし、トランクに詰めてあるものもある。一人に対しても相当な量だ。買物や旅行の類による多さでないことは読み取れた。

「スタイルストとかじゃないですね」

「違いますよ。自分で着る用です」

そうだろう。女の子は演者の側の人間だ。裏方の存在感ではない。華々しい場に身を置く仕事をしているはずだ。

「私、スタイルスト見えますか」

「冗談めかしく聞かれた。

「いや、 stylistにしては可愛すぎるなあつて思つて」

「うつひょ、 可愛すぎるだつてえ」

男の煽てに乗り、 後部座席の女性へと感情をひけらかす。 女性は裏方の人間だろつ。

単純に見て、 華がない。

「ただ、 洋服がとても多いんで」

「ああ、 これはプレゼン用なんです。 私、 モデルやつてて。 今度、

ブランドとコラボ

する企画があつて、 そのプロデュースをするんですよ。 それの会議が今からあるんです

けど、 そのためのもので」

「へえ、 淫いんですね」

「いやあ、 まだまだ全然ですよ」

モ、 デルか。 身長が低めなどころを見ると、 テイーン系の雑誌だろうか。 身につけてる

洋服やアクセサリーからしても、 そんな印象だ。 シンプルなところもあり、 派手なところもある。 冒険をしたいが、 枠を外れるのは恐れる年頃らしい。

「運転手さん、 私のこと知らないですか」

不意に言われたので、 虚に入られる。 走行中なため、 助手席の顔を確認はできない。

さつきまでに目に入った記憶から女の子の顔を浮かべる。 どうにも、 男の過去にそれは無い。

「すいません。 疎いもので」

「いいですよ、 謝らないでも。 私が出てるよつた雑誌、 運転手さんは見てないだろ

から」

言葉から察するに、 この女の子は男より年下の年代なら一般的に

知られてるぐらいの

認知度の子なのだろう。確かに、煽てで使つたが「可愛わざる」という表現は行き過ぎ

ではないと思う。男が女の子と同年代で、正常な人生を歩んでいたら間違いなく恋心を奪われていることだろう。

「そうだつ。運転手さん、写メつて撮つてもいいですか」「いいですよ、そのぐらい自由に。何を撮るんですか」

「運転手さん」

「僕の、ですか」

はい、と女の子は頷く。男には理由が掴めず、返答に迷ってしまふ。

「どうして、また僕なんかを」

「ブログに載せたいんです。私、自分のブログも持つてるんで、折角だから今の事を

書きたくて。そこで、運転手さんの写真も一緒に入れたいんですよ」なるほど、そういうことか。ブログというものは、なんとなく認識している。日々の

何気ない出来事を掲載したり、様々な情報伝達のツールとして流行している。著名人が

日記的な活用をしているのも知っている。だが、男にとつては現実味のないものでしかない。

「申し訳ないですが、それは遠慮させてください」

「どうして。撮はないですよ。きっと、運転手さん田舎でタクシー乗る子とかいますよ」

「僕についても書くんですか」

「運転手さんさえよければ」

女の子の言葉はいやに通常的だ。現代の若者からすれば、いつも

て日常を切り取り、

見も知らぬ大勢の人間とそれを分かち合つことは普通なのだらう。

深みのない欲求の共

有、そんな自由気ままな要求に引き出されるのは御免だ。

「すいません。やつぱり、僕のこと書くのはお断りさせてもらひます。仕事中の事

を書かれるのは、会社の事なんかも係わってきますし」

そつかあ、と女の子の弾んでいた気は沈んでしまう。携帯を顎元にあて、なにか考え

ている。

「後ろ姿はダメですか。運転手さんが誰か分からないし、会社も分からぬようにするから」

再び、女の子は食い下がつてくる。何故、そんなにブログの掲載に固執してゐるのかは分からぬ。女の子にとって、ブログはそれだけの価値のある事物とこうことかもしけれないが。

「何で、そこまで僕を載せようとするんですか

「だって、運転手さん良い人だから」

「それだけですか

「それに、結構格好いいし」

やはり、男の考える通りのようだ。感情の共有、深みはない。男には理解しがたいが、

おそらくはこれが世の通常なのだらう。

「分かりました。折れますよ

「ホントに。いいんですか」

「はい。お客様には負けました」

「やつた。ありがとうございます」

写真は後部座席の女性に頼み、ポップな音とともに撮影された。

別に、緊張はない。

自分は風景の一部、そう思えば気楽でいられる。主役でもなく、脇役でも端役でもなく、

あるのかどうかも定かではないほど微小たる存在。有名モデルと対等に接しているの

ではなく、ただ姪の氣まぐれに付き合わされている叔父の類。

写真が撮れたところで、目的地へと到着した。女の子と女性は改めて感謝を男に告げ、

大荷物を抱えて去つていく。名刺が欲しいと言わされたので渡したが、意図は分からなかつた。

急ぎめに指定の場所へと戻つたが、客は一人で強く印象を醸す放送局の前に待ち構え

ていた。時間はあるからと突発的な客に対応したが、さすがに近場でも往復となると相

応の時間は経過している。

久留米雀とマネージャーは車に乗り込み、行き先に東京駅を告げる。新幹線で地方へ

また行くのだろうか。車が走り出すと、女は後部座席の窓を気持ち空け、タバコを吸い

出す。今日は喫煙の了承は取つてこない。一度取れば、あとは前に同じくといふところ

なのだろう。

「少し遅かつたじやない」

「すいません。予約車の表示は出していたんですけど、高齢の方が乗車を求めていま

して。聞いたところ、距離も近めだったので送つていました」

大まかな内容は引き継ぎ、大荷物の若者という部分だけ高齢者に変更しておく。この

場合、こっちの方が情を勝ち取れる可能性は高い。

「あら、ずいぶんと優しいのね」

「いえ、そんなことはありません」

どんな態度を取られるかと警戒はあったが、年齢を熟してゐるだけあつて冷静を保つて

いた。女優という職業はそれこそ作品ごとに違つ制作陣や役者と仕事をする。臨機応変

な性格が求められるはずだ。セリード一線を張つ続けてこなといつことは、その能力に長けていいるのだろう。若さゆえの暴走などはとつに過ぎ、皿口を確立し、寛容な空間を生み出す。

「正直、怒られるのかなと思つて緊張してました」

「えりじて。お年寄りの方を助けてたんでしょ。何を怒る事があるの」

「久留米さんほどの女優さんだと、我が強いんだろうなっていうのがあつて。それは決して自分勝手といふんじゃなくて、長く人生を歩いてきたからこそ自信という範疇において」

「そんなことないわ。まあ、そういう人もいるナゾね。私は割と温厚な方だと思つてゐるわ」

それを聞いて安心した。この年代、この職業に有りがちなギラつきを放たれる女だと多少やりすらい。だが、温和な女なら手なずけるのに難度は下がる。頭の悪い女に比べれば格は上だが、なんとか出来るはずだ。

「そういえば、この前の件は考えてもりえたかしら」

「この前

「芸能の仕事をやつてみないか、ってことよ。もつ忘れたの
「そんな、忘れるわけないじゃないですか。忘れようがないです
よ」

すぐに折れる事はしない。軽くホイホイと着いていく人間と思わ
れてはたまらない。

それでは、主導権は明らかに女に握られてしまう。そんな馬鹿な真
似はしない。手綱を

握るのは男、馬になるのが女だ。那样的なよう、慎重に攻めていく。

「じゃあ、返事を貰えるわね」

「なんというか・・・・・想像が出来ないんですよ、あまりに
懸け離れた世界で。

さすがに、イメージも浮かばないような場所へ自分を投げ出すのは
ギャンブルが過ぎる

と思うんです。だから、お受けするのは難しいかなと」

さあ、どう来る。そっちが大田恵一を好んでいるのは分かってい
る。そう容易く手を

放すのか、それとも縋つてくるのか。次の一手はある。それを出す
のがどつちからか、
という問題だ。二十代のタクシードライバー、五十代の大物女優、
どちらが交渉に打ち

勝つか。世間一般で考へるなら、勝負は見えている。だが、そんな
温い考へに浸かって

いるようなら勝負は返してみせる。その自信はある。

「想像が出来ない、か。それはそうね。当然よ」

一つ間を置き、新たな展開を打つよに続けられる。

「なら、単純に芸能の仕事に興味はあるかを聞いていい

芸能、男の本心としてはその仕事に興味などない。そこに集まる

人間に野心家が多い

印象はあるが、実際にテレビで見る番組に大したものは見当たらな
い。深い入口に入り、

どう抜けていけば出口があれだけ浅くなるのか見当もつかない。無くて支障のない番組を消していったら、新聞のテレビ欄はスカスカになるだろう。そんな世界に惹かれるわけがない。

「興味が無い事はありません。あんな華やかな場所にいられたら幸せだろうなと思い

ますし。ただ、自分があそこにいる事が全然浮かんでこないんです」

「なるほどね」

女はしばし考えに耽る。タバコを何度も吹かしてたが、本人にその意識は左程ないだ

る。バックミラー越しにこちらの顔を見遣り、開口する。

「なら、形を変えるわ。私の運転手になる気はない」

「運転手、ですか」

「ええ。こうやってタクシージャなく、私個人の運転手として毎日の送り迎えをする

のよ。今の仕事よりも良い待遇を約束するわ

隣にいる後者の女性に口を挟まるが、女はそれを制止させる。

「どうかしら。悪い条件じゃないでしょ」

悪いどころか好条件だ。女の思いはしかと伝わった。開けている懐の分だけ隙が生まれているのに。

「何でまた、そんなに僕を気にかけてくださるんですか」

「あなたにはね、何か強いものを感じるのよ。こんなところで見も知らぬ人間の送迎

をさせておくのは勿体ない。ならば、せめて私の近くに置いておくれ。機会があれば、

仕事場にも呼んでもらえるから。現場を見ているうちに、芸能界に興味が出てきたら私に

言ってちょうだい。いくらでも、後ろ盾をしてあげるから

女は男の気に惹かれていた。それがどんな種類の感情かを分けるには至っていなかつたが、心を搖さぶられるものがあった。この男は野放しにしておくべき人間ではない。

いつか何かを成し遂げる者の瞳をしている。そう直感し、側に置いておく事を選択した。

他の人間に盗られる前に、と。

「とても有りがたい話を頂いて、ありがとうございます。申し訳ないですけど、また

時間を頂いていいでしょうか。すぐには決められないでの。こんなふうに言つてください

るのは本当に嬉しいんですよ」

「分かってるわ。それなら、数日経つたらまたあなたに予約を入れるから」

話はスムーズに男へと傾いてくれた。男から手を伸ばさずとも、女から伸ばしてくれ

るので楽に事は運ぶ。才能のある人間を惹くのは才能。男に備わる気を感じ、女は自ら手を出さずにはいられなかつた。男は勝利への自信を高める。この女は俺のものになる、

植えつけるように言い聞かせた。

車は目的地の東京駅へ到着する。女性一人の姿はそこへ消えていき、それを確認すると男は両手で顔を覆つて笑い出す。男の望むばかりの展開に進む現状に面白さを隠せなかつた。今はまだ飛ぶための助走の段階、氣を緩めるのは好まれない。だが、思つままに駆けていくの足は機械のように正確に地面を踏みつけていた。

十七年前のある冬の夜、報せを受けた全ての者を戦慄させる事故が起こつた。徳島県

の吉野川流域でキャンプの集会に参加していた十七人が焼死したという報道はその日の

トップニュースで扱われ、人々に居たまれない思いを刻みつけた。当時、現場を目にした時には悪い夢でも見てるんじゃないかと現実を疑つた。こんな

惨事が有りうるのか、と眼前の光景を受け入れることは不可能に近かつた。消防隊から

すると、現場に到着した時点で火は噴くように燃え上がり、場所的にも消火活動

が難しく時間を費やした。刑事が現場に足を踏み入れる頃には、空よりも黒く焦げ尽く

された遺体や残骸が残されていた。奇跡を祈る氣も生じない。祈りたいのは当然の思い

だつたが、それがどれだけの無意味であるかを壊滅した跡が示している。さつきまでは

ここで楽しくキャンプに興じていたはずなのに、今は誰かも分からぬいような無残な姿

で運ばれていく。湧いてきた感情は悲しいといつものではなく、儚いというものが近かった。

その日、吉野川に集まっていたのは近くにある小学校に通う子供たちだつた。引率の

教師の一人を除く十八人が参加。再来週に控えた卒業式を前に、みんなで思い出を作り

たいと決まったのがキャンプだつた。夜に始まり、朝には終わり、教師も着いていくと

いうことで親御の了承も得られた。一人だけがインフルエンザでやむなく欠席となつて

しまつたが、合計で二十人が夜川に集まつた。全員でテントを設営

し、手分けして夕食

を作り、キャンプファイヤーを囲み、それぞれが楽しんでいた。そ

して、全員が寝静ま

つた深夜に事故は発生してしまつた。

キャンプに参加した二十人のうち、帰らぬ人となつたのは十七人。

そう、三人は助か

つたのだ。教師の一人、生徒の一人、いずれも無傷だつた。教師は子供たちが勝手に出

歩く事のないよう交代の見張り番をしていて、テントにはいなかつた。生徒は寝つけ

なかつたので二人で話していたため、早くに火の手に気づいて逃げる事が出来た。

平和で長閑な街に起つた衝撃的な事故は辺り一帯を悲しみで包んだ。それで終わる

のなら、事態は最悪のうちに幕を閉じただろう。悲しみはやがて憎しみとなり、怒りの

矛先は学校側へと向けられる。親御たちは学校と引率の教師を相手に訴えを起こした。

事態は泥沼と化してしまつた。裁判の結果は迷うこともない。引率の教師は火事の時に

現場で居眠りをしていて炎に気づくのが遅れたのだから。生徒の証言もあり、言い逃れ

の仕様はなかつた。勝訴によつて、親御たちの心の溝は僅かに埋まり、学校側は立ち直れない大打撃を食らつた。

亀谷右京は自宅にある資料を読み返しながら、十七年前の記憶を

起こしていく。あの

事故は未だに忘れることが出来ない。あの現場は今でもこの脳に焼きついており、定期

的に映し出される。男自身にとつても、忘れてはならないと決している過去だ。事故は終わってはいないと思つてゐる。いや、事故ではないのではないかと踏んでくる。そう考える時、いつも浮かぶのはあの少年の瞳だ。

男は瞳を閉じ、窓外の景色を見据えていく。視界には何も映らない。瞳の内側に血らの記憶にある景色を映し出し、感慨に浸る。澄んだ空氣、仄かな郷愁、溢れる自然、飛び交う意氣、何もかもが望むべきものなのに男はそれを己から廃れさせてしまいたい。

決別したはずの過去、なのに頭の片隅から捨て去る事が出来ない。片隅どころか、それ

はたまに脳内を汚染するように広がる時すらある。忘れられない影、忘れられない声、

それらが自分を苦しめる。一体、こつまでこの意識の中に屈座り続けるんだ。そうだ、

金だ。金さえ手に入れれば、手に余るほどの富さえあれば、この悪しき記憶を捨てる事ができる。自分を苦しめてきた物に満たされれば、精神は浄化されるはずだ。もう少しで抜け出せるはずだ。

瞳を開くと、息が荒いでいるのに気がつく。唇を噛み、氣を正常に戻そうと落ち着ける。

ここは東京、都会の渋谷の一等地。あんな田舎臭い場所の欠片もない。飾られた男と女が飾られた街を歩く景色に、過ぎた街並みの面影は存在しない。

「どうしたの」

言葉とともに、飾られた女の気配が舞い込む。男の体を後ろから

包み、裸の肌をしつ

かりと密着させていく。女は自らを飾り、男を飾られたものと位置づけている。だが、

今の男は飾りの有無の狭間で揺れていた。

「汗搔いてるよ。何かあつたの」

「どいてくれ」

「えつ」

「いいから、どいてくれって言つてるんだ」

強い言葉に女は怯む。『めんと歎き、男から体を離す。男がその場から離れると、女

は裸のまま取り残された自身が惨めになつた。視線を向けると、男は冷蔵庫から出した硬水を飲んでいる。

この展開はたまに生じる。男が何かを思つようにて窓外を見つめ、側に寄ると怪訝にされる。あまり感情を表に曝け出すタイプではないのに、その時はムキになるように怒り

を見せて女を冷たくあしらう。何に心を悩ませているのだろうと心配になるが、それを訊ねてはいけない気を出されてるようで聞く事ができていない。大田恵一には心の傷がある。それが何であるかは分からない。それでも、女は変わらず男を愛している。傷の

内容を聞いてくれるなというのなら聞きはしない。私はあなたを想つてゐる、それでいい。

元々、影のある男性は好きだ。ただ、そんなことは関係ないほどに男に惹かれてしまつてゐる。

水を冷蔵庫に戻し、大きく息をつくと男は「こちらに歩いてきた。
男の裸は文句のない

素敵な美だ。筋肉は付き過ぎていない程よくて、腹も筋が確認でき、肌も一切の汚れが

見当たらず、容姿は言ひ「い」とがない。この体にやさつきまで抱かれていたんだと思うと、

それだけで浮かんでくる感情がある。

「悪かった。ごめんよ」

そう女の耳元で囁き、孤独になつていた体を抱きしめる。温かさは体内にまで沁みて

いき、心まで伝わっていく。

「ううん、全然いいから」

それで女は満たされる。簡単に動く純な女の感情は、愛のない男にとって利用すべきものでしかないのに。

その3（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

数日後、男は肌に慣れない空間に身を置いていた。四方の壁の彩りには強めの色味が多く使われており、それらが我を出そと戦つてゐるようで妙なマッチングをしている。

照明は対称的にシンプルを心掛け、その合わせり具合がまた変に芸術を感じさせられてしまう。

男は明天家で待ち合わせをしてゐる。六本木のヒルズにかまえる四川料理の名店を男は選んだ。相手の位に合わせた品位の高い店をと思ったが、向こう側からあなたが緊張しないお店でいいわよと言われたのでここに決めた。相手にそうは言われても、さすがに普段通つてゐるような定食屋や居酒屋に呼び出すわけにはいかない。会社の先輩に教えてもらつた店ではどれも陳腐で役不足であり、大御所を招待する場所ではない。ここも今の自分には不相応といえるが、心が縛られることはない。

明天家に来るのは二度目になる。前回は十歳年上の客室乗務員に連れられて、対応もなんら特別なものではなかつた。だが、今回は相手も名が売れていて、自分への対応も明らかに変わつてゐる。

「やあ、今日は来てくれてありがとう」

店の奥から現れたのはオーナーの張偉だった。穏やかな表情と油

断した腹の出具合は

健在だ。その姿はそのまま店の入口に飾られてある彼の肖像画に重なる。自らを堂々と

看板にしようとは中々のナルシストとも取れるが、自身をキャラクターとして広告にす

る事で繁盛へと結んでいくのだろう。料理番組で何度も彼を見た事もある。地道に店を

切り盛りするよりもそつちが効果的と知っている。自分が世に好感される人間であるのも分かっている。図太いかもしれないが、それがこの店にとっての近道なのだから間違つてなんかいない。間違つてるのは、それを知つてやらない奴だ。

明天家で食事がしたいと電話を入れると、わざわざ個室を用意してくれた。友好的といえど、一度だけ乗車したタクシードライバーに対しても、ずいぶんな配慮といえる。あの

時の車内でのやり取りがそんなに向ひつの気持ちを緩和させたのだらうつか。

「いえ、こんな個室をありがとうございます」

「いやいや、君には貸しがあるからね。このぐらひ、なんてことないよ」

貸し、前に言つた店の従業員の姿勢への文句か。おそらく、その後に接客担当者は喝

を入れられたんだろう。とある客からの意見、とでも置かれて。まさか、その客がここにいる一十九歳の若僧とは思つまい。

「あんな大きな口を叩いておいて、またのここの来店するなんてつて思つたんじゃありませんか」

「何を言つたか。是非、君には来てもらいたいと思つていたよ。逆

に、あんな意見をウ

チの店に持たれたままになんかしておけない」

「なるほど、それもそうですね」

男の言葉に、張偉は豪快に笑った。男も歯を見せて笑みを浮かべる。無論、作り笑い

だが。一つの世界で登り詰める人間、それが目の前の男性にある。ただ腕がいいだけで

は限界もある。ない人間もいるかもしねりが、大抵はある。人間なんて大したことは

ないのだから。ならばどうするのかとなれば、武器を増やすことだ。張偉にはこの性格がある。これだけの人柄が備わっているなら、後を着いてくる者も多いはずだ。

その時、個室の扉をノックする音がした。失礼します、という声とともに女性従業員が扉を開く。お連れ様が来られました、という声とともに静かに入ってきたのは久留米雀だった。

「やあ、どうぞどうぞ。ようこそ、いらっしゃいました」

張偉は大物女優を快く迎え入れる。意識的にか無意識にか、その笑顔の量が増してる

ような気がした。まあ、ここで何か粗相でもやらかす事でもあれば、大きな客を逃して

しまうのだから仕方がない。この客を味方にするか敵にするか、明天家にとつては一つ

の試練になるのかもしれない。あの老いた口から今後に発せられるであろう店の評判は

それだけで広告にならう。それが良いものか悪いものか、それによつて広告の価値が変化する。

女は張偉の導きで男の対面の席に座る。一人に対しても結構に大きな円卓のターン

テーブルだった。四人から五人用のタイプだと思われる。大物女優の接待に戸惑つて、

見栄えも縮こまつたものにならないようにとしたのだろうか。店側の意図は分からない

が、無難に正解といえるだろう。あのぐらいの人間にもなれば、安っぽいのは好まない

はずだ。洋服だって、アクセサリーだって、どれだけの値段か想像もつかない。光沢を

放ち、煌びやかな印象は庶民を近づけない。人生において、ある一定のラインを超えた者でないと足を踏み入れることの出来ない域だ。

女性従業員は部屋から去り、初めの接客は張偉自らが行つた。メニューを二人に差し

出し、おすすめを口にしていく。季節やら産地やらのこだわりを話す言葉はどこか台詞

じみている。本人にはそんなつもりはないのだろうが、単純に緊張しているのだろう。

女はそのおすすめをオーダーし、張偉は「ゆっくりと言い残して部屋を去つた。

「お喋りの上手なオーナーね」

感想か皮肉か、分からぬ程度に淡々と女が言いこぼす。媚びを売る者、自らを売る者には慣れているようだ。

「ええ、話しているととても楽しいですよ

「あなたがこんな店を知つてるのは思わなかつたわ」

部屋をぐるりと一周見回し、最後にこちらを向く。目の前の男に相応しいといえる店

とは言えない。容姿なら分かるが、経済的には似合っていない。対

するの方はこうい

つた高級店がよく合っている。中華料理はそんなに食べないらしい
が、たまには食べて
みたいからと諾了した。

「偶然、オーナーと知り合いになりました」

その経過については、店をここに決めた報告をした時に話してある。男が以前にここで食事をした事があり、その後に張偉をタクシーに乗せた際にその話をすると是非また

食べに来てほしいと言われた、と。

「ふうん。タクシードライバーっていうのはいろんな人を乗せるのね」

あるときは中華料理店のオーナー、あるときは大物女優、あるときはモデル、確かに

それは言える。ただ、そんなに華やかなものでもない。大抵はどこの誰かも分からぬ

人間を目的地まで送り届けるだけだ。

「ところで、本題の方なんだけど」

ああ、と男は畏まる。本題とは、もちろん前回要請された久留米雀の専属の運転手に

対する返答だ。

「一つ、お伺いしてもいいですか」

「何かしら」

「具体的な待遇を教えてもらえますか」

男の言葉に、女は気をよくする。男は漂っていた浅瀬から深海へと潜り込んできた。

この話に前傾になつている証拠だ。もう何度か押せば、じゅりへやつて来る。そう女は踏んだ。

「今の会社の待遇を聞かせてちょうだい」

「はい。固定給が一十万円以下あつて、それ以外は歩合給です。月によつて違います

けど、合計で四十万円弱ですね。乗務にあたる出番は毎に十一日、その後の明番が月に十一日、残りの六日から七日が休日になつてます。会社の寮に住んでるので家賃は安く済んでます」

なるほどね、と女は考え出す。今よりも良い待遇を、と約束したのだから、それ相応

の提示はしないとならない。かといって、運転手にそれまでの金など払えないだろ？。

金があるかないかではなく、職業的に田の田を見ない。

「月に五十万円出すわ。これでどう」

男は用意しておいた驚きの表情を見せる。女はビックリと言わんばかりだが、男はそれ

ぐらにはしてくるだろ？と予想していた。この女の目的は分かつている。男を芸能界に

入れさせたいなどといつ思ひはもはや半分にも満たないであら？。残りの半分以上を埋めてきているのは独占欲。男をどうにかして自分の手元に置いておきたいという我欲だ。

卑しい感情だが、そんな卑しさなら誰しも持つている。

「勤務時間は私の仕事に合わせてもらひながら、田によつて変わつて不規則になるけど、

拘束時間は少ないはずよ。簡単に言つてしまえば、私が車で移動する時間だけがあなたの労働時間になるわけだから。テスクワーカーもないし、今に比べれば相當に楽でしょ。

そんなにタイトなスケジュールにはしてないから休日もあげられるし、地方に泊り込み

の撮影でもあれば連休にもなるわ

女は畳み掛けるように男を諭していく。

「住まいは私の家を提供しましょう。今住んでる一軒家の他に、二十三区内にマンシ

ヨンを一部屋購入してゐる。別荘も避暑地と海外に一つずつ持つて、休暇が出来た時の旅行のために国内と国外に購入したんだけど、その時間も無い時には環境を変えたい

時にそこに移るの。私の代わりに部屋に問題ないか見ておいてちょうだい」

やりすぎだなうと思つほどに女は押した。文句のつけようがない条件だが、ここまで

されたら何か裏があるんじゃないかと警戒心を抱かれるのが普通だ。なるほど、そうし

てまで大田恵一を手にしたいのか。大物女優といえど、一人の女。良質な男性を前にし、

金に物を言わせてもと欲を見せた。そつか、なら乗つてやろう。お前の望むようこの

体を動かしてやる。ただ、残念なことに心は動きはしないが。

「どうかしら。悪い条件とは言わせないわ」

女はすでに男を手にしたつもりでいる。悩んでいる男に対し、人の子ならば金に田が

眩むのは当然のことと上に立つて見下ろしている。本当は見下さされているのは自分と

「う」とに気づきもせずに。男を手で転がしていると思つてゐる時点で、女はもう男の手で転がされている。

「分かりました。受けさせていただきます」

「条件の良し悪しで決めたわけじゃありません。全く判断基準に

してないかとしたら

違いますけど。それよりも、そこまでしてくださる久留米さんの気持ちに応えたいと思

つたから受けた事にしました。そこは分かってください」

「ええ、そうでしょうね。あなたは他の人間とは違うもの」

そうは言いつつ、女は男の言葉の八割は嘘だと思った。所詮は金を積めば人の心などを動かせる、というのが本心だ。女自身、今自分がしている事の遣り方は分かっている。

汚い方法だとも思う。だが、それ以上に目の前にいる男が欲しかった。未来の事は未来に考えればいい。今はただ男との未来の選択権を手にしなければならない。そのために

手荒な方法で躍起になってしまった。まあ、結果が着いてきたのだから良しとしよう。

この男は自分の手元に来る、それでいい。

男は翌日に会社へ退職願を提出した。上司には驚かれ、引き止められた。若い世代は重宝すべき存在だし、男のルックスも単純に客の受けがいい。勤労に問題はなかつたし、

人間関係も同じだ。実家の親が病気がちになつたので上京させて面倒みる事にしたから

もつと短時間の勤務のドライバーの仕事に就く事にした、と言いつて上司も渋々納得した。

退職日を相談すると、今月末までといつて落ち着く。あと三週間、この古い廃れた仕事を我慢すればいい。

もう一つ、我慢すべき事があった。何やら、大田恵一への乗車の予約が増えている。

個人的な指名が来る事は水商売じゃあるまいし、普通は無い。なのに、日に一件か二件の指名が会社の電話に届いてくる。それも、若い声ばかり。同僚はどうしたもんかと頭を巡らせていたが、男にはその理由は分かっている。それを話すのは面倒くさいので、

同僚には適当な嘘を付いてはぐらかしておいた。

「ホントだ。超格好いいじゃん」

この日は女子高生二人からの予約が入った。指定の場所へ迎えに行くと、後部座席に座るなりノリのいい声が響く。田的地區は予想通りに最寄り駅。予約する者ほとんどが数区間ほどの近場を口にする。それはそうだ、彼ら彼女らはタクシー移動に興味などないのだから。興味の先は運転席にいる男。その顔を揉むがために、わざわざ歩いても

いい距離にお金を費やしている。

短い乗車時間を無駄にしないとばかりに、女子高生からいろいろな質問を投げられる。

彼女の有無、女の遍歴、通つてゐる美容院、使つてゐる化粧品、といったどうでもいい質問をインタビュー記者のように攻めてくる。仕事用の笑顔を保ち、満更でもない感じを出

しておくが腹底は煮えていた。連日、同じような質問に同じような答えをする虚無感。

こういうミーハーな人間がいるから嫌気を差し、そいつらのおかげで人気者商売は成り立つている。困った循環だ。

女の子からの連絡が携帯に届いたのはそれから一週間ほど経つた

頃だった。見覚えの

ない番号からの電話を受けると、若々しい弾けた声が聞こえる。女子からの軽い説明

があり、電話口の女の子の正体を知る事が出来た。片柳彩子、以前に大荷物を下げて乗車した有名モデルだ。

あの時はまだ可愛い女の子としか認識がなかつたが、その後に漫画喫茶で女の子の姿を目にした。本人の姿ではなく、雑誌に載つてゐる写真での姿を。書店やコンビニで立ち読みするには気兼ねがいる系統の本だったので、個室で誰に見られる事もない場所を選んだ。表紙にいる三人の女の子の中には、他の二人は知らない。中のページを捲つて

いくと、多くの特集コーナーにその姿はあつた。季節を先取りした洋服の他、制服を着ていたり、水着を着ているものもある。どれもモデルっぽいポーズを決め、清く明るい

笑顔を振り撒いている様は先日の姿と違いも感じられた。かなり距離の近かつた関係が

砕かれる。雑誌での女の子は紛れもなく有名モデルだつた。そうだ、元々こんな運転手にあれだけ好意的になつてゐたのは救いの手を差し伸べたという事だけなんだ。

そう思つていただけに、女の子からの連絡は意外だつた。確かに名刺は渡したが、こ

んな折り返しがあるとは思つていなかつた。どうこう意図で名刺を欲したのかは知らないが、あの関係はある場限りのものだつと決めた男の想像を良い意味で裏切つた。

女の子からの指定場所は東京駅だった。地方口ケから戻つてくるから送迎して欲しい、

という予約だ。夜も一十三時を過ぎた東京駅から吐き出されてくる人々は大体が負に覆われている。午前中にそこに飲み込まれていく人々とはエネルギーが違う。夢を持ち上

京してきた若者と夢に破れ帰郷していく若者の差を見るような感覚だ。肩が落ち、背中

が丸まり、夢を失ったように俯く人間の連續。流れを生み出す者ではなく、流れに飲ま

れていく者の連續。自分は今どっちにいるだろうか。後者寄りだろうか。それでも、た

だそこに留まっている奴らとは一緒じゃない。もうすぐ、前者になる事になる。これまで見くびってきた奴らへの報復だ。

その時、助手席の窓を小突く音がした。顔を向けると、男の方へ手を振りながらアピールをする女性がいる。片柳彩子、もう一人は前回の時にもいた二十歳代後半の女性だ。

女の子からの予約の電話でマネージャーも一緒にいるからと言っていたので、女性は女の子のマネージャーなのだろう。目的地は四谷、女性の自宅へ車を出す。後部座席に

いる一人の話し声は翌日のスケジュールの確認に聞こえた。

「ねえ、運転手さん」

後ろからの会話が途切れるごとに、女の子はこちなりに話し掛けてくる。

あの夜中の駅から

出てくる弱い人間たちには重ならない快活な調子だ。若さとは万薬に勝る栄養源なのだろう。

「ここの前のブログ、もしかして迷惑かけちゃったかな」

言葉の意味はすぐに分かった。前回乗車した際、押し切られて後ろ姿の写真と経緯の

文を女の子のブログに掲載する事を許可した。その日の夜、女の子のブログには男との

一連の出来事を書いたものがアップされており、男もそれを漫画喫茶のパソコンで確認

している。男が大荷物での移動に困っていた女の子と女性を予約車であるのに乗せた事

への感謝の文章があり、写真には男の姿を褒める一文が加えられていた。それを見た

女の子のファンである若者たちがここの最近の妙に男を指名する乗車予約を続けてるのだ

う。

「ああ、最近なんか僕を指名してくれるお客様さんが多いのはあれのおかげですか」

今初めて気づいたようにする。本当はうそだらしているが、この場のために満更でもない雰囲気を作つておく。

「こめんなさい。分かんないよ」としたはずなんだけど、どうかしらから運転手さん

の情報を手に入れた人がいたみたいで。私のところに来たファンレターで運転手さんの

タクシーに乗つたつて書いてあって

女の子は小さめに頭を下げる。健気な印象を受けた。確かにブログから男の事が割れ

たのだが、女の子の文章からそれを特定するのは無理なはずだ。今

のネット精通者から

すれば、あんな氣にもかからないような後ろ姿の写真からでも本人を割り出す事が可能

なのだから。便利が過ぎる分、その隣合わせにこうした現実もある。

「いえ、いいんですよ。こんなのすぐに治まるに決まっていますから。それに、なんか

僕も人気者気分を束の間でも味わえたんで」

そう男が笑うと、女の子も続けて笑った。邪氣の無い笑顔は淀んだ男には眩しく思えてしまう。そんなもの、とうの昔に置いてしまった。いつ、どこに捨ててきたのかは痛いほど憶えている。

それからは女の子からの土産話が続いた。今日は福井県の田舎町に行つて、ドラマの撮影をしていたらしい。演技をしてるのは知らなかつたが、ちょく

連続ドラマにも出演しているそうだ。キャラクターから、呼ばれる作品はコメディだけ

なのが少し不満と愚痴る。

「いいじゃないですか。コメディ、楽しそうで」

「楽しいは楽しいんですけど、もっと感動系にも出たいんですよねえ」

「気持ちは分かりますが、そやつオファーを貰える事って有りがたいと思いま

すよ。あなたにはコメディの素質があるから求められてるんであつて、そやつて求め

られるのって凄い事なんですから。あなたには人を笑顔にさせる素質があるって事なん

ですよ。人を笑わせるのって難しいし

ああ、と女の子は男の言葉に理解を示す。

「良いこと言いますね、運転手さん」

「いや、大した事は言つてませんよ」

「きっと、運転手さんみたいな人が感動系に出た方がいいんですね」

「そうじゃないですよ。人にはそれぞれ得意分野があるわけですから。そこを伸ばしてつた方が個性に繋がりますよ。個性はその人を光らせてくれますから、どんどんやつていくべきです」

女の子は納得し、何度も頷いていた。女性も男の言葉に同調するようにし、女の子を諭していく。

車は目的地の四谷のマンションに到着した。女性は女の子に明日の集合時間を確認し、よろしくお願ひしますと男に一言添える。女の子の事を、という意味で。男もはいと会釈をすると、マンションの中へと入っていった。

次の目的地は青山、女の子の自宅へと車を出す。そこからは女子の一方的な質問攻

めが続く。タクシードライバーの仕事に関する話題から入り、普段

の男の車事情、趣味、

生活、思考、と滑らかに深みへと潜っていく。会話 자체が得意なのか、事前に話す内容

を決めていたのか、司会のように話を入れ替える。

「どういう人が好きなの」

この質問に至ったときには女の子の顔は緩んでいた。会話を決めてきたのなら、おそらく最終的にここに行き着きたかっただろう。姿勢も次第に前に傾いてきて、存在を

主張してきている。いつの時、頭には一択が並ぶ。すぐ後ろにいる質問者をなぞった

ような言葉にするか、全く正反対にするか。あなたのよほど元気で

可愛らしい年下の子、

と言つたらどうなるか。あなたとは違つ落ち着いていて清楚な年上の女性、と言つたら

どうなるか。試してみたくなるが、ここは無難にしておく。

「そういうの、特に無いんですよ」

「ええっ。嘘だよ、そんなの」

「だって、誰にだって良いといふもあれば悪いといふもあるんだから。僕はその人の

良いところが好きです」

「ふうん。なんか、優等生な発言

不満だつたらしい。あなたのよつて元気で可愛らしい年下の子、と言つて欲しかった

んだろうか。

「じゃあ、彼女はいるの」

女の子の質問に、また男の頭には二択が並ぶ。いる、と言つたらどうなるか。いない、

と言つたらどうなるか。鎌を掛けてみたくなる。

「いません。残念なことに」

嘘はついていない。世間的に見るなら光村沙耶がそうなるのだろうが、あいにく男は

一度も彼女という概念で捉えた事はない。依存症な甘え女、とくらうにしか。利用に値する女は自分へ近づけていく。そして、女は蜜の香りに誘われるよう寄つてくる。

罪悪感なんてない。勝手に嵌つてくる奴が馬鹿なだけだ。男の本意も読み取れないのに

ふらふら来る方が悪い。

「彼女、作らないの」

「作りとと思って作れるなら万々歳ですよ。そんなに巧みにいく人なんて、よっぽど

の遊び人とかでしょ」「

「運転手さん、モテそうなのに」

「全然。そういうの、器用じゃないんです」

「へえ、と女の子は軽く頷く。何か別の事でも考えてそうな感じだ。
織り交ぜた不器用

さが効果を為してゐるのだろうか。そういった男性が好きな女が多い。
誘い巧みな遊び人

が好きな女なんて少數派だらう。

「ねえ、また運転手さんのタクシーを予約してもいいかな」

「どうしてですか」

意地悪を吹つ掛けた。女の子は返答を急ぎで用意していく。可能
性の高さを計るには
充分だった。

「運転手さんとお話してゐる面白いから」

「僕の何が面白いんですか。僕ほどつまらない人間もそついない
と思いますよ」

「そんなことない。楽しいですよ、すつじぐ」

「すいません。なんか気を遣わせちゃつてゐみたいで」

女の子はかぶりを振る。その意味は分かりもするし、分からなく
もある。男は特にと

いつて質の高い話などしていいない。それなのに面倒ごとついにどが
分からない。女の子

はただ単に男と話していふ事が楽しいのだろう。この時間をまた予
約したい、そういう
ことだ。

男は一つ息をつく。女の子はそれに反応し、顔を向ける。

「残念ですが、その予約を受けるかは分かりません」

女の子は何も言わない。疑問の表情だけを浮かべている。

「実は今の仕事を辞めるんです」

女の子の目が開く。疑問の表情はそのままにある。男の言葉の意

味が理解できない。

「何で」

「実家の親が病気がちになつて、上京させて面倒みる事にしたんです。だから、今のより短時間の勤務のドライバーの仕事に就く事にしました」

そう言つと、女の子は伏し目になつた。言葉の意味は分かつたし、それは納得せざるをえない内容だ。ただ、体の中で複雑になつているものは簡単には解けない。

「何の仕事をするんですか」

「個人の運転手です。その方の送迎だけをすればいいので、時間的にはとても余裕が出来ます。タクシーのお客さんで知り合つた方なんんですけど、その方が良い人で今に近い給料や次の住まいまで用意してくれてるんです。そういう話に甘思つたんですけど、折角の「好意なんで受けさせてもいい」といきました」

へえ、と女の子は呟く。空の返事だった。体だけをここに置き、中身は別のところに行つてしまつている。

空気が淀んだ頃合を見ていたように田的地區に到着した。代金を受け取ると、押し引きに構える。相手の出方次第で押すか引くかは決まる。願わくば、引く側になる方が好みしい。

女の子がバックを手に取る。そのまま行くのか、それとも止まるのか。バックの中を物色すると、手帳とペンを取り出した。手帳にすらすらと書いたのを破り、その切れ端

を男に差し出す。

「これは」

紙に書かれているのは英字が一行と数字が一行。それが何であるかは百も承知だが、一応訊いておく。

「私の携帯のメアドと番号。朝、予約する時に使ったのはマネージャーの携帯なの。

予約したいって言つたら、じゃあ私ので掛けなさいって。私の番号が通知されちゃうのが嫌だつたんだと思う。かといって、非通知で掛けるのも失礼な気がしたからそうした。

こつちが本物だから

「どうして、これを僕に」

また意地悪をしてみた。相手から押してきた時点で、上手にいるのはこつちだ。優位

に駆け引きをさせてもらひ。

女の子は何も言つてこない。何か言おうとしているが、的確な言葉が上つてこないよ

うだ。眞実はすぐにでも口に出すことができるけど、それはしない。口には出来ない真

実だから。なら、巧みに嘘でも付いてしまえばいいのにそれもしない。嘘を付くことが

苦手なんだろう。言いたいことはあるのに、喉元で塞いでしまう。何も言えずに、ただ

男の方を困つた顔で見ることしかできない。その弱つた表情が潤んだ目をした子犬みたいで可愛かった。

「分かつた。これ以上は聞かないよ

紙切れを受け取ると、スーツのポケットに入れる。女の子はじや

あとだけ言い、自宅

のあるマンションへ入つていった。光村沙耶のところほどのではないが、十歳代が住むには洒落た建物だ。男は現実に溜め息をつき、車を走らせた。

一週間後、男は会社を退職した。野望を現実に繋げるためには良い職場だったと思う。

おかげで、抜け口をいくつか見つけられた。御役御免だ。ここから怒涛の成り上がりを見せてやる。俺を蔑んできた奴らを下に見てやるのだ。この三十年弱の人生、大したものじゃあなかった。その分、これからは充実した人生を送るんだ。逆襲、二度目の逆襲の始まりだ。

その日は時間の空いている同僚が送別会を開いてくれた。同僚といつても、ほとんどは生命力の乏しい白い髪の男性ばかりだ。十人ほどが居酒屋でテープルを囲み、男とのこれまでの思い出話を語つしていく。そのどれもが男にはどうでもいい話だった。こんな枯れた人間たちに気を遣つのも今日で終わりだ。おやうへ、あんたらが死ぬまで会うことはないだろう。

お開きになつたのは二十一時過ぎ。同じ寮住まいの数人と帰宅する。男はすぐに外出直す。数メートル先の電信柱に凭れていた人間に視線を据える。帰宅途中に後方からの視線には気づいていた。これまでに何度も背中に感じてきた鈍い感覚。睨むような鋭い目が印象的な短髪の男性は定期的に男の近くに現れる。特別に何かをするわけでも

なく、大体はこれぐらいの距離からただ男の事をただ眺めている。

あの日の場合、眺め

られるが睨まれるよう感じ。一言か二言、男に言葉を言い置く時もある。その時も

二人の関係を埋めるような核心を突く言葉はない。注意を促すような言葉が多い。男の

近くに来る事も、その動向を見張つて見れる。この男がまた何かを仕出かす

のでは、という気負いから。

男は歩を止めない。別段、男性の存在を気に留める素振りは見せない。通行人の一人、

その程度の把握しか外側には表さない。無論、内心は煮えるような感情を湧かせている。

殺意にさえ届きそうな怒氣を内側で押さえ込めている。

「会社、辞めたんだってな」

擦れ違ひざま、世間話のような語調で男性は零す。男は何も言わず、男性に背を向けたまま足を止めていた。

「何を考えてるかは知らないが、余計な事はしない方が身のためだぞ」

男性も振り向きもせず、男に背を向けたままで零す。男は再び歩き出す。男性はそれを追つてはこない。存在の確認、注意の喚起、男性が男にするのは大抵それぐらいだ。

深い交わりはしてこない。それをあえて避けているのかは分からない。ただ言える事は、

男性は男を怪しんでいる。男の過去を。

その4（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

翌日と翌々日の一日間は新しい仕事の休日になっていた。引越しと仕事変わりのリフレッシュとして、久留米雀からの配慮を受けた。男は一田田を引越し、一田田を休みに充てる。本当は荷造りもあつたし、まあ心身を休ませたい思いがかつたが、取り合えずあのむせ苦しい寮を早く飛び出したかった。辞めるのであれば、あんなところに長くいるたくはない。環境を変え、そこで新しい空気を吸って体を浄化せたい。なので、少々時間に無理をして荷造りを終わらせて引越しをした。ある程度の家具なら揃っていると聞いていたので、荷物は少なく済ませられたのは幸いだつた。余った家具は、故郷から親が持つて来るからと言つて同僚に進呈しておいた。

寮の一室から荷物が運び出されると、軽い満足感が生じる。何もない空の部屋、ここにいた今までの自分は消去する。ここから、また新たな毎日が始まる。これまでのよくな敗北の日々じゃない、勝利へ向かう日々だ。長年願い続けてきた未来が実現していく。

階段を上っていくんだ。

新たな住居は品川にあった。マンションの賃貸ではあるが、家賃は男の月給を飲んでしまえる。四LDK、一階には室外のバルコニーも設けられている。

一つ一つの部屋も

大きく、家主の物と思われる絵画や骨董品も並んでいた。基本のテ
イストは和風にして

あり、それは久留米雀の趣味だろう。模様替えについては何も言わ
れてないので、手を

出すつもりはない。意見する気もないし、特にこだわりもない。イ
ンテリアはあくまで

飾り、この自適な空間さえあれば文句などない。

男は充足感に満ちていく。照明の明るさ、家具の大きさ、ベッド
の柔らかさ、部屋の
広さ、全てが格段にレベルアップしている。これは自分の所有物で
ない、それは分かつ
ている。でも、この空間にいるのは紛れもなく自分自身。たとえ籠
の中の動物だったと

しても、質の向上は確かだ。錆びれたサラリーマンの生活と一流の
人間に育てられてる
ペットの生活、どちらが質が上かということだ。前者から後者への
変化、それは大きな
違いのはずだ。ここからまた上昇していく、その一歩を踏んだんだ。
男は埋もれてしまいそうに柔らかなソファに身を預けると、声を
出して笑った。今、

自分は二度目の復讐を始めたんだ。一度目は相手の肉体を傷つける
復讐、二度目は自ら
の精神を満たす復讐。もう誰にも止めさせはしない。

一日目の朝、目を覚ますと前に女が眠っていた。よく見る寝顔だ。
人生で一番目にし

ている女性の寝顔かもしれない。別に、飽きてはいない。愛らしい
ものであると思う。

だが、心までは動かされない。魅力は当然ある。ただ単に、男に女

への愛情が足りない

からだ。

新居を精神的に満喫した後、夜のうちに渋谷に移動した。女の住む高級マンションに入ると、さつきまでの部屋よりもむしろコレクションが上の部屋が広がっていた。まあ、仕方がない。女は自分の力でこの部屋を勝ち取ったのだから。男と違い、表札名も権利も家賃を納めるのも全て女自身。だから、認めざるをえない。そこにはいらない嫉妬はない。

この日は女も休日だったため、珍しく長い時間が取れた。大概是男が休日にこの部屋を訪れ、女が早朝に帰宅してから夕方に出掛けるまでの時間になる。それも、セックスをして残りは眠るぐらいの淡白な過ごし方が大体だ。一人の休日が重なれば外に出掛ける

事もあるが、月に一度か二度あたりだろう。女は夕食を用意して待つていた。オムレツ

に白米に味噌汁と小物が数品、家庭的なメニューは意外だった。それを意図して作ったのかもしぬないが。味を褒めると、女は素直に喜んでいた。その後、風呂に一人で入り、

ベッドで体を繋げる。女は股を広げ、快樂に包まれていた。

男が起きると、拍子に女も目覚めた。時間は六時前。男はそそくさと起き上がるが、

女はまだ寝足りない。男は顔を洗い、コーヒーを飲む。女はまだベッドで眠気と戦つて

いる。男が「コーヒーを持って行って渡すと、ありがとうと笑みを見せた。化粧もしない寝起きの顔はキヤバクラで働く時の顔よりも劣るが、それでもそ

こらの女性に比べれ

ば明らかに勝つていい。女はコーヒーを飲み、緩やかに息をつく。

「ねえ、今日休みならゆつくりしてつてくれるよね」

女には昨夜のうちに転職の話を報告した。久留米雀の運転手とうところは隠して。

タクシーの乗客として接した企業の社長に気に入られ、ちょうど運転手が退職するから

やつて欲しいと言われ、悩んだが住まいも退職する人のところを使つていいと言われた

ので承諾した、と。驚いていたが、男が落ち着いて話を進めていつたので女も納得して

いく。相談してくれればいいのにと言われたが、急な話だったから

とはぐらかしておく。

女に同調を求めるのに大きな意味はない。

「悪い。今日は行くところがある」

「えつ。どこ」

「大阪。気分転換でもしてくる

「ええつ、いいなあ。私も行きたい」

言葉だけの縋りなのは分かつた。女は仕事で夕方には出勤しなければならない。土産

でも買つてくるから、と適当に宥めると女も了承する。

正午過ぎ、男は徳島にいた。新幹線と電車を乗り継ぎ、約六時間をかけて到着した。

無論、大阪に行くなんて嘘つぱちだ。大阪土産なんて、後でどうでもなる。記念写真

も撮らない主義だから言い伏せるのは簡単だ。

男は女に出身地を偽っている。女だけではなく、周囲にいる少年期の自分を知らない

全員に。男の出身は岡山という事にしてある。実際に住んでいた事

もあるので、その場

しのぎの虚言ならいくらでも吐ける。

徳島の出身である事は知られたくはない。あの忌まわしい過去はこの胸にだけあればいい。ただでさえ深い傷なのだから、これ以上に広げる必要はない。

今までいい。

安らかに復讐をさせてくれ。

駅の改札を抜け、五分ほどで予約したタクシーが来た。駅のホームに降りた時に携帯

で連絡を入れたので、時間は掛からなかつた。正午ぐらいに着くと事前に伝えてあり、

車も乗客がいなかつたのでスムーズにいったようだ。

「久しぶりだな」

「ああ、久しぶり」

後部座席に乗り込むと、久々の再会には調子の低い挨拶を交わす。運転手の札には、

野木晃彦と書かれている。

「いつもの通りに回つてくれ」

「ああ」

通常通りにやり取りをすると、車は走り出す。男は窗外を眺める。ここを離れてから

二年から三年ごとに訪れるが、その度に街並みは変わつていいく。古いものが新しくなつ

ていく。悪くないことだろうが、思ひとじれはある。古いの古れは嫌な古さではない。

見ていて不快になるものではなく、むしろ逆だ。それが無くなつていくのは喜ばしいと手を叩けるだけではない。

「あそこの角の店、潰れたのか」

「ああ、薬局か。潰れちまつたよ。三ヶ月ぐらい前だつたかな。

今度は電気屋になる

らしい」

薬局は男がこの街に住んでる頃からあった。よく母親の薬を買いつたのを覚えている。店をやっていた老夫婦は良い人間だった。当時の商店街はいくらか活気もあったので、商人の威勢はよかつた。その人情の店が潰れ、氣鋭な店が並んでいく。進化なんだろうか、後退なんだろうか。

「今度、図書館も移動になるらしい。新しく出来る駅近くの建物に入るみたいだ」

男の返答はない。無愛想ともいえるが、それで成立する関係性なのだ。

窓外には不思議な景色が流れる。建物が流れ、人が流れる。商店街を越え、川を越えていく。ここに住んでいた頃にあつた景色となかった景色が混ざり合い、思い出を打ち消していく。

「最近はどうなんだ」

近況を問う意味で聞く。瞳に映る景色のようになつて流れで聞いたわけではない。この場所に戻つてくるたびに必ずする事だ。一つは思い出の地を巡る事、もう一つは男性の近況を訊ねる事。

「これといって変わりはないよ。奥さんが一人目を妊娠したぐらい

おめでとう、ありがとう、と乾いた会話が続く。男性は結婚している。相手は県内の大学に通つてゐる時に知り合つた女性。男は顔も見たことはない。特に興味もないでの、

写真を見せてもらつ」ともしない。結婚式にも当然出ていないし、結婚した事 자체が事

後報告だった。子供は女の子が一昨年に産まれている。前回「」にて戻ってきたのが産まれて間もない頃で、親バカ話を長く聞かされたのを憶えてる。だが、興味はないから「写真も見ていない。

時の流れは早くもあり遅くもある。タクシードライバーの仕事をしていると、勤労時間の長さに一日を過ごす事の長さを重ねられる。ただ、あの時の世間の何も知らない子供時代の仲間が結婚して子供を持つている現実には逆も感じずにはいられない。

車は一つ目の目的地に到着した。男と男性が一十年前に通っていた小学校。平日だったので、校庭には体育をしている小学生がいた。キックベースをしているように見える。男は車から降りずに小学校を眺めていた。懐かしむわけでもなく、郷愁に駆られるわけでもなく、単なる確認。自らの過去の点在する記憶の確認として。小学校は男が通っていた当時から大きな変化は見られなかつた。もつと中に入つていけば細かな変化はあるのだろうが、大まかにはあの頃と同じに見受けられる。ここには良い思い出はほとんどない。探すのにそれなりの時間は要する。「パートで迷子になつた子供が親を見つける程度の難度は必要だ。

五分ほどが過ぎ、車は小学校から出発した。既に男と男性の間に会話はない。一年から三年ぶりの再会といつても、話すような事は左程ない。そんな

に話すような日常がないわけじゃない。この関係性において、報告するべき事がないだけだ。ここ最近、男が仕事を変える事、著名人と知り合いになつた事。普通の仲間内ならすぐにでも口にするような事なのだろうけど、この一人の間ではその必要性はない。話す要素のある事といえば、男がこの街にいた十歳頃までにここに存在した事だろう。それ以外について、興味はない。

一つ目の目的地は隠れ基地だった。小学校から一本道に続く先にある中学校の裏手に拡がる田園を抜けていくと山とかうづじて称していいぐらいの場所がある。無論、地図上ではそこは山と認定されていない。地元の人間の間でそう称されているだけだ。山の外観が似ていてから林檎山と誰だかが名づけている。

男と男性は山を自らの意思で登つた事はない。むしろ、近寄りたくない。その山は

強い虫たちの溜まり場だった。学校内の権力者、といつても小学生だからそこまで大層なものじゃないけれど、学校内で威張りをきかせてる奴らが放課後にそこに集合する。

男と男性はそういうタイプの影に怯えながら過ごしていた弱虫な子供だったので、山は牽制すべき場所だ。なのに、一人にはそこへ足を運ばなければならない理由が出来てしまつた。

「次に行つてくれ」

男の声で車は走り出した。細道から左右に拡がる田園を見ながら、

過去の傷をほじり

返していく。大きな溜め息が出た。その姿をバックミラーで確認する。男性も心痛を覚える。男性は男の傷を知っている。その深さが分かっている。だから、今でも男の帰郷には行動を共にしている。

三つ目の目的地は一軒家だった。周囲にポツポツと点在する家々と変わりのない普通

の一軒家、男が二十年前まで住んでいた家だ。今は別の家族の住まいになつている。庭

には洗濯物を干されている。その量からして、三人ほどの家族だろう。窓は開いており、

縁側と和室が家の外からでも見られる。ただ、男が見ている間に人は通らなかつた。昼

食でも摂つてるのだろうか。そういうえば、そろそろ腹も減つてきた。走り出した車の中で、あの一軒家での母親との思い出を巡らせる。

楽しいものもあり、苦しいものもあつた。父親は男がまだ一歳の時に家を出ていった。詳しい事までは聞け

なかつたが、どうやら女絡みで離婚したらしく。父親の顔は見た事はない。母親を捨て

ていくような奴の顔なんて見たくはない。どうせ、この顔に似ているのだろう。なら、それをわざわざ確認したくなんかない。

昼食は男性任せにし、駅近くのラーメン屋に行つた。次の目的地に行くのに駅を越え

るので、ちょうど通り道に店はあつた。男は醤油味、男性はとんこつ味を食べる。美味しいは美味しいが、特別な何かがあるわけじゃなかつた。よくあるラーメン店のレベル、

それに収まる。男も同職のため、馴染みのあるレベルの味だ。

四つ目田的は吉野川だった。河川敷のキャンプ地まで歩き、

そこからの景色に田

を細める。やがて日を瞑ると、頭に過去の自分を思い起す。忘れられない記憶、起こ

さなくとも流動的に現れる滾る炎。内部からこの頭を焼き焦がすようく苦しめていく。

多くの悲鳴が響く。多くの助けをいた影が見える。多くの果てゆく影が見える。あの時、

絶対に後悔しない事を誓った。後悔なんてしたら、思いに漬されてしまう。間違つてい

ないんだ、そう胸に刻みつけた。

「もう、いいのか」

「ああ、駅に行ってくれ」

車は駅へ走り出す。男は車中で苛々を堪えていた。心持ちが定まらず、整理つかない

思いを反芻していく。

なあ、とたまらず男性が声を掛ける。

「これ、終わりには出来ないのかな」

「どうこう意味だ」

「一十年も経つんだよ。なのに、まだそんなに苦しんでる大田くんを見ると、居た堪れないんだ。東京で新しい暮らし始めてるのに、こりやつてわざわざ帰つて来て自分を苦しめるのは止めにしようよ」

おそれらく、男性は男の姿を投影してるのだろう。男の痛みを共有するように自分にも
苦しみが届いてしまう。

「俺だって忘れててしまいたい。それが一番良いに決まってる。ただ、俺はこうする事

を選んだんだ。あの時の自分を忘れてくないんだ。だから、ここに
も戻つてくる。これ
からも変えるつもりはない。それについて、お前が責任を被る必要
はない」

男性は訝然としない顔つきだった。男の言葉では迷いを解決でき
なかつたのだろう。
でも、それ以上に説くつもりはない。責任を負い続けるか逃れるか、
それは勝手にして
くればいい。

車が駅に到着すると、軽いやり取りをして男はタクシーを出た。
離れたくとも離れら

れない故郷の確認、男の誰にも話していない過去を唯一知つている
仲間の確認。男性は

男の裏の顔を見た事がある。それでも、誰一人にもそれを暴露した
りはしない。奥さん
や子供にも言いやしない。家族間に変な感情を持ち込みたくない
だろうし、なにより

男性にとって男は友であるから。

帰りの新幹線に乗つてる間、陽は傾いて消えていった。そして、
夜になる。その暗み

が東京で新たな場所へ身を移す自分の心の闇に似ていると思つた。

その5（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

翌日、起床は四時だった。六時入りの現場だが、久留米雀は三十分前には着いてたい

ということでお五時に迎えに行く事になり、初日なので余裕を見てこの時間にアラームを

設定しておいた。タクシードライバーの時はもう少し遅くまで寝れだが、これからは不

規則な時間になる事を実感する。体もつまく起ききれず、浮ついた感覚で身支度をして

家を出た。

マンションの地下駐車場から車を出すと、速度に乗せて軽快に走らせる。男に与えられた車はシルバーのベンツだった。以前の専用の移動車をそのまま受け取った形となつ

たため、車内はいろいろと中古感も滲んでいる。それでも、ベンツなんて初めての経験

なので新鮮な気持ちにはなれた。なんというか、車本体の威勢の良さみたいなのがある

気がする。走らせていて心地良い。

女の自宅に着いたのは指定の時間の十分前だった。女の住む一軒家は外観だけでその

高貴さが窺える気品のよい佇まいだ。成城にこの家を建てるとは成功者の証といえるだ

る。改めて、獲物の大きさを痛感する。現実に直面することでの衝動を確固とする事が出来た。

五時になつてから到着した皿を電話すると、女は三三分ほどで姿を現す。ゆつたりとした貫禄のある動きで、机に向かってく。男は外へと出で、女が車に来ると同時に後部席の扉を開ける。

「そんなことしなくていいわよ。ドアぐらい自分で開けられるから」女はフツと笑みを見せる。勝手の分からぬ世界に戸惑う男に教育のしがいを見ただろ。それなら、男の思つがままだ。まずは下手に出て、相手の様子を窺おう。

車は次の目的地へ走り出す。男は仕事や住まいを提供してもらつた事の感謝を伝え、女はそれを大したことないといふふうにする。その後はあまり話は繋がらない。朝一番

といふこともあるが、これからは仕事上での関係になるのだから今までのようなお気楽な会話はこらないのだろう。思えば、これまで女との仕事については触れてこなかつた。

それはあくまで芸能人と一般人という関係だったからであり、今日からは男も女のスタッフの一員となる。だからこそ、今まで以上の配慮が伴う必要がある。どちらから無闇に話を振るのは好ましくない。

十五分ほどで車は着き、女性マネージャーを拾つて再び出発する。その十五分後に、

目的地のスタジオへ到着した。女と女性は車を降り、建物へと入っていく。姿が見えなくなると、男は息をついた。

女は今日はドラマの撮影らしい。どんなドラマかは知らないし、聞く事もしない。別

にミーハーでもないし、の方も仕事の話を聞いてもらいたいタイプではない。腕

時計を見る、まだ五時三十一分。終わりの時間は二十一時頃と聞いている。つまり、今

から十六時間半は空きになってしまった。撮影の終わりが早まつたり、急な呼びつけもあるようだが、基本的には何をしていても構わないらしい。二日前までのタクシードライ

バーの仕事と比べると、なんともやりがいがない。だが、これで今まで以上の生活を用意してもらえるのだから甘えておくに限る。

結局、男は家に戻って寝直した。昼過ぎに起き、片付けの行き届いてない引越しの荷物に手をつけていく。買い物に行き、夕食を作り、それを食べてから仕事に向かう。ほぼ予定通りに仕事を終えた女と女性を自宅へ送り届け、男も自宅に変える。ずいぶん待遇のいいアルバイトをしてるような感覚になった。

それからしばらくはおとなしい生活を続けた。久留米雀の送迎の仕事をし、合間の時間は適当に過ごす。丸一日の休業日こそ少なくなつたが、自由に使える時間は圧倒的に

増えた。とはいっても、大した趣味もない男にはそれほど有難味のあるものではない。

結果、家でだらだらと過ごす事が多かつた。

久留米雀はとにかく落ち着いていた。男が仕事を始めるとともに動きを見せてくるの

かと思っていたが、それはなかつた。車内でも必要以上の話はなかつたし、態度も年齢

相応にどっしりと構えたものだった。それがまた厄介だった。外に表現してくれるなら

やりやすいが、内に込められるとやりにくい。彼女は男をどうしたいと思つてゐるのか。

強引になら、働き口や住まいを提供した事を引き合いに迫る事だつて出来る。好感触を

持つてゐに違ひない。だから、男を引き抜いたんだ。男からのモーションを待つてゐるの

だろうか。だとしたら、相当に洞察力に優れた人間でなければ見抜けはしない。いつか、

そう遠くないいつかに動きは見られるはずだ。

光村沙耶は今回の転職を喜んでいた。理由は、単純に自由時間が多く取れるようにな

つたから。一人とも不規則な仕事をしてゐたため、会うのは朝方が多く、一発やつて寝

るという展開が大体だつた。それが今はどの時間帯でも男側が合わせられる事が増え、

一緒にいる時間も多くなつた。彼女の休日にはテートをしたり、普通にカップルみたいな過ごし方をしてゐる。

片柳彩子とは全く会つていなかつた。理由は、単純に会う名目がないから。メールは

日に一回のペースでやり取りを続けていたが、それ以上の行為に走る事はしなかつた。彼女もそれはしなかつたし、届くメールの内容も日々の仕事の内容ぐらいたた。思い

を制御してゐるのかは文字だけでは判別しにくかつたが、実際は男からの誘いを待つてゐる

ように受けられた。ただ、それはしない。ここも無理な進展はせず、

慎重に行くべきと

決めた。

亀谷右京の動向は不明に近かつた。時々、後方からの視線を感じる事はあつたけど、特に注目はしていない。彼は動いてはこない。元々離れた場所から男の現在を確認する

程度の事しかしていないし、警戒しそぎる必要性はない。だが、このまま終わるとは思つてはいない。お互いが果てるまで、この関係が変わらないとは思わない。何かがある、そう感じている。

そんな生活を続け、二ヶ月が過ぎた。ありきたりな言葉を使うのなら、平穏と呼べる

日々だつたと思う。大物女優の送迎をし、売れっ子キャバ嬢の恋人役を務め、残つた暇

な時間は気紛れに過ごす。そんな毎日だ。

五日前には転職後の初給料が振り込まれた。確かに、五十万円だった。仕事の内容と

対比すると、逆の意味で割に合つていなかつたが、好待遇をしてもらつてる側がそれを

指摘する事はしない。良い生活だ、そう思つた。

その日の夜、二十時過ぎに久留米雀とマネージャーを吉祥寺の力フェに迎えに行つた。

雑誌の取材を受けた終わりらしい。いつものよつと中古同然に使われているシルバーの

ベンツを走らせてると、女から食事に付き合つよう言われた。それはおかしな流れでは

なく、これまでにも何度かあつた場面だった。仕事終わりに夕食、運転手だからと車に

待たせておくのは忍びないので三人で、という建て前で。

女性のナビで向かつたのは和食店だった。昔ながらの日本家屋という店の佇まいからして、その質の高さが窺える。通された和室は庭に通じていて、池には鹿威しが引かれてあった。画面を通してでしか田にじていなかつた景色や料理に勝手が利かない。ただ、それ 자체は男の演技にリアリティが付属されて良い方向へ転がつてくれたが。

「今日はまじめでした。いつもいつもありがとうございます」

食事が終わり、女性を送り届けた後、車は女の自宅に向かっている。男は運転席の窓を小さく開けている。後部座席に座る女の存在感はかなりのもので、密閉された空間にいると多少の圧迫を受ける。緊張しているわけではないが、楽にいける相手でない事は承知している。

「いいのよ、これぐらい」

語調と言葉が重なつていた。話はそこで止まると思つたが、この日は女からの動きがあつた。

「ねえ、あなたの部屋へ行つていいかしら」

言葉から汲み取れる展開は数個あり、どうしても誇張されたものが突出してくるが女の語調からそれはまだ感じられない。

「僕のところですか。何かあつたんですね」

「ううん、そういうんじゃないわ。前に言つたけど、私は気分転換したい時にあそこに行くのよ。それで、今はちょうどだつたつていう話。気が落ち着くのよ、あそこ

に行くと

「ああ、そうでしたね」

男は女の申し出を了承した。そういう考へだつたのか、と同時に言葉の裏も読み取る事ができた。勝負の時かもしれない、そつ心持ちを構える。

マンションに到着すると、女とともに自宅へと戻つた。部屋に入ると、そこには女の見覚えのある光景が並んでいる。男がこの部屋に持つて来た荷物は少なく、元々のインテリアの配置も変えていないので、部屋の印象に変化は見られない。

男はリビングのソファに座つた女に紅茶を差し出す。紅茶はここに引っ越ししてきた時からキッチンの棚にあつたので、女がここに来た時に飲むためのものだらうと分かつていた。

男は女の隣に座り、話を始める。内容は女の仕事について。仕事中には聞かなかつたところへと手を伸ばす。ここは仕事場じやなく、プライベートな場。心を解放していい場所だから、といふ。男は女の話を聞き、女の仕事への熱心ぶりを褒め、愚痴を聞き入れ、気遣いの言葉を投げ掛ける。

女の心が傾きだしたのも把握できた。上辺の話ではなく、本心を語り出してきたのがそのサインだらう。タイミングを見計らい、男は女の手を握つた。女は顔を向けてきた

が、男は続けてぐださこと先を促す。女はそれに気を許した。酒が飲みたいと言い出し、

年代物のワインを開けて一人で飲んでいく。味なんてどうだつてい。今はこの目の前

の獲物を手中にする事だけに欲は向いている。

「今の待遇に満足してるかしら」

の方から男の手のひらを摩つてくる。感触を確かめるようにつくりと丁寧に触れていいく。

「しますよ。当たり前じゃないですか」

月給五十万円、それ以上の家賃の四〇・五マンション、仕事時間は平均三時間ほど。

これだけの待遇に満足しない人間はないだろ？ だが、これだけ破格の待遇を用意されるということに意味があるのは察している。良い話には裏がある、とどこかで誰かが言っていた。

「あなたが望むのなら、もう少し上乗せしてあげてもいいわよ」

女の手が男の首元に伸びてくる。鎖骨に触れ、下の方へと降りてくる。この後にどうなるかぐらいい、アホでも分かる。

「そんなことしてくれるんですか」

「いいのよ。ウチの会社は私で成り立つてるようなものなんだから。私のわがままは通してくれる。だから、あなたの事も雇ってくれたわ」

「でも、さすがに今以上となると疑われますよ」

「もし、そなうなら私のポケットマネーであげるわよ」

お金ならあるから、とでも言いたげな顔だった。女の瞳は開錠されている。この後展開を頭の中に動かせている。なら、望むようにしてみせよう。今から俺はただの玩具

になる。俺の意思は必要ない。全ては女の欲望に埋もれればいい。その先に俺の欲望があるのなら何だつてやってみせるわ。

女の手は男の胸の下あたりで止まっている。遠慮があるのか。そんなものはいらない。

男は女の唇を奪い、体を触っていく。唇は角度を変え、何度も吸いつける。触れていく体には老いが感じられるが、そんなことは漠然としか気には掛からない。俺は、俺は道具なんだ。そう言い聞かせ、倍以上も年齢の離れた女の体に手を掛けしていく。表現の仕様のない笑顔を浮かべて。

ベッドへと移動し、行為は加速する。男は服を脱ぎ、女の服を脱がし、艶のない体を隅まで舐めまわす。カーテンは閉め、鏡は予め別の場所に移しておいた。この狂った己を目に映す事にならないように。確認さえしなければ、あとで深く思い出す事もない。

男は女の体で最後まで行為を成し遂げた。女は感度の高い声を上げ、どれぐらいぶりかという若い男性の体を味わった。行為が終わると、女は大きな疲労を見せ、男は現実に自らを引き戻す。男は女を抱き寄せ、女はそのまま男の腕の中で眠りにつく。男は女を包みながら、後悔の念に駆られないように必死に逃避していた。

翌日、男が田を覚ました時には女はすでに起きていた。男が起きると、女は一人分の朝食を作り終えていた。恋人気分と錯覚したわけではない。女はいつもそのままの久留米雀として、そこにいた。自分の所有する家のキッチンで料理を作つていただけ、普通の事として片付けられる範囲にある。

朝食を食べている間も、仕事へ向かう間も昨夜の事は話題に上がらなかつた。男から話す事はしない。逃避は続いている。事実の認識はある。あくまで、逃避だ。忘却では

ない。呼び起こそうと思えば、いつでも戻せる。

女を自宅へと送ると、一十分ほどで着替えを終えて戻ってきた。

その後、女性マナー

ジャーも拾つて現場へと送り届ける。男と女の間に不自然な点はない。体の内側にはあれど、外側から見る事はできない。全て一人の中に仕舞われた。車を降り、スタジオへ去つていく女と女性の姿を見届けると男は呪縛から解き放たれたよう全身の力が抜けていった。

何かに縋りたくなり、誰かに包まれたくなり、男は携帯を手に取る。最初に光村沙耶

を考えたが、すぐに止めにした。惰性で付き合つてる人間と抱き合つたところで、根本

は昨夜の行為と変わらない気がしたから。じゃあ、どこかで金で繫がる女性にするか。

その方が何も考えずに済むかもしれない。ただ、その前に一人の女の顔が頭に浮かんだ。

その女には包まれそうにない。それでも、記憶の中の女の笑顔に救われたくなり、男は携帯のボタンを押した。

「ごめんなさい。終わりが伸びちゃつて」

二十一時過ぎ、待ち合わせ場所の焼き肉店に片柳彩子は姿を見せた。慌てぎみな様子から急いできたのが窺える。

「いや、俺も今来たばかりだから

男も久留米雀とマネージャーを自宅へ送り届けた足で来たといつ

だつた。朝に女の子

に電話をすると、今日は雑誌の撮影があるから夜になら会えると言

われた。二十一時に

終わる予定だから、二十一時に待ち合わせ時間を整える。場所は個室のある店を選び、

男が指定した。

「頼んじゃつていいですか。もう、お腹ペッコペコだ」

女の子は席につくなり、メニューを広げる。すぐに店員を呼び、適当に注文をしていく

くとよつやく息をついた。

「今日、にわか雨あつたじゃないですか。午前中はロケに出てたんですけど、雨で中 断しちゃって押しちゃいました」

すいませんと女の子が謝ると、君のせいじゃないからと男が宥める。

「でも、嬉しかったです。誘ってくれて」

そう言い、下を向いてはにかむ姿はなんとも可愛らしかった。転職して以来、女の子には一度も会つていなかつた。獲物として捉えたい気持ちは正直あつたが、まだ社会にさほど揉まれていない純粋な子を利用する事に戸惑いもあって。汚れなさすぎている。

泥臭く揉まれてきた女性との駆け引きにはなれていだが、逆にこういうタイプにはどう接すればいいのか迷う。計画性がない分、規格外の事を起こされてしまう可能性がある

気もしたから。

それでも、今日は誘つてしまつた。気が正常ではないのかも知れない。そうだったと

しても、この子の笑顔に癒やされたかった。老いた生真面目な女の体に壊された身を、若い快活な女の子の体に包んでもらいたかった。

「よかつた。俺なんかが誘つてもよかつたのかな、って思つてて

「全然。誘つてくれたりしないのかなあ、って実は待つてたんですね」

「ううなんだ。それを聞いて安心した」

一人は擦れ違いを笑つた。本当は、女の子が誘いを待つてゐるのを男は気づいていた。

それを知りながら、そこに触れないようにしていった。脈がある、という事を武器として携えたままにして

「待つてたつて言つてたけど、じつちが誘わなかつたらどうしてたの」

「どうだらう・・・・・・・」じつちから誘つてたかも

「どうこうふうに」

ええ、と女の子は深く考え込む。男との様々なシチュエーションを頭に浮かべ、最適なものを見びこむ。

「好きな食べ物とか聞いて、そつから誘つてもらえるように探りで」

「それ、結局こっちが誘うんじゃん」

また一人で笑つた。女の子のその笑顔に心を撫でられるのが分かる。男にとつては他のどの薬よりも特効性のあるものに感じれた。

その後は焼き肉を食べながら、女の子の仕事について、男の仕事について、今どきの

若者について、昔の若者について、話を交わしていく。田の前の子は未成年で、自分は

三十歳の手前である事を刻ませながら。今はこの時間に身を寄せる

が、これは長く続くものではない。

勘定の約一万円は男が払い、女の子は「どうぞ」と頭を下げる。それは男には少し複雑な状況だった。その金は久留米雀から貰つたものだ。今朝、男が出掛ける支度

をしていると、リビングのテーブルに十万円が新の状態で置かれていた。要は、久留米雀を抱いた報酬といふことだらう。男はその金の中から勘定を払つた。正しくない金を

使つてしまいたい気持ち、残しておくべきといふ気持ち、それを使つた気持ち、女の子との食事に使つたといふ気持ち、様々な感情が入り乱れる。何が今の自分にとって正解なののかは分からなかつた。

車で女の子を青山の自宅まで送り届ける。御馳走になつた感謝を告げて車を降りようとする女の子を不意に止めていた。男は女の子の手を握つていた。女の子は男を見たままで止まっている。

「どう・・・・・したんですか」

すいません、と男は手を離す。息をつく男に異変を感じ、女の子は逆に離したばかりの男の手を取つた。

「話してください、よかつたら。私なんかじゃ、全然役に立たないけど」

女の子の澄んだ瞳に見られると、心が洗われていく気がした。そのまま、体の中にあらぬ汚物を吐き出してしまいたくなる。

「実は、正直なところ、母親の看病と仕事の両立に負担が掛かっ

てて。家では看病、

外では仕事、つてなると氣の休まる場所があまりなくて。家で療養してゐる母親に仕事の

愚痴は零せませんし、外であれだけお世話になつてゐる社長の前で看病の重荷を零したり

できません。捌け口に困つてしまつて、今日は君を誘つたんだ

「じめんと言つと、女の子はかぶりを振る。

「嬉しいですよ。そういう時、呼んでくれるのつて」

女の子はフツと笑みを見せる。弱さを見せてくれる男に頼られてる感じがあり、心を

くすぐられる。男の嘘には氣づく由もないが、本物の弱さは女の子の感情を揺さぶる。

守つてあげたい、そう強く思つた。

男は助手席の女の子に身を寄り添わせ、その体を女の子は柔に抱きしめる。愛おしいものとして。

「ありがとう。君のおかげで救われた」

「いえ。私でよければ、いつでも話してください」

女の子の温かさに昨夜の記憶は浄化されていった。傷を宥められながら、男は素直に心を委ねた。

その日から、非日常的な循環が続く事になった。久留米雀は週に一度、男の家を訪れて行為は行われた。その都度、十万円から二十万円の札が男に下される。そこに愛情に等しい感情がない事は女も分かっている。少しでも気持ちが傾いていればと思う事はあるが、甘い考へに目を眩ませないように引き締めてある。金銭と欲で繋がった関係、

それを自負しながら関係は続いていった。

そして、その翌日に男は片柳彩子を誘う。精神の損失を補うため、女の子との時間は最も効き目があった。若く甘く香る体に包まれると心地良く、幾らかでも悪夢を散らす事はできた。

女の子の都合が合わない時には光村沙耶のところへ行く。早朝には家に戻つてるので、久留米雀を仕事場へ送り届けてから行く頃には女は眠りについている事が大体だ。それでも、女を起こして行為に走る。数時間前に別の女に入れた性器を入れ、何も知らない女は快樂に誘われる。

客観的に眺めれば、自らの行動の変質さに痛くなる。だから、それはなるべくしないように心掛けた。俺は金のためなら何だってする亡者なんだ、と主観的に捉えては納得させていく。

金だ、金をくれ。金がこの腐つてく心を豊かにさせてくれるんだ。地位や権力なんて、どうだつていい。あるならあるでいいし、無いなら無いで構わない。あつても困りはしないし、無くとも困らない。だつて、それを持つてる人間たちがどれほど優れた人格だというんだ。見た目は平凡、着る物や身に付ける物ばかりに金をかけ、やつてる事 자체は大した事じやない。同じ位置にいれば、他の人間にも出来るような事ぐらいしかやつちゃいない。それなのに、そいつらは先生やら社長やら崇められる立場にある。それに

目が眩み、自らがだんだんと貶められていく事にも気づかずに戦退の一歩を辿るだけではあるまい。能ある鷹は爪を隠す、前面に出て目立つばかりの奴には一定の能力しかありはしない。俺はそんな人形に成り下がるつもりはない。この手で望む未来を勝ち取つてやるんだ。今、俺より高い位置にいる奴らは俺に平伏す準備でもしながら笑つて待つてろよ。

その6（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

久留米雀との夜を重ねるたび、男は感情が薄くなつていいくのを感じた。元々少ない情をさらに絞り取られ、不自然な人間を再構築していく。外見にはバレないようにしたが、身体の内側は病み始めていた。自分の中にある悪の部分が牙を剥き、正の部分を齧かす。ような不安が流れてくる。このまま、俺は獸と化していくんじゃないか。そんな考えも頭を過ぎていった。

女には、今の自分がどう映つているのだろうか。愛玩の男性、そんなんふうにでも捉えられてるのだろうか。おそらく、それはないだろ。女はそういうタイプではない。

もう還暦を超えた女性だ。愛欲に溺れるような事はしないだろ。実際、普段の女の男に対する接し方にも全く変化は見られない。出会いの頃の、冷静で知的な女性の印象のままだ。

女は自分次第でどうとも男を操れる。強制的に縛りつけた都合のいい玩具、とでも言つたところか。切るつと思えば、女はいつでもこの関係を切れる。ただ、男はそれは困る。愛はない、それを互いも知つていて。強くもなく厚くもない線を男は自力で繋ぎ留めなければならぬ。女の引っ張る首輪を外さないよう、ギリギ

リのところで戦いを

続けなければならぬ。なにも、毎回の十万円から二十万円の報酬が欲しいだけで心を

投げてゐるわけじやない。そんなレベルの金が欲しいのなら、タクシードライバーの仕事を続けていればいい。男の狙いはもつと大きなものだ。これだけ苦しんででも手に入れたいもの。

「ちよつと仕事の話をしてもいいかしら」

女の仕事終わりの車中、いつもと変わらぬ重みのある声。女性マネージャーはすでに

送り届け、車には一人しかいない。

「はい、何でしょう

男の声にも変わりはない。一人きりになつたからといって、急に応対が変化すること

はない。男がこの仕事に転職してから四ヶ月が経とうとしているが、根本的な関係の変化はなかつた。

「実はね、あなたにマネージャーになつてもらいたいと思つてゐるの」

「マネージャー、ですか」

「ええ。最近、現場もいろいろ見てくるから、そろそろかなと思つて。あなたには演者側になつてもらえればと最初は思つてたけど、どうやら気は向かないみたいだからマネージャーにと思って」

確かに、女と関係を持ち出した頃から、転職当初に言つていたように女の仕事現場へ連れていかれる事が増えた。都合の合つ口だけでいいと言われたが、男には取り留めて

やらなければならぬ都合などないので毎日に近いペースで足を運んだ。

女の仕事場は、大きく女優とコメンテーターに分かれる。それ以外の、バラエティや旅番組などにはほとんど係わりはない。女優の仕事は時代劇と一時連続ドラマが多く、稀

に連続ドラマにも出ているらしい。コメンテーターの仕事は朝の生放送が一本、収録の

情報番組が一本ある。基本は女優の仕事が占めているため、スケジュールは不規則な事

が当然となっている。仕事で埋まってる週もあれば、ぽっかりと空く週もある。朝早く

から夜中までの日もあれば、昼過ぎには終わる日もある。

女の仕事態度は健全そのものだった。周囲への気配りは忘れないため、信望も厚い。

あれだけキャリアを積んでいる大物が気を遣えば、女を見る目も変わらだらう。しかし、

時には厳しい意見も言つ。女優の現場では自らの演技論を作品と照らし合わせ、それを

信念として突き進む。コメンテーターの現場でも、社会の矛盾に対しては鋭く切れ込ん

でいく。近くでその様子を見ていると、女がこの入れ替わりの激しい世界で生き残つている理由が分かる。

「マネージャーっていつも、僕にそんな大役が務まるんでしょ
うか」

「大丈夫よ、心配しなくても。新人の役者じゃないんだから、売り込みなんてしなくていいんだし。私の仕事の管理と、あとは挨拶だけちゃんとやっておいてくれればいい

のよ

マネージャーという選択は予想外だった。演者側になるつもりは元よりなかつたが、

その選択肢は可能性の外れにしかないものだつた。

「でも、菊月さんはどうするんですか」

菊月はさつきまでこの車に乗つっていた今のマネージャーだ。

「彼女は事務所の仕事に移るの。所属タレントの統括的なポジションになるわ。それ

で、あなたにマネージャーになつてもらいたいのよ。実はね、会社の人達には最初から

あなたは私のマネージャーにする予定だからって言つてたの。その頃から菊月には昇格

の話が出てきたから、あなたをマネージャーの候補として会社の人間には推していた

のよ。だって、さすがに見ず知らずの人間をいきなり運転手で月給五十万円で雇うのは難しいから

押しつけに近い言葉だつた。初めからマネージャーになるものとして雇つたのなら、

男がそれを拒否するのはクビに等しい事だらう。それを言われば、男も引き受けざるを得ない。なるほど、女も裏で考えて動いてるということか。

「分かりました。そういうことなら頑張つてみます。不自由な点も多いと思うので、いろいろご指導の方をお願いします」

「ええ、キッチンとサポートはするから
もしかしたら、女は頭からこの展開を描いていたのだらうか。菊月が事務所の業務に移動する事を知つていたから、男を引き抜いた。男を側に置いておくために。女性が側

にいなくなれば、監視のない一人きりの状況が用意される。それなら、ずいぶん巧妙な

遣り口を考えている。

その夜も、男は自宅で女を抱いた。当初と比べ、男の生氣は弱まり、女の生氣は強まっている。女が男の若い氣を食い、呪縛に押し込めようとしている感覺が起こる。このまま全てを女の意のままに食われてしまうんじゃないか、と危機感も生まれてしまう。

心が腐っていく様を感じながら、男は懸命に戦っていた。目の前の行為に耐えていけば、

いつか望むべき道が開けると信じて。

行為が終わり、男と女は仰向けに寝ている。何の飾りもない天井を眺め、身体の中で

当て所のない自分探しを続けていく。俺は、俺はどこにいるんだ。女と体を重ねる度に自分が遠くなつていつてる気がする。いずれ、自分で自分の居場所も分からなくなつてしまふんじやないだろうかとも思った。女は男の隣でただ物思いに耽っている。老いた

体にあれだけの刺激を与えてるのだから、そろそろ眠りになんかつけない。腕枕なんかしたりはしない。間違つても、この関係に恋人が割り込んできたりしない。あくまでも割り切つた関係、ただそれだけの事。女が隣で何を考えているかは知らない。特に興味もない。男には、自分を保つ事が精一杯だった。自分が大田恵一としてある事、それが唯一に近い現状への反撃のように思えた。玩具でもない、逃亡者でもない、今ここに俺

はいる。

「この家はあなたにあげるわ」

そう言いながら、女は男の腕に触れる。

「あなたが今の関係を続けてくれるなら、この家だけじゃなくて私の遺産はあなたにいくようにしてあげる」

「え？」

驚いたように繙う。本心は、男が待ち望んでいた言葉だった。

「本当は、最終的にあなたを事務所の代表取締役になるようにしてあげようかと思つたの。ただ、それだと周りの田もあるし、なによりあの会社は私がいなくなつたら未来

は高が知れてるわ。だったら、他人の事なんて気にしなくてもいい褒美をあなたに『え ようと思つたの。あいにく、私は両親も他界してるし、兄弟も姉妹もいないわ。まあ、

親戚ぐらゐはいるけど、大した交流もない程度の関係だから文句は言わせない。だって、

私のお金を私がどうしようと勝手でしょ」

思わず、息を飲む。歯をグッと噛み、目を開く。その言葉を・・・

・・・その言葉を

待つていたんだ。

「遺産つていつも、じのぐらゐあるのかなんて分からないんだけど、一生暮らしに

困らないだけはあるはずだから。けやんとあなたの手元に渡るのよつに書にも残しておく

から安心して」

「そんな・・・・・でも」

言葉だけの遠慮を言い置く。断る気なんて更々はない。一応の配慮、ただそれだけの

」と。

「いいのよ。あなたはこれまでと同じように私の側にいてくれれば。それで私は満足だから。なにも、恋人になつてくれだの、結婚してくれだのなんて言い出したりはしないわ」

男は笑みが零れてくるのを我慢しながら、心を躍らせる。願つてた展開が舞い込んできたのだ。

翌朝、久留米雀を自宅へ送り届けると、男は光村沙耶の部屋へ行つた。今日は休日になつたため、時間はたつぱりとある。案の定、女は眠つてゐる時間だつたが、男の来訪に目を覚ます。そして、お決まりのように男と抱き合ひ、服を脱ぎ、股を開く。絶頂へと達すると女は可愛げのある顔を見せる。甘える事のない久留米雀、甘えたい思いを隠す片柳彩子と違い、女は素直に感情を出してくる。男に恋情を抱き、それを注ぐように。

その逆がないとは思わずには。

「今日はなんだか穏やかだね」

行為が終わり、男の腕枕に收まりながら女は言つ。その下の方では、抱き枕のようにして男の体を両足で挟んでいた。

「そう。別にそんなことないけど」

はぐらかしたが、男には女の言葉を理解できた。最近は精神の不安定に蝕まれ、正常を保とうとしていたが幾らかは相手に伝わるものがあつたのだろう。だが、今日に限つ

てはそれは大きく違つた。今日の男の心は強く満たされている。正直、こんなに気持ちが浮いたのはずいぶん久しぶりに思える。それもまた、幾らかは女には伝わっているようだ。

「なんかさ、ここ最近疲れてるみたいだつたから」

「ああ。多分新しい仕事になつたから、今までとは違うところを使わないとななく

て変に疲れちゃつたのかもしれない」

もう大丈夫だと女のおでこに唇をつけると、よかつたと女は男の口に何度も唇を合わせた。

「そうだ。とつておきの面白い話があるの」

そう切り出し、女は男の肌に触れながら話を始める。女の話は勤めているキャバクラに来る客についてだつた。女はよく客に関する話を男に聞かせる。女自身が話したいと

いうこともあるが、男の方もそれは興味のある内容だつた。女がナンバーシーとして在籍する店はそこそこ名の通つた有名店なため、財界人やら芸能人やら暴力団員も出入りしているらしく、そこで繰り出される会話は面白味のあるものばかりだ。女を氣に入り、

毎度指名する客からは特に門外不出とされるような話も聞けるらしい。男がそれを聞き

たいと促すと、絶対他言しないよつことつ条件付きで女は話してくれる。それを頭に

留めておき、女の目が向いてない時に男はメモに記しておく。こんな貴重な情報、ただ

の興味本位の会話で終わらせるはずがない。武器としての情報とし

て、懐に隠しておぐ。

どこで使えるものは分からぬが、いつか身を守るために使える武器になるかもしない。

男はなにも愛していないだけの女とただ時間を共に過ごしているわけじゃない。一等地の部屋、優雅な暮らし、そして様々な分野の情報源。女の付加価値に対し、側に置いておくべき人間と判断して関係を持っている。仕事や美貌など、選り好みはしない。男の求めてるものはそれじゃない。

光村沙耶の部屋で夕方まで眠りにつき、キャバクラの仕事に出掛ける時に男も一緒に外へ出た。次の予定まで少し時間があったので、コーヒーストアに寄つてアイスティーを飲みながらコンビニで購入した新聞に目を通していく。その中で、夕刊に目を引く記事があつたので、捨てずに店を出た。

十九時、大通りに面したちゃんこ料理店に時間通りに到着すると、店員に通された個室には片柳彩子がすでにいた。待たせたみたいだねと言つと、全然ですと女の子は首を振る。今日はモデルを務めてる雑誌で担当してた連載の仕事だったらしく、夕暮れには終わらせられたようだ。

「今日はね、新宿から原宿までを明治神宮周りを中心に歩いてたんです」

女の子のやつている連載は、東京とその近郊の中から毎回一箇所にスポットを当て、

その周辺を名所から路地裏まで回るとこ「つものらし」。女子自身がカメラで撮つた写

真や、その様子をカメラマンが撮つた写真を掲載し、レポーター感覚の文章を載せたものが合わせて完成するそうだ。

女子は今日回つてきた経路についての話を男に聞かせたが、男にとつてはタクシー

ドライバーの頃に幾度となく走つてきた場所だつたため、大概の部分は初耳というフリ

をして聞いてあげることとなつた。路地裏にこんな店があつた、こんなかわいい動物が

いたの、初めて耳にする内容もあつたが、正直どうでもいいものばかりでしかない。

それなのに、女子はいたく楽しそうに話していく。無邪氣という言葉がよく似合う。

それは男が大部分を欠いてきた感情だった。

女子の話が途切れた頃には、一人を挟むテーブルの上に置かれた鍋が煮立ちだして

いた。鍋は肉や魚介や野菜などが入つた味噌味で、女子の希望でここに予約を入れた。

以前に仕事の打ち上げで利用した店のようだ、それ以来この鍋が好物になつたらしい。

男と女子が待ち合わせをするのは食事処が多く、夕食を交えながら話をし、車で自宅まで送り届けるというのが大体の流れになつてゐる。店選びは女子の食べたいものを

聞いてからリストアップする事もあるが、今日のように初めから店 자체を選んでくる事もある。

「これ、さつき発見したんだ」

鍋が出来上がり、食べ始めると男はさつき取つておいた夕刊を差し出す。記事の中に

あつた特集に女の子が載っていたのだ。といつても、女の子が何かをしたわけじゃなく、

単にエンターテイメント的に日常を日記調に書いたものだった。

「ああ。私、まだ見てないんですよ」

そう言つて、女の子は夕刊を手に取つて読み出す。黙読だが、鼻歌を鳴らしてゐるのに

本人は気づいてるだろうか。

「ありがとうございます。よく見つけましたね」

女の子から新聞をはいと返される。その特集は毎月交代で新進気鋭の著名人が日常を

文章にするというもので、今月は片柳彩子が担当している。内容について特に決まりは

なく、本人の現在の心持ちや環境からプライベートや仕事についてなど題材は様々でいいらししい。

「ホントにまたま買った新聞に載つてたんだ」

「マジですか。ちょっと運命あるかも」

男の顔を見ながら女の子は笑つた。その反応に、男も自然と笑みを見せる。なぜか、

女の子といふと男は心が安らぐ。また、その感情に素直に甘えを出す自分もいる。ただ、

その一人をどこかから密観的に観察する自分もいる。緩めはするが、隙は見せやしない。

下手になるような事はしない。

その後、鍋を食べ終えるまで話は弾んだ。昨夜の件で男は上機嫌だつたため、笑顔も

絶えない。そんな男の様子を目にし、女の子も気分がよかつた。男がそうであるように、

女の子もまた男の存在に活力を注がれていたから。

店を出てからも浮いた心持ちは続き、二人でゲームセンターとボウリングへ行つた。

ゲームセンターに入るのは数年ぶりだ。対戦型の機種で対決したが、両方とも初心者も

同然の腕前だったので他人に見せられるようなレベルじゃない。訳も分からずに機械を

操り、知らぬ間に勝敗がつき、その意味の無さに面白くなる。クレ

ーンゲームにも挑戦したが、経験は無いに等しかったので三千円を使ってヒヨコのぬい

ぐるみを落とすのが精一杯だった。それでも、女の子は大切にしますと貰っていた。ボウリングも前の職場

で飲み会があると、一次会でたまに行くぐらいだった。女の子はよく友人や仕事仲間と

やるそうで、中々いい腕をしている。男は百一十一、女の子は百五十八というスコアで

勝負はつく。男は以前の仕事場の中では優秀な方だったが、簡単に鼻を折られた。それはそうだろう。男と試合をするのは体力が下降線を辿る熟年者、女の子と試合をするのは体力の衰えなんて知ることもない若者。張り合っている場所が元から違っているのだ

から。罰ゲームありきで始めたので、勝者は敗者への命令権が「えられる。何でもいいから私が喜ぶことをしてください、と女の子は告げた。

車で女の子を自宅へ送り届ける頃には二十三時になろうとしていた。車内でも会話は弾み、時間は実際よりも早く流れている錯覚に陥る。男は自らの立場をわきまえつつ、

この瞬間の樂時にも漫かつていていた。

「今日は本当に樂しかつたです。ありがとうございました」

「いや、いらっしゃる。ありがとうございます」

失礼します、と女の子は荷物を手に取る。助手席の扉を開けて外へ出ようとする女の

子の肩を掴み、振り向いたところに男は唇を合わせた。微妙に男は唇の位置をずらした

りしたが、女の子は固まつたようにそこにじっとする。目は開いていたが焦点が合つてなく、

不意を突かれたせいで何も出来ずにいた。

唇を離すと、よつやく女の子の体は正常の機能に戻つた。それで、男に視線を合わ

せたり、外したり、変に意識をして眼球はキヨロキヨロ動いている。言葉はなかつた。

余韻に浸るよう、車内は静けさに包まれていく。その中に占めるのは窮屈そうな空氣

が多かつた。女の子はどうしていいのか分からず、迷つた表情を浮かべている。なので、

男の方から助け舟を出した。おやすみと言つと、女の子は察したようにおやすみなさい

と言つて車を降りる。車の前を通り、いつもよりも早歩き、まことにマンションに入つてい

つた。

男は息をつき、車を出す。女の子からメールが届いたのは十分後、「やばい」という

題の後、「ドキドキが止まりません」と一文だけがあつた。男はフツと笑い、ゆっくり

心を落ち着かせてから寝るよつとメールを送信した。

それから、萎えていた男の心持ちは回復をみせた。久留米雀の遺

産を手にする口約束

を得たおかげで、向かうべき対象が明確になれたから。このまま週一で女の相手をして

いけば莫大な金が手に入る。それも、女は年なので性交はそれなりに続くはしないだろう。

いすれば性交渉が世話係となり、女の介護をこなしていく生活になる。日本人女性の平

均寿命からすれば、この生活は一十年ほどで終わるだろうか。それだけ我慢を繰り返せ

れば、男には五十歳手前に富が与えられる。

女との関係は呪縛に捕らわれたような心痛が伴うが、現実に強要されるものはない。

女からは、一人の関係に支障をきたさないのならと男の自由も約されている。他の女性

と仲良くなるのも関係を持つのも結婚するのも構わない。ただ、女との関係がバレては

ならないのは絶対的な条件となる。やるのなら完璧に嘘を突き通す、そうでないと全てが水の泡となる。せつかくのこれまでの苦労は意味を為さなくなり、そつまでして保つべき関係など男にはない。

「大田くん、こちら記者の柴村さん」

女の紹介で、男は軽く頭を下げる。

「で、いつちが新しくマネージャーになった大田です」

女の紹介で、男は挨拶とともに頭を下げる。目の前にいる女性と名刺を交換し、一言

三言を交わす。女性は痩せた体型に顔立ちもしつかりしていて、意思の通ったキャリア

ウーマンという印象を受けた。名刺に田を通す。週刊誌「女性生活」の記者の柴村忍、

見たところ三十歳代の後半あたりだろう。

女は女性生活に連載を持つている。男も勉強の名目で雑誌に一度目を通した。もう、

八年以上も続いているものらしい。なので、女と女性との会話はとても賑わっている。

連載は女が現代社会からテーマを一つ挙げ、それについて独自の考えを促すという内容

になつていて。そのテーマを決めるため、毎回一人でざつくばらんな話をしながら進め

ていく。担当は八年の間に数回替わつたらしいが、女は女性とは話が合うからと気に入

つたようで長く続いているらしい。確かに、一人は傍から眺めていても気が合っている

と思える。世の中に対し厳しい意見を持ち、それを素直に吐露している。

男は今週から久留米雀のマネージャーとしての仕事を正式に任せられた。先週は一週間、

引き継ぎという形で菊月にいろはを教えてもらいながら現場を回つていったので、今週

からが事実上の担当ということになる。この連載は隔週なので、女性とは初めての対面

だった。男は初対面の人とは人間性を探るためにも深く係わり合いにはならないように

する。どのぐらい首を入れて接していい相手なのか、自分や他人との会話を通して見定めていく。

仕事が終わると、そのまま女性を含めた三人で食事へ行くことになつた。時間が遅かつたのであつさりしたもののがいいとなり、うどん屋へ行つた。座敷の席へ通されると、

うどんと日本酒を注文して乾杯をする。ここでも女と女性の話は盛り上がつたが、男も

女性からいろいろな質問を受けた。どれもプロフィールを一つずつ突いていくものだつたが、男は真実と嘘を混ぜながら答える。過去については、掘られてもいいものとそうでないものがあるから。女性に限らず、久留米雀にも光村沙耶にも片柳彩子にも同じよ

うにしている。出身地は九州と嘘をつき、細かく聞かれたので熊本と嘘を重ねる。これまでの経験もそこから外れないようにした作り話にする。それ以外の生まれ年やら趣味やら特技やらは真実で答えた。よくあるシチュエーションにも思えたが、男には女性の瞳がいやに気にかかつた。記者という仕事柄からか、相手の言葉の裏側を覗いてくるような観察的な瞳をしていた。

一千八百八十九万三千一百五十三円、通帳の預金額を眺めながら男はその数字に実感を憶えていく。大学を出てからの六年間、タクシードライバーとして毎日をただ普通に生活してきた。野望は抱き続けてきたが、生活自体に欲を出す必要はない。家電も衣類も量販店で事足りるし、飲食もチヨーン店で満足できる。月給から家賃や生活費や雑費を引いても、年間で四百万円は貯められる。新しく転職してからの五ヶ月、月給に加え、久留米雀から毎週の行為の報酬代わりに渡される金もあり、ひと月でも百万円に近い額

は貯められた。金銭についても、住居についても、仕事についても、同世代の人間から比べると結構に高い位置にいるのではないだろうか。それでいい、その事実で俺は生きていける。

久留米雀からの特別な接触は仕事終わりの夕食と毎週の行為だった。料理はない人なので、食事は自動的に近く外食になる。朝食や昼食でも現場で弁当が出ない時には外で摑っている。仕事日にはその場に必ず男も帶同する。金は女持ちだし、女によく行く店なので味もいいため、悪い事ではない。逆に、それ以外に女からのコンタクトは無いに等しかった。電話が鳴る事もメールが届く事もほとんどない。線はきつちりと引いてくれるのは男にとつてはやりやすかった。

光村沙耶からは頻繁に発信が届く。女は男の事を恋人と信じ込んでいるのだから当然といえる。用事があるうと無からうと、声が聞きたいからと無理やりな理由をこじつけてくる。女は甘えた声を出し、男は落ち着いた声に終始する。二人の関係性ははつきりしていた。主導権を握るのは男、手綱を引かれるのは女。男の嗜め方の巧妙さによって、女は引かれている事にも気づかずにはいる。

片柳彩子からも比較的コンタクトは多く届く。この前のキスで、女の子の心は完全に男の方へ向けられている。あれ以来、女の子からのメールに変化がみられた。内容や文章や回数に変わりはないが、絵文字にハートマークが増えた。それ

だけのことだつたが、

それが女の子なりのアピールなのだろう。急に内容を変えたり、回数を増やすと、勝手な恋人気分が一方通行になつてしまいそうで大きな変化は控えたんだろう。

「ねえ、大田さんつてモテるでしょ？」

女性の質問に男は首を横に振る。

「全然ですよ、僕なんて」

「嘘だあ、その顔でモテないわけないでしょ」

決めつけのように女性は男に突いてくる。否定は続けたが、一向に信じよつとはしなかつた。

この日は久留米雀の女性生活での連載の打ち合わせの日だつた。担当はもちろん柴村

忍で、通常のように話は盛り上がつていぐ。今回のテーマは恋愛、最近の結婚活動などのブームを軸にしていきたいと女性から持ちかけられた。

そして、打ち合わせ終わりでまた三人で夕食を摂る事となつた。三人でというよりは、

女と女性の食事に付き合わされる形であったのは明らかだ。饅屋で女の金で三人で松を食べながら話は進む。仕事の流れを引いてきたよつた内容は恋愛になり、今度はそこに男も加わることになる。正直、こうなると女一人と男一人の対式になるのは読めたので、あまり癪に障るよつた発言は避けていく。

「今まで付き合つた人数は」

「三人とか四人じやないですかね」

あやふやな言葉にしたが、その通りだつた。交際といつ名目で付

き合つた人数はそれ

ぐらいだったが、男の中ではあくまで建前でしかない。金の羽振りのいい女、地位のある女、そういう人間しか相手にはしなかつた。男にとつては、別に付き合うかどうか

かは関係ない。利点のある女が惜しみなくそれを提供してくれる、その特典でしか選びはしない。たまたま、これまでの人生の中でそれに当てはまる人がそれだけだったということがある

いうことだ。

「もつといるでしょうに」
「いえ、ホントですよ」
「じゃ、一人が長いんだ」
「まあ、そんなところですね」

適当な対応をしておく。本当のところも、確かに一人は長いが単に相手の心が冷める

のを待つてるだけだ。女性側の感情が他方向へ行く、それが男の交際の破局の常になる。

男自身は感情の変化で動くことがないので、相手の心が萎えたら関係が終わるという方

式に自然となる。男からすれば感情論は無く、ただだらだらとした付き合いを続けるのみだ。

「好きなタイプは」
「特はないですよ」
「金と地位、とは言'はずがない。」
「一つか二つはあるでしょ。細かいところでも」
「そうですねえ、何か魅力を持った人ですかね。何でもいいですけど、尊敬のできる
ものを持つてる人かな」

「へえ、なんかありきたり」

女性はつまらなそうな表情をわざと浮かべる。もつと男の底をほじくりたいのだろう

けど、あいにくそんな滑る口は持ち合はない。第一、魅力といふ言葉に嘘はない。

尊敬とは言いすぎになるが、金や地位に魅力を感じる。努力で手に入るわけではない

がアンバランスであり、尊敬という言葉はあたらない。

「年下と年上ならどっちがいい」

「どっちってことはないですよ。年上の方は尊敬できますし、年下でも惹かれるもの

はありますし」

ほとんどマンツーマンのような質問の掛け方になっている。隣にいる久留米雀には相

槌を求める程度で、女性の興味は男に向いていた。男にはこの空気感は嫌なもので、今

すぐにも帰りたい思いに駆られる。

「なんか、さつきからその場を凌いでるみたいな返答が多いよね」

「どうですか」

「どうしてだろう。この仕事やつてるからかな、どれぐらい本音で話してるかが敏感

に察知できるんだよね」

女性は男の本音を読み取るように表情を眺めていく。厄介なタイプだ、と直感で思う。

他人の深い部分にまで無理にでも入り込もうとしてくる嫌味な人間。この手のタイプが

一番嫌いだ。まして、それが職業的なものだとしたら単なる病気だろ？。人の痛みなど

二の次にしか考えられない奴に心中など見せてたまるか。

結局、女性は男への質問攻撃を続けていった。男も折れずになあ

なあの返答に終始は

したが、胸糞悪い感覚を憶えながら表情だけはこじやかさを絶やさぬように心掛ける。

女もじぢぢらかとこりと女性に加担するような形で、一人で恋愛における女性側の感情を

男へとぶつけてく。よくそんなに言葉が出てくるな、とほやきたくなるほど愚痴る口は滑らかだった。

暑さに慣れだした体を擦り抜けていく夜風は涼しく心地いい。こう時に自然への懐かしさは蘇えつてくれる。子供の頃から肌に感じてきた四国の風が今でも一番この体に馴染んでる。たまに、無性に故郷が恋しくなつてしまつ。あと数年もすれば、自分も定年だ。そうしたら、故郷へと戻つて一日一日を豊かしく過ごしていこう。だが、その前にやらなければならぬことがある。

男性は視線を上へ向ける。そびえるマンションの中の一室、そこに大田恵一が住んでいる。男性がここへ来た時にはもう帰宅しており、電気は点いていた。なぜ、あの男はこんな一等地の高級物件へと引っ越ししたのだろうか。はっきり言って、運転手レベルが住んでいいところではない。そんな給料の相場が良いはずはない。こここの家賃だけでも月給を持っていかれてしまうだろ。身分不相応ビリのが、無謀といつ言葉しか当たらぬ。少なくとも、これまで田にしてきた限りではあの男はそんな事をするタイプでは

ない。

ならば、どうしてそれが可能なのか。理由はなんとなく察しがついている。久留米雀、

あの女が係わっているに違いない。あの男がタクシードライバーから転職した先の仕事

が久留米の所属する事務所の運転手ということは調べがついた。どういった経緯で転職

までしたのかは知らないが、おそらく前職の方が給料はいいんじやないだろうか。それ

をわざわざ移行したのだから、何かしらメリットがあつたんだろう。一体、その条件は

何なんだ。考えるも、答えは出でこない。芸能人と触れ合える、などという幼稚な思考

では絶対にない。そんなミーハーな人間ではない。あの男はもつと沈着冷静でドライな

人間のはずだ。

唯一、その切れた線を繋げる推理はある。ただ、それを事実とするには相応の心構え

が必要になる。それは、久留米雀が大田恵一を飼っているという線。あまりに突き抜け

すぎた突拍子もない線に見えるが、全くの根拠なしというわけでもない。三週間ほど前、

亀谷右京は一つの流れを目に留めていた。その日の夜、まだ部屋の明かりが点いてなか

った男の帰りを気長に待っていた。男は一時間ほどで帰宅する。いつもベンツ、転職

した際に男は車も変えた。新しい会社から支給されたものを私用としても使つてゐるのだ

る。駐車場の様子は外からは見えないが、その後に通過するロビーにはガラス張りの

ところもあつて眺められる。そこから通常通りの男の姿を眺めようとしたが、そこには

驚くべき光景があつた。男自身に変化はなかつたが、その後ろに女の姿があつたのだ。

男性は目を瞬かせ、詳細を捉えようと身を乗り出す。視力には自信があつたので、その距離からでも全体像を把握することは可能だ。男の後ろにいたのは久留米雀、間違いは

ない。二人はいたつて自然な様子でマンションの奥へと入っていく。しかし、その外觀は明らかに不自然でしかなかつた。運転手の部屋に入つてく芸能人、どういうことだ。

男性の頭内では様々な流れをこれでもかと行き交う。そのどれもが不正解な気がしてならない。胸が疼いてくる。変な思考が頭に湧き出でてくる。トイレでも借りに行つたのだ

るう、心内を正常に留めたくて強引にそつ脱おつとした。だが、十分が経ち、二十分が

経つても女は姿を見せない。トイレのついでに茶の一杯でも振る舞われてるのだろう、正常を乱していく心内への強引さをそう増しにさせる。だが、やがて男の部屋の電気は消えた。男性は自失に近い感覚に襲われ、暗くなつた男の部屋を眺めたまま立ち尽くす。

今、あの部屋で何が行われているのか。想像しただけで体に武者震いが生じる。還暦を超えた大物女優、容姿の優れた二十歳代の男、その一人が体を跨らせながら互いの欲望

を満たしていく。こんな・・・・・・・こんなことがあつていいのか。頭内を汚染される

寸前まで侵され、瞳孔が開いたまま男はくわえていたタバコを道に投げ捨てて帰つていった。

女は前職時の男の運転するタクシーに乗車、そこで男に惹かれる衝動が起こる。それは女の中で強い思いとなり、男となんとか連絡を取つて自らの所属する事務所へと引き抜く。女はそれでは飽き足らず、男の体すらも手に入れる。つまり、そういうことなのだろう。

男には何か相当な条件が提示されたに違いない。男はタクシードライバーという仕事を堅実にこなしていた。不当な欠勤もなく、勤務態度も良好、年齢の離れた職場仲間との交流にも問題はない。順調といえる毎日だったはずだ。それを辞めてまで移つたのだから、それなりの利益がなければならぬ。そして、さらに女と不埒な関係まで築いた。

考えたくないが、男はある女に飼われてるのだろう。おそらく、この高級マンション

も女が用意し、それ以外にも行為に見合つた報酬があるはずだ。それが何かは分からぬが、一人の大人の人間としての軸を折るだけの刺激物なのだろう。ついに本性を現したな、心内で男性はそう男へ告げる。お前は何かをする奴だと思つていたよ。このまま、大人しく平凡に生きていくような人間じゃない。そう睨み、今日

までこうやって追つっていたんだ。何だ。お前の目的は何なんだ。金か、地位か、名譽か、

何がお前の欲望に当てはまるんだ。まさか、もう一度過ちを繰り返

そ
う
な
ん
て
馬
鹿
げ
た
発
想
を
し
て
や
い
な
い
だ
ろ
う
な
。

その7（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいっいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

賑わう渋谷の街の一角にある焼肉店。20時過ぎという時間柄、店内には会社帰りのグループが多くいる。邪魔なほど会話は入り乱れてるのに、不思議とそれぞれが外部の会話に鬱陶しさを感じていない。男も状態は同じだった。通常ならば周囲に幅を広げる余裕を持っているが、今日の相手には隙を放るような真似は揚げ足を取られる御粗末な行動といった。

柴村忍から携帯に夕食の誘いが届いたのは昨日のことだった。久留米雀無しの一人での食事がいいと言われた時には、何か心に構えるものが必要なのかなと懸念した。焼肉店を選んだのは、単に三人の時には年長者に考慮して選択肢に入れてなかつたからというだけのこと。

対面席にいる女性には異様とも思える気が張られている。これまでに出会ってきた女とは一味違う気、自信にも似た様はどこへ向けられたものなのだろうか。何の目的があつて呼び出したのか、どんなカードを持っているのか、それによつて出方の次第も変えていかなければならない。

メニューは一通りの肉の種類を一人前ずつ注文し、それを一人で分け合つた。食事に

は何の変哲もなく、会話の内容も疑問が生じるようなものではない。ただ、このままで

すんなりと終わる気はしなかった。

「ねえ、大田くんつて久留米さんにヘッドハンティングされたんでしょ」

「まあ、そんなようなところですかね」

「そりや、ヘッドハンティングするよね。こんぐらに良い男がいたら」

そう言い、女性は男を見つめる。男はそれを恥ずかしそうに制する。

「ああ見えてね、久留米さんは格好いい男が好きなのよ。普段はクールに装つてるけ

れど、意外に普通なところもあつたりするわけ。あなたの前に運転手やつてた人も格好

よかつたわ。結婚するからってことで辞めちゃつたけどね」

「そうか、前の運転手も同じようなタイプだったのか。もしや、そいつにも札束で体を求めてたりしたのか。結婚を機に退職したといつといふからするに、可能性はあるかもしない。だとしたら、あの年齢で大したもんだ。買われる側も買われる側、と言えるだろうが。

「実のところだけど、私ちよつと怪しいかなつて思つてたの」「何が」

「久留米さんとその前の運転手」

その言葉は男に緊張をもたらす。やはり、この女性は物事の本質を突いている。抜群の思考を持ち、自らの目指す場所へと進んでいる。その先に自分がいるのか、そう心に宿る。

「そうなんですか」

「そうじゃないかな、って疑つただけ。何も確証はないわよ」

「どうして、そう疑つたんですか」

「なんとなく、その男の人が久留米さんの前だとそわそわする節があつたの。厳しく

してて恐がつてゐるのかなつて思つたんだけど、ちよつと違つなつて思つて。怯えてるは

言いすぎかもしないけど、普通とは表せない緊張感だつた。久留米さんはいつも通りにしていたんだけどね。職業柄、いろんな人を見てくるから洞察力はそれなりに優れ

てるの」

おそらく、女性の推測は当たつてゐるんだろうと思つた。女性の目を見ていると、その目の奥から放たれる力の強さを感じられる。洞察力が優れてるというのは決して自意識

過剰ではないだろう。同時に、気を引き締める必要もある。前の運転手のように、女性に関係を察知されるような事があつてはならない。せつかく築いてきたものが全て崩壊してしまう。

「それで、あなたにはどうかなつて思つて」

女性の視線が芯を突いてくる。ここが主文、これこそが男に聞くべき目的の一文だと

強く。

「ビラ、と言つますと」

はぐらかし、僅かながらの時間を作る。無論、女性の言葉の真意ぐらい初めから分かつていて。この秒単位の間でしかるべき返答を用意するためのものだ。

「久留米さん、あなたに手を出したりしてない」

女性の言葉から一つ間を置く。急な反応は予め用意されたものだと窺われるかもしれない

ないから。考慮の間が過ぎると、男は不意に笑い出した。出来るかぎりの自然さを心掛け。

「そんなこと、あるわけないじゃないですか。久留米さんが僕に、でしょ？」

見当違い、そう思わせるように演技を続ける。記者だらうが何だろうが、ボロを出しやしない。女性は男の笑い顔を見ている。自然な様を繕い、観察という奥の思いを携えながら。

「そうね、そりゃそうよね」

そう、女性も続くよろしく笑い出す。男が逃げきった瞬間だった。表面上には映さない裏側での攻防に耐え切つた。

男は女性を交わせた安堵を得ていく。しかし、その男の裏側に見た疑問を女性は崩してはいなかつた。この男は不安定な足場に気丈にしているのではないか、と記者の勘が生まれていく。

「そう・・・・・柴村さんが」

その週の暗夜、久留米雀との行為は行われた。行為自体には何の変化もなかつたが、

男の心には震があつた。それを押し出すように、女の体を下半身で突いていく。年齢によるものか、女の体は反応に鈍さがあつたが、今日に限つてはいくらでも突いてやれる

気があつた。

行為が終わり、ベッドに横になると氣を落ち着かせるための間となる。行為の長さはままに疲労に繋がり、正常を取り戻すまでには時間が必要になる。幾らかの時が過ぎ、

互いに息遣いが落ち着いてくると男は女に話を切り出した。柴村忍が二人の関係に勘を働かせている、という話を。

男の話に、女は驚きを見せた。まさか、氣の合う仕事仲間にそんなふうに思われてたとは考へてもみなかつたようだ。だが、相手も週刊誌の記者だ。油断を見せた人間の懷に入る事は職業病といえどある。女性は女のそこへ入つた。そこから取り出した疑問は中々に引き甲斐のある対象といえた。

「どこまで真剣なのは分かりませんが、何か事が起こつてからでは遅くなります」

「事が起ころる、つて」

「週刊誌に掲載されるかもしない、ということです」

女は頭内に男の言葉の想像を膨らませる。それを撥ね退けるように、軽い笑みを浮かべた。

「そんなことはしないわ。仕事相手を売るような行為よ。いくら大きなネタとしても、

想像の範疇の情報を無理やり出ししたりはしないでしょ」

「だとは思います。ただ、もしもそれをしてしまつたらという危惧として言つてるんです」

女は言葉を止め、考える。今ある中での最善の策、それは一体何なんだろうかと窓外

の闇を見つめる。

男はここで女に話すまでに考え尽くした。確かに、女の言つよう
に想像の壁を超える
ものではないと思つ。少なくとも、現時点では。しかし、そこまで
辿り着いてる人間が

いるのだから危機感を募らせておく必要はある。

「それは無いわ。そんな無謀なことはしないし、出世に田が眩む
タイプでもない、

スクープで一発当てやろうひとつ人でもないから。人間関係は割と
大事にしてるらしい
から、私を裏切ってまで証拠もない記事を載せたりはしない。結婚
したら退職する、と
言つていたし」

女は女性を感じたようだ。男自身、女の言葉は納得のいくものだ
と思う。あくまで、
載つてからでは遅いといつ、可能性の話ではある。ただ、そつまで
考え方せられる不安
な心を起こすものがあの女性の田の奥にはあった。

翌日、男は光村沙耶と片柳彩子に会つた。週に一度、久留米雀を
抱いた翌田は女を車
で送り届け、そのまま前者のマンションへ行き、夜に後者と待ち合
わせて会うのが通例
となつてゐる。

女と行為を交わすのはなるべく翌田が休日の時にしてもらつてい
る。共に夜を明かし、
その足で仕事場へ向かうのは気分を転換するのが難しいからといふ
意見に女は了承して
くれた。仕事が詰まつていてどうしても翌田も撮影になってしまつ
時には、女の撮影中

に一時現場を離れる許可をもらつてゐる。その間に前者のマンショ
ンへ行き、仕事終わ
りで後者と待ち合わせて会う。どこかしらで捻れた精神を戻さない
と、己が屈折してい
つていつか滅んでしまう。そつたために、前者の部屋での行
為で体内を清浄させ、
後者と外で会うことで心内を清浄させる。その循環は男の中ではな
くてはならないもの
となつていた。

光村沙耶は男の裏を疑うことなどなく身を捧げる。男の引き締ま
つた肉体に抱かれる
ことが最上の喜びなのだとして声を上げていく。当然、女は男の肉
体がその前に老体を
抱いて蝕まれてきたものだとは知らない。休日に恋人である自分の
元へと朝から来てく
れる優しい人だと思い込んでいた。男がそんな行為に走つてゐるどこ
ろか、久留米雀の側
で働いていることも知りはしない。余計な勘の利かせはいらぬし、
いくら男を信じき
つてるとはいえ、普段から男と接することを仕事としているキャバ
嬢の洞察力もあなが
ちに侮れない。

片柳彩子も男の裏を疑うことなどなく現実を楽しむ。男との多く
はない時間を過ごす
ことに無邪気に喜びを感じていく。当然、女の子も男の心内がその
前に老体を抱いて蝕
まれてきたものだとは知らない。週に一度か二度、こうして夕食を
機にして会う、友人
でもなく恋人までいかない関係なのだと思い込んでいた。
正直、女の子は歯痒い思いを抑えている。毎回会うと、一人はそ

の間に起きたこと

などを話題にして楽しい会話を続ける。それはそれでよく、その時
間はとても大切にし

たいものだ。ただ、本当は進展を望んでるのも事実として胸の内に
存在する。現状に不

満はないけれど、やつぱり恋人以上の関係になりたい。先日の男か
らのキスによつて、

その思いはより強くなつた。

男は自分のことをどう思つているんだろうか。自分と同じような
想いを持つてくれて

いるんだろうか。それとも、妹のように思われたり、友人と思われ
たり、体の良い遊び

相手だと思われたりしているんだろうか。違う、そんなことはない。
キスまでしてくれ

たんだ、そんなに遠い存在に位置付けられてはいなはずだ。かと
いつて、適当に女性

をたぶらかすような人でもない。この人は誠実で優しい、他人の心
を思いやれる男性な

んだ。

「ねえ」

「あつ、ハイ」

男の呼びかけで、女の子は現実に引き戻された。男との事を考
てるうちに気が離れ
てしまつていたようだ。

「今の話、聞いてなかつたかな」

「いえ、あの・・・・・すいません

なんとか空気を保とうと試みたが、観念した。下手な嘘をついて
も、掘り下げられた

りしたらすぐにバレてしまう。それなら、心は辛いにしても素直に
謝つた方がまだマシ

だろ？。

「「」めん、つまらない話だつたかな」

「違います、違います。私が聞いてなかつただけです」

それも聞こえは似たよつなものだと気づき、女の子はまた自分を辛くさせる。息をつく様を見て、男はフツと笑みを見せる。

「そんな落ち込まないで。別に、怒つたわけじゃないんだから。悪いのは自分よがりの話をした僕だ」

「・・・・・でも」

男の優しさに心を摘ままれる。それに身を委ねたい思い、そんなに甘えていい関係だ

ろうかという思いも生まれる。

ちなみに、と男は話を続けた。

「何を考えてたの、さつき」

「えつ」

女の子は虚を突かれる。一分前の思考に帰る、とても男に直接に口にできる内容ではない。

「あの、内緒で」

「なんだ、そう言わると知りたくなんな」

そう言つと、互いに笑い合つ。今はこの関係でいい、と女の子は思つた。関係の進展

を望むことより、告げることで関係が壊れてしまつた方が今の自分には大きくなるから。

食事が終わり、男は女の子を玄関へ送り届ける。ありがとうございましたと女の子が夕食と家まで送つてくれた事へ感謝を告げると、また行こうと男が答える。通常通りの

会話、それで別れるはずだつた。

だが次の瞬間、瞬く光が目に飛び込んできた。光は連射し、視界を奪う。光と同時に音も聞こえ、それが何の音であるかは分かりえた。ただ、現状を理解するには至らなかつた。

光が止まり、視界が次第に復活していく。しかし、夜も遅いので元々の視界が悪く、周りを見渡してもうまく識別するのが難しい。だが、あるものを捉えると事態の悪化を判断することは可能になつた。

車の前に立つていたのは柴村忍だつた。手にはカメラを携え、レンズはこちらを向いている。獲物を捕らえる真の瞳をしており、口角も上がっている。その要素を並べてい

くと、男は状況を理解することができた。隣を見ると、助手席の女の子は目を開いている。何が起こつたのか、まだ判断できずにいるようだ。

女性はこちらへと歩いてきて、運転席の窓ガラスを「コンコン」と一回小突く。男が窓を

開くと、女性は成果をあげた満足感を表した表情でこちらを見遣る。現在の状況の良し悪しがままに映し出されていた。

「こんばんは」

余裕のある感じを女性は醸し出している。上手と下手、どちらがどちらに嵌るのかは一目瞭然だつた。

「どうということだ、これは」

構えた表情で男は訊く。もつときつく問い合わせやりたいが、感情はここでは抑え込

める。

「わあ、どうこう」とぞしょうねえ

意図的に無駄な白を切る女性へ男は怒りを覚える。振り切れる状況だなんて思っちゃいないくせに。

「ふざけるな。どうして、あんたがここにいる」

「偶然通り掛かったのかな」

「偶然のわけがない」

周りにはマンションや住宅しかない。女性の自宅付近でもないのにたまたま通る場所なんかじゃない。これは明らかに故意的なものだ。だとすれば、考えられる推測は限られてくる。

「着けてきたな」

男の言葉に、女性はフフフと笑う。的中だった。
迂闊だった。まさか、ここに来るのは思いもしていなかつたから。攻められるとするなら久留米雀との関係だと氣を張つていて、それ以外のところに重点など置いていかなかつた。

男が言葉に窮していると、女性の方から開口する。

「あなたには何かあると思ってたのよ。何かを包み隠しているような雰囲気が感じられた。それが何かを知りたくて。追つてみて正解だったわ。こんな良い場面が撮れるなんてね」

湧いてくる怒りを抑える男を余所目に、女性は助手席の女の子へどつもと軽い挨拶を投げる。女の子はまだ田の前で起こった事実を把握できず、怒ったり、落ちたりもする

ことが出来ずにある。男と女性の言葉のやり取りで知り合いなのは分かりえるが、実際どんな関係性なのは分からぬ。今はただ、こんがらがる頭内に飛び交う一いつづつのピースを嵌めていくしかない。

「片柳彩子さんよね、初めてまして」

男を挟んだ先の相手へ言葉を掛けるが、女の子は返答しなかつた。正直、何が正しいのかが探し当てられない。

「私、こういう者です」

女性は手を伸ばし、助手席の女の子へ名刺を差し出す。間にいた男は別に仲介したりなどしない。女の子は挨拶はしなかつたが、この名刺は受け取つた。人物の謎を解きたかつたから。

名刺を見る。女性の名前は柴村忍、週刊誌の女性生活の記者。雑誌は知つてゐる、見たことはないけれど。よく書店やコンビニの入口の近めの棚に置かれている成人女性向けの週刊誌の中の一つ、という印象ぐらいでしかない。その記者がどうしてこんなところにいるのか。運転席の男とどうして知り合いなのか。解消されない謎はまだまだ広がつていいく。

「驚いたわ。彼を追つてきたら、まさかあなたが出てくるなんて。彼とはどういった関係かしら」

女性の直接的な言葉に、女の子は顔を少し伏せる。

「いい加減にしてくれないか。これはまったくのプライベートだぞ」

女の子の反応を見て、男が言葉を挟む。

「あら、嫌だわ。週刊誌の記者は有名人の裏側を撮るのも仕事じゃない。表側ばっか

載せてるだけなら、スポーツ新聞で充分だし」

女性は開き直っている。この状況において、この堂々さ加減は厄介者以外の何者でもない。

「有名人であるなら、こういうところには気を張つてないと。まして、売り出し中のモデルなんて恰好のネタなんだから」

挑発ともとれる口調で女性は女の子へと放る。女の子は目を細め、悔しそうな表情を浮かべていた。

「何がしたいんだ、君は一体」

「何って、とりあえず本に載せるに決まってるじゃない。こんなおいしいネタ、寝かせたままにするわけないでしょ。まあ、片柳さんにはあらためて事務所を通して報告がいくと思うけど」

「何を言つてる。そんな勝手な真似、許されると思つてるのか」

「許すも許さないも、私は記者として当然の事をしたまでよ。撮るべき対象がそこにあつたから撮つた。当たり前の流れよ。抗議したければすればいいわ。するだけ無駄でしちゃうけど」

悔しいが、女性の言つ通りだった。報道の自由がある以上、このレベルで抗議にでたところで結果は見えている。気の張りを弱くしていた男の負け、そういう己を納得させるしかない。

じゃあね、と女性は余裕の表情でその場を後にしていく。その後ろ姿を眺めながら、

男は展開のまずさを感じていく。本人と面と向かっている間は高揚していたものが冷め

てきて、次第に自身の感覚が取り戻される。

「・・・・・運転手さん」

隣からの声で、女の子の存在を思い出した。眼前で起じた出来事に夢中になつてしまい、いつしか助手席に座る女の子のことに意識を向ける心のゆとりの余りさえ無くなつていた。

「もう帰った方がいい」

柔に言つたが、本音は邪魔だから帰つてほしかつた。心内のまどまりが利かないでの、

早く一人になりたくて。

女の子は男の言葉を受けても帰らなかつた。こんな事になつたのに、このまま素直に帰つてしまつていいいのだろうか。そう思いながら、何も言つことなく、ただ隣で男の方を向いている。

「ごめん、帰つてくれないか」

今度は言い捨てるように投げた。優しさのない視線を送りつけると、女の子はこちらを固まつたように見ていた。だんだんと子犬みたいに瞳を潤ませていくのも分かつたが、

今は多少萎縮をさせても手の届く空間から離れてもらいたかった。

女の子は荷物を抱きかかえて、おやすみなさいと力のない声で呟く。車を出していく姿

も、マンションへと入つていく姿も、視界に入つた程度で特に目で追つてはいけない。

それどころではなかつた。

男はハンドルに頭をぶつけ、自らの失敗に大きく息をつく。こんな事になるなんて。

細心の注意は払つてきたつもりだったのに、あんな女にしてやられるとは。不覚としか言いようがない。

あの写真が世間に出てしまつのはまずい。久留米雀は他の誰とどんな関係を持とうと構わないと言つているが、体裁はそつはいかない。今いる事務所における立場は一気に低くなり、下手をすれば責任問題に発展する可能性だつてある。どうにかしなければいけない。

男はその足で光村沙耶の部屋を訪れた。女は仕事に出てる時間のため、ただの真っ暗闇の部屋だった。電気も点けず、ベッドに身をあずけ、巻き返しのための作戦を頭内に巡させていく。

女は通常通りに朝に帰つてきた。ビームのみすぼらしい中年男性にアフターで送つてもらつたりしたのだろうが、そんなことに一切の嫉妬はない。久留米雀から自分に対しうての関係と似たようなものだ。こちらの思惑に添つてくれるのなら、あとは何をしようとも勝手にすればいい。

「どうしたの」

ベッドに寝そべつている男に驚いた様子で女は声を掛ける。頻繁にここに来ているが、一日連続で来ることは割と少なかつたから。

男は浅い眠りについていたところから起され、女の存在を視界に捉える。今の男の助けになるのはここだった。

「なんか、会いたくなつた」

夢うつつの状態で零した嘘はかえつて真実味が増した。女は言葉をそのまま受け止め、

喜色に満ちていく。

「シャワーだけ浴びてきちゃうね」

そう言い置き、女は荷物を置いて浴室へ向かつ。ちらりとだけ顔を見たが、はにかんでいた。

風呂から出でると、女はバスタオルだけを体に巻いてベッドに入つてくる。昨日と同じ流れ、要是抱いて欲しいといふことだ。男は正直そんな気分ではなかつたが、後のために女のは乗せておきたいので望むよつとした。一日続けての行為だつたが、女は

昨日に劣らないほど強く感じていく。男はそれほどではなかつたが、女の気を下げないために声を上げるよつとして誤魔化した。やがて絶頂を迎えると、条件の責務を果たし条件を得られた感覚を得られた。

「この前に話してた、不動産会社の水増しがどうのってあつただろ」

男の胸に頬を擦る女の髪を梳きながら話を始める。何氣ない会話の始まりという印象を与えながら、本題に入つていいく。

「うん。それが」

女は会話の内容に重みは見い出してない。男と密接していられる事の方が女にとって

重要なことだつたから。男はそれを逆手に取り、話の内容を不自然と悟られないよう

深みに沈めていく。

「あれ、結局どうなったのかなあって思つて」

いつぐらい前だかは忘れたが、それは女の口から零された。男でも名前を知つている

不動産会社の違法な水増しの話だ。難しい内容は女には分からなかつたようだが、要は

アフターサービスとして徴収される手数料の一部がそうと疑われているらしい。ケアの

内容によつて一部と一部に対象が分かれているが、実際は一部にあたるケアは手前文句

だけのもので活用される事はほほ無いに等しく、消費者の安心を得るために厚みのある

宣伝としている。別法人として扱われ、経理も引き離されているので実体は謎が多いとされてゐる。

女がキャバクラで相手をした四十歳代の一人の会社員が酒に酔つて、膾を出すように

吐き出した話だ。数年前から立ち上げられたもので、発足に係わつたのは上層部の人間

がほとんどとされている。よつて、下の人間たちの中では悪い話が立ち上がる。一部の

お偉いさん方がグルになつて作り上げた資金の集めどひら、本当は名前だけで実体さえ

ない組織、溜まつていいく一方の金は投資へあててゐる、などなど。女にはまるで引きの

ない話だつたが、男には頭に留めておくだけの情報だつた。そして、それを有効に活用すべき時が来たのだ。

「ああ。そういうえば、三日前にまた同じ一人が来たよ。なんか、両方とも半分ぐらい禿げてて幸薄くてさあ。んで、話してくる内容まで愚痴ばっかだから苛々してきちゃつた」

そんなことはどうでもいい。

「えっとねえ、絶対に違法だつていうのは言つてたかな。会社の中でも数人しか実体は把握できないみたいで、調べようにもバレたらクビだから恐くて誰もやらないって。

実質的に仕切つてるのは副社長で、社長の弟さんみたい。溜まつたお金は社長が個人的に企業なんかに有利子で貸し付けてるらしいよ。まあ、全部社内に出回つてると噂の段階

だけど

「へえ、そなんだ」

興味半分を外に出し、頭の中では女の言葉を全てインプットしていく。それからは特には喋らず、女の頭や肩や背中を撫でながら早く寝につくのを待つた。しばらくして女

の寝息が聞こえると、男は入力した記憶をメモに書いていく。有力な情報を得られて、

男はようやく安息に浸れた。

男は一時間から二時間の仮眠を取り、光村沙耶の部屋を後にする。今日は久留米雀の仕事が午後からだったので、午前中は自由がきいた。そのおかげで落ちていた気を元に戻すことができ、仕事に差し支えずに済んだ。この日は情報番組の収録があり、いつも

のように女は軽快に言葉を走らせていく。昨日から今日にかけ、男にどんな受難が降り

かかっていたかなど知りもせず。まあ、それでいいだろ。今回は女に報せが行くこともなく、事を潰してみせる。

「運転手さん、今は仕事中ですか。出来れば、昨日の事で話がしたいです。きっと、私と運転手さんの間だけでも留めておけないと思つから。仕事が終わつたら、連絡

ください」

片柳彩子からのメールだつた。同じようなメールが朝から何通か受信されていたが、男は返信していない。余計ないぞ! 彼女を巻き込むつもりはない。ただでさえ、柴

村忍と自分とのラインには関係ないのにあんなに遭わせてしまつたのだから。今回の

件に関しては、自分で決着をつけた。だから、話し合ひをする必要も、途中経過を報告する必要もない。

仕事終わり、女を自宅まで届けると男は携帯を手に取る。連絡先は片柳彩子ではなく柴村忍だ。

「はい、もしもし」

その電話口の声に昨日までの明らかに違つ感情が湧いてくる。当然、女性の声 자체に変化はない。

「大田です。分かりますか」

「分かるわよ。どうしたの」どうしたの、じゃない。あんな姑息な真似までしておいで、よくもまあ平然を貫ける

もんだ。

「今、どこにいますか」

「会社よ。明日までに記事を仕上げないとなんないから、今日中に大まかに一通りは書いておきたいの」

「それって・・・・・・」

「そうよ。昨日のあなたと隣のかわいいお嬢さんの事。驚くでしょうねえ、この記事

が出回つたら」「

ダメだ。完全に芸能のスキャンダルに溺れた一流記者と化してしまっている。正面から願いを言つても、田先の勲章に眩んだ耳には聞こえやしないだろう。強行的に捩じ伏せるしかない。

「その記事を出すの、ちょっと待つてもらえないですか

男の言葉に、電話越しに女性の微笑が聞こえた。

「ねえ、そのちょっと待つてもらえませんかで待つてもらえると思う。そんな甘いもんじやないでしょ」

女性からの言葉は上から投げられてくる。男との優劣は女性の中で結構な差となつているのだろう。

「もちろん、何の条件も無しにとは言いません

「何。何か、面白いことでもしてくれるの」

「今から少し時間を取れませんか」

「今からねえ。まあいいわ、話ぐらいなら聞いてあげるわよ」

電話を切ると、車を走らせ始める。明日には記事を仕上げるといふことは機会は今

しかない。確実な結果を求めるべばならない。あんなネタ、市場になんか出してたま

るか。

待ち合わせ場所は女性の勤める会社の近くにある「アーミレス」だった。男が着いた時はもう女性は席に座つてアイスティーを飲んでいた。男の姿を確かめると、女性は呑氣にもこちらに手を振つてくる。男は女性の対面の席に座り、ホットコーヒーをオーダーした。

二十一時になろうとしていたが、店内にはまだ数組の客がいた。ただ、今は他人間に思考を向ける隙間はないに等しい。

「聞きましょうかしら。その面白い条件つてやつ」

女性が開口すると、男はスースの内ポケットから資料を取り出す。資料といつても、

今朝に書き込んだメモ帳だ。

「これは何」

「ある不動産会社の不当な手数料の水増しに関するメモだ」

女性の目の色が変わる。テーブルに置かれたメモ帳の内容に目を通していくと、確かに

に男の言葉の通りのことが書かれている。

「信用できる情報なの、これ」

「おそらく」

「証拠は」

「具体的なものはない。ただ、これはそこの社員の口から出たものだ。信用はできる

に違いない。詳しく調べれば、きっと汚いものが出てくるはずだ」

男の言葉を耳にしながら、女はメモ帳を何度も眺める。一端の記者であるなら、魅力のあるネタのはずだ。売り出し中といえど知名度は若い世代ぐらいにしか通じていない

モデルのスキャンダルに比べれば、どちらを取ることがいいのかは説明するまでもないだろう。

「なるほどね。これと昨日のネタを取り引きしようつてことか」「どちらを取るかは君次第だ。まあ、考える必要はないと思つけど

ど

男は自信に満ちた演技を続ける。本当は光村沙耶から伝えられた間接的なネタでしか

ないが、自らの功名によるものである印象を植えつけていく。

「こんな情報、どうから手に入れたのよ

「わあ、どうからだつたかな」

見え見えの白を切る。まさか、疑いを持たれてる久留米雀、確信を撮られた片柳彩子、

それ以外にキヤバ嬢の女がいるとは言えやしない。

「あなた、ただのマネージャーじゃないわね」

「何を言いますか。僕は久留米雀の単なる現場マネージャーにすきませんよ」

男が口角を上げると、女性は真顔のままで笑みを零す。女性にしたら、してやられた

という感覚が強かった。記者としては、男が提供してきたネタを選ぶのが正しいに決ま

つている。ただ、女性としては自分自身で掘んだネタに愛着もある。それが单なる素人の持ってきたネタにあっさりと逆転されてしまったのだ。心中が揺れるのは仕方のないところだった。

「分かったわ。これをキチンと調べさせてもらひ。もし本当なら、ありがたく使わせてもらうわ。その代わり、ガセネタと判明したら昨日の記事にする。それで文句ない

わね

「ああ。ただし、事実なら昨日の『写真はネガ』と『カラーライフが貰う』

「いいわよ。それで交渉成立ね」

互いに不本意な破片は持ちながら契約は結ばれた。女性は記事をやり直さないとなら

ないからと店を後にしていく。掲載を未然に防ぐことができ、男は

背凭れに寄り掛かり

息をついた。

「運転手さん、何回も連絡したんですよ

電話口の片柳彩子は安堵と不満の混ざった口調になっていた。今一日一日で様々な事が

あり、連絡をするのがずいぶん遅れてしまった。

「『めん。今日は忙しかったんだ』

女の子へと伝えるのは全てが終わってから事後報告にしてみつと思つていた。いらない

心配はなるべく少なくなるよ。

「でも、よかつたです」

「んつ」

「全然返信が来なかつたから。もしかして、避けられてるのかと思つて」

女の子は女の子で、今日一日を様々な思いで過ごしていた。あんな写真を撮られてしまい、どうしようと。事務所やスタッフに迷惑を掛け、怒られるかもしれない。ファンに落胆を与え、離れられてしまつかもしない。マスクコミから攻められ、心が折れてしまつかもしない。マイナス要素ばかりを考えると、どうしてばかりだった。も気分は落ちていくばかりだった。

だから、男の声が聞きたかった。話しかけた必要がある」とはもちらんだが、何よりも男から直接前向きな言葉の一つでも掛けたら胸の内の不安が和らぐと思ったから。

「そんなことはしないよ。本当に忙しかつただけだから」

「そう。なら、安心しました」

女の子は一つ心を落ち着ける。そして、また引き締めなおす。

「それで、昨日の事なんですけど」

「ああ、その事ならもういいんだ」

「えつ」

女の子は当然に驚く。この人は何でそんな樂観的な言葉を出しているんだ、と多少に気が抜けてしまいそうになるくらい。

「昨日の事について、さつき柴村さんと話をしてきたんだ。なんとか掲載は無しには

出来ないか、って。そしたら、実は向こうもわれについて考えてたところだつたらしい

んだ

「どうですか」

「写真がね、うまく撮れてなかつたみたいなんだ。昨日、帽子を被つてただる。その帽子の鍔のせいで、顔の鼻の辺りまでが『まこ』と隠れてたんだ。彼女は上から撮つて

たし、君は伏し目がちになつていたから」

女の子は昨夜の自分を思い起す。あの時、女性からいきなり写

真を撮られた時の。

確かに、帽子は被つていた。ただ、そんなに伏し目がちになつていただろうか。でも、

写真がそうなつているならそうなのだろう。急な展開で、記憶も曖

昧になつてゐるのかも
しれなー!

「柴村さんもそこに迷っていたんだ。無理やりにでも掲載に持ち込むことも可能ではあるけど、正直そんなに望ましくはない。やつぱり、記者魂としては明確な記事を載せたいだろ？つか、」

女の子の心はハラハラしていく。結果どうなったのか、男の言葉を喉から手が出るほど待ち望む。

「これは千載一遇の好機だと思った。こんな偶然のような展開、逃しちゃいけない。

「彼女とは知り合いだから、しょうがないなって感じで掲載は取り下げてくれた」

「本当にですか」

ね
」

男が笑うと 女の子はよかにたむと大きく笑を抜いた
昨日から 張り続けていたもの

無論、男の言葉の大部分は嘘だ。女性から昨夜の写真を見せられが、女の子の顔は

踏み込んでいたかもしれない。それ以上の見返りがなければ、取り止めになどしないだろ。言うまでもなく、高級フランス料理など奢りはしない。一ちらも見返りのない事

はしない。

「ホント、どうしようとかと思つてたんですよ。昨日とか、全然寝れなくて」

女の子は心の底から氣を和らげていく。

「そんなに俺と載るのが嫌だった、とか」

「違いますってば」

「分かってるよ。いろいろあるからね、売り出し中のモーテルは」

「運転手さん」

「ごめんごめん」と電話越しに謝る。

「これで疲れも取れただろう。今日はぐっすり休むといいよ」

「はい、運転手さんもね」

とにかくよかつた。これで、あとは不動産会社のネタが眞実であれば万事がまとまる。

おそれく、問題はないだろ？

その8（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

進展があったのは、それから三週間後だった。週刊誌の女性生活のトップ記事として、不動産会社の不当なサービス料の水増し、それによる多額の収入の流れの違法性が取り上げられていた。当然、一誌だけのスクープとなり、雑誌の売れ行きは前週までと比較になるようなものではなかつた。警察も動き出し、膾が出ることやう時間は掛からないだろう。

男はその日の夜、柴村忍と食事の待ち合わせをしていた。男の提供したネタが記事となり、大きな成功となつた事で女性は御馳走したいと気を良くしていた。片柳彩子との写真のネガも渡してもらえることになり、男は無論にそちらをメインとして約束を了承する。

二十時過ぎ、男は待ち合わせ場所の居酒屋に到着する。とにかく飲みたい気分だから、という女性の意見でここに決まった。男が席に通されると、女性は既に一杯目を飲みだしていた。どうやら、スクープを上げられた事に対して、相当心を持ち上げられているようだ。

「まあ、今日は飲もうじゃないの」

女性のテンションの高さに、男も程よく着いていく。そのまま氣

分をよくさせておき、

ネガさえ取り戻せば用は終わりだ。

女性はスクープによつて周囲から多くの賞賛を得たようだ。ただ、本人的には自分が

撮つたもので勝ち取りたかったのが本音だつたともぼやく。そんな喜びと羨みの話を男

は適当に聞いていく。

女性からネタの出元をまた問い合わせたが、眞実は避ける。社員の話が間接的に自分のところまで伝わつたと逃げておく。

女性の飲みのピッチは早かつた。ビールに焼酎と実に親父くさく、アルコールを流し

込むように体に入れていく。しかし、その割に酔いの回りはさほどでもなかつた。どう

やら、元々酒には強いようだ。頬は赤みがかり、目は細くなつてきて、絡むような言葉

が多くなつているが、そこからが長かつた。さつさと用事だけ済ませて帰りたい男から

したら、面倒な酔い方といえる。

結局、女性は三時間以上そこで飲み続け、タクシーで帰宅した頃には口を跨ぐ手前に

なつていた。女性は中々に酔つていたが、それでも一人で歩いていられる程度に正気は

保つてゐる。男は自宅にあるというネガを貰つたために着いてい、女性の部屋まで入つ

ていく。部屋の印象はいたつて年相応なシンプルなものといえた。無理もしてないし、

無駄もない。

女性はリビングに荷物を置くと、台所で酔いを醒ますための水を飲む。そして、男に

ちょっと待つてと言った。玄関近くの部屋へ入っていく。一分ほどで女性は部屋から出てきた。右手にはネガが持たれている。

「はい。どうせ廃棄するんだから、まんまでいいでしょ」

そう女性はネガを裸のままで男に渡す。よつやく手元にせつてきた成果に男は安堵の息をつく。

「確かに。それじゃあ、僕は失礼します」

踵を返し、玄関へ向かう。靴を履き、外へ出ようとドアのノブに手を掛けると後ろから温もりが被さった。正気なのか、酔っているのか、女性は男の背中をしつかりと抱きしめる。

「何の真似ですか」

酔いか否か、どちらじろじろ強い態度で制すべきだとして男は低めの声を送る。ネガはもうこちらの手にあるのだから、何も怯むことはない。

「もうちょっとここにいてよ」

さつきまでよりも小さい声で呟く。女性なりの甘えを出しているのだろうが、そんなことで男はたじろいだりしない。元より、今まで敵対に近い関係でいたのに急に真裏を見せてくる方がおかしい。

「酔つてゐみたいですね。もう休んだ方がいい」

腹の辺りにある女性の両腕を解き、ゆっくりと降ろす。

「僕は片柳彩子さんとの写真をあなたに撮られ、それと引き換えに違法性のある会社

のネタを提供した。互いの持つ情報を交換し、あなたは成功を得て、僕も自らを保つた。

それで終わりです。これからは、また久留米雀の連載を通しての付僕も自らを保つた。

き合いに戻るだけなんです」

「戻らせないわよ、そんなの」

「あなたが何を言おうとそななるんです。交換条件は成立したんだ」

そう諭し、男は余裕を保ちながら帰ろうとする。それに、女性の不可解な言葉が突きつけられる。

「それはあなたと片柳彩子さんとの[写真]でしょ」

男は言葉の奥に疑いを抱き、振り返る。女性は酔いを少し浮かべたままの状態で笑みを零す。

「どうこうことだ」

「ああ、どうこうことでしょう」

「とぼけるな。言いたいことがあるなら言え」

男の目は鋭くなつていいく。状況が変化しそうな予感がこれでもかと襲つてくる。女性

は先程ネガを取りに行つた部屋へと入り、今度は数枚の[写真]を手にして出てきた。はい、

とそれを男の方へ向けて差し出す。一目した瞬間に自らに覆い掛かる危機を判別することができた。

「どうして、これが・・・・・」

男は崩れ落ちそうになるのをやつとの思いで堪える。女性が差し出してきたのは、男の住むマンションへと入つていく久留米雀との[写真]だつた。無論、その後に二人の行為は行われている。

そんなこと有るはずがない。そう男は現実を否定する。男に受け入れられる許容範囲

をその写真は超えてしまっていたから。

「ダメじゃないの。あんなかわいい子がいるのに、こんな熟女にまで手を出しちゃう

なんて「

ねえ、と女性は余裕たっぷりに言葉を投げる。形勢がどう傾いてるか、など一目瞭然

だった。

「それも、自分がマネージメントしてるタレントさんになんてねえ。大田くんも中々やり手だこと」

ククッと笑う女性の表情がいやに鼻についた。だが、それ以上に頭に蠢く疑問が多くなる。

片柳彩子との写真が撮られてから二週間、久留米雀との行為の前後には最善の注意を払ってきたつもりだ。余程の腕を持つ探偵のレベルでもない限り、隙を取られるような事はない。一体、どうやって。

「いつ、これを

正常を保とうとしているが、おそらく無理だらう。眼光も表情も氣も震えてしまつているに違いない。

「じゃなら、あなたと片柳彩子さんの写真を撮る前日のものよ」まさか、と思った。まさか、片柳彩子との写真よりも前に撮られていたなんて思いもしなかつたから。男に不穏な気配を感じ、追つていった結果に女子との現場が押さえられたものだと決め込んだ時にはもうこの写真は存在していたのだ。あの時にはすでに尻尾を踏まれていたんだ。

それならば、どうして最初からこの写真を使ってこなかつたんだ。

何故、後から出で

きた女の子との写真を先に載せようとしたんだ。

「どうして、それを今まで隠してたんだ」

「そうね。それはそうよね。こんな絶好の写真を撮つといて使わないなんておかしい

もんねえ」

男は絶壁に命綱も無しにしがみついてる感覚でいた。あと一つの衝撃でも加われば、底にまで落とされる状態。

「簡単に言うと、慎重にいきたかったの。前にあなたに言つたことがあるけど、あなた

の前にいた運転手と久留米さんの関係を怪しんでたのよ。証拠を掴んでやろうと思つて

たけど、その前に運転手が辞めちゃつて。その後にあなたが入ってきた時、なんとなく

似てるタイプだったからもしかしてと思つたわ。しかも、運転手からマネージャーにまで出世しちゃつて。疑つてる人間からしたら、怪しいつたらないわ。そこで真剣に探つてみたら見事にこんな写真が撮れたってわけ」

強い言葉を繰り返し、女性は一つ一つと男の上手に立つていぐ。

「これを撮つた時は嬉しかったわ。これだけのスクープは初めてだからね。だから、

もつと奥まで調べてみたくなったの。そもそも、あなたはどういう人間なのかってね。

仕事場だと一人は全くその関係性を出さなかつたから、プライベートを探るしかない。

そう思つて、あなたを着けてみたりきなり片柳彩子さんとの写真が撮れちゃつたの。

一日続けて私にスクープが舞い込んだけど、片柳さんの方についてはあなたに写真の存在がバレているから早くに処理する必要があった。だから、あっちを先に載せようとしたのよ」

それも結果よかつたのかもしれない、と女性は言い零す。

「片柳さんの写真と引き換えに、あなたは大きなネタを差し出してきた。どこで手に入ってきたのかは分からぬけど、私も記者としてあなたの提供するネタには興味あつたから乗ることにした。一つスクープが消えることになるのは悔しいけれど、もう一つ

私には武器があるんだからいいと納得したわ。第一、あなたは良い武器を持つてたのに

使つてしまつたから、おそらくあれ以上のものはもつ無いはず。余計な邪魔が入らず、

今回はスクープを載せることが専念できるわ

男は完全に女性にやられてしまつた。一つ田の爆弾があるとも思わず、目先の爆弾の

解除に回路を奪われていた。しかも、厄介なことに一つ田の方が一つ田より遙かにタチ

が悪い。

「それとも、まだ提供できるネタがあるのかしら」

そう言いながら、女性は男に寄り添つてくる。男にはそれを跳ね返すだけの術はなかった。

「久留米さんがアリなら、当然私もアリよね」

女性は男に唇をつける。そのまま、女性に導かれるままに寝室へと向かい、ベッドで行為におよんだ。

「一度、これだけ良い男を抱いてみたかったのよ」

男は抵抗を諦めた。形勢は女性に傾いている。返しょつのない事

実を突きつけられ、

為すべき反抗は見当たらぬ。せめて、この場で出来ることひとつ

たら、女性の気性を

少しでも和らげるよう努めるだけ。そんな些細といえる思いだけ

で、男は女性と体で

繋がつた。

柴村忍から逆転の一手を出され、男は心の芯が抜けたようになつた。あの写真の掲載を防ぐのは無理に近い、と判断したから。諦めたくはないが、再逆転をするだけの対象もない。

「もし、またネタがあるような五日以内に言つてきてね」

朝、女性の部屋を後にする時に言われた言葉だ。五日は来週号の発売に間に合わせるまでの時間だらう。だが、男にはそれだけのネタは持ち合はせていない。女性もそうであることを見越して言つてゐる。

光村沙耶なら多少のネタは握つてるだらうが、あの写真に勝るだけのものは持つてないだらう。女の口からも、それだけの話は聞いたことがない。久留米雀に話すべきなのか。それでも、女に記事を揉み消すだけの力はないだらう。

女性の覚悟は決まつっていた。あの写真を載せる」とこゝ、女の連載はなくなり、女と

女性との関係も消え去る。それは決心の上、記者生命にかけて仕事をやり切るつもりでいる。

どうすればいいのか。何か方法はないのだろうか。男はただそればかりを頭に巡らせ

ていく。仕事や会話も表面上を繕うだけの形式的なことしか出来なかつた。誰の助けを

借りはせず、三日三晩無いであろう一手を考える。考えついし、無いことに行き着く。

その繰り返し、どん底から這い上がる所としてはまた叩き付けられる。段々と心が病み

だしていくのが分かつた。結果、男が出した答えはいつかの時に置いてきたはずの凶氣

だった。

無論、そんなことをして生まれるリスクもある。何度も振り払おうとしては生まれてくる、その連續。もうそれしかない、男は腹を括る覚悟をした。あんな記事のために、これまでの計画を棒に振るわけにはいかない。あんな女性のために、俺が灰になるわけにはいかない。

男は携帯を取り、半年ぶりにその番号に連絡を入れる。こんなに短いインターバルで電話をするのは久しぶりだらう。

「もしもし」「もしもし。どうした」

野木晃彦の軽めの口調は重くなつた男の心を幾分か持ち上げてくれた。青春期の声変

わりによつて低くなつていいく声音の変化は男性にはさほど表れなかつた。それが良いのか悪いのかはどうでもいい。

「半年ぶりか」

「ああ、そんなになるかな。何があったのか」

何かはあったが、それが何かは言いはしない。男性は男の過去を知っているが、未来まで教える気はない。

「実は、また帰ろうと思つてるんだ」

「なんだ、帰つてくるのか。いやに早いな」

「ああ。それで、一番最近の休日がいつか聞きたい」

「休日か。仕事の日でも全然時間なら開けられるけど」

半年前の時のように、男は二年から三年に一度のペースで故郷に帰つている。それに

比べると、今回のタイミングに男性が違和感を覚えるのは普通といえる。適当に流してしまえばいいだけだが。

「いや、できれば一日空けてもらえたとありがたい」

「そうか。なら、明後日が休日になつてるけど」

「空けられるか」

「まあ、別に家族どど」「行くつて話もないから大丈夫だと思つ」

分かつた、と男は口元を締める。それからは当日のスケジュールの話を詰めていき、

五分ほどで電話を切つた。

一つ目の計画の段に昇り、気持ちばかりの充足感を得られた。久方ぶりといえる満足

だったので心はずいぶんと落ち着けられていく。緩んだ思いのまま、

男は片柳彩子へと電話を掛けた。

翌日は久留米雀の仕事がなく、男も休日となつていた。朝、目が覚めると並々ならぬ

圧迫感に苛まれる。今日為すべき行為を考えると、睡眠もぶつ切りのような一時ずつのものにしかならなかつた。

その前に、男は片柳彩子と約束をしていた。会いたいと言つて、

女の子は仕事が早め

に終わるからと十五時に待ち合わせをする」とになった。この心が

深く侵されてしまつ

前に、普通に会つておきたくて。

待ち合わせ場所の渋谷に女の子は数分遅れで来た。ごめんなさい

と謝られ、仕事なん

だから仕方ないよと宥めた。仕事終わりで多く提げていた荷物をトランクに入れ、車を

走らせていく。

「なんか、こんな明るい時から会つの久しぶりですね」

「ああ、そうだね」

男が転職してから約半年、二人は夜にしか会つていない。男には久留米雀に蝕まれた

精神を癒やすため、女の子には週に一度ほど待ち望んだ時間として、昼間に会つたの

は、男がタクシードライバーをしていた頃の乗客と運転手としての関係以来になる。今

日はいつもより長く一緒にいられる。やつぱりと、自然に女の子は顔が綻んでいくのが

分かつた。

その後は、映画を観て、アミューズメントパークでゲームをして、夕食を食べて、車でドライブをした。映画は女の子が観たがっていたファンタジーものを選んだ。ヒット

シリーズ作だったので気兼ねなく楽しめるものだったが、男は心情的にそうもいかなかつた。アミューズメントパークではボウリングとバッティングセンターとメダルゲーム

をした。ボウリングでは前回と同じ三十分ほど差をつけて女

の子が勝ち、バツテ

イングセンターでは逆に空振りばかりの女の子を余所目にし、男は邪心を振り払うよう

に打ちまくる。夕食はパスタショットに行き、女の子は茄子とベーコンのトマトソース、

男は豚肉とキノコの醤油ソースを頼んだ。話が弾んだので、デザートでパンナコッタも

食べた。

夕食終わりに車に戻るつと歩いていると、女の子がふと足を止める。ここ入っていいですかと言われ、ジュエリーショップに寄った。店内は光沢に満ちていて、輝いている。

これから自分の嵌る世界とは真逆の空間で、異世界に足を踏み入れた雰囲気にさえ駆られた。その中で、女の子は田舎を輝かせながらケースの中にあるジュエリーを見ていく。

男は特に惹かれはせず、ただ女の子の後ろを着いていった。

「運転手さん、お願ひしていいですか」

店内を一周し終わると、女の子が両手を合わせて希求してくる。ここでどんなお願ひをされるかは予想しえたが。

「何かな」

「安いやつでいいんで、お揃いの買ってくわませんか」

「お揃い

「はい」

お揃いまでは予想していなかつた。同じ物を身につけていたい、という願望なのだろうが。

「あんまりアクセサリーの類はしたことがないなあ

「ダメですか」

女の子は曇んだ瞳を見せる。それに眩んだわけじゃないが、眩んだフリすることにした。

「分かつたよ。そこまで頼まれたら応えるしかないね」

「ホントですか」

女の子は表情が一気に晴れた。小さくガツツポーズをし、喜びに明ける。

ペアリングは女の子が選んだ三万円のシルバーのものを貰った。車に戻つてからも、梱包された提げ物を男は後部座席に置いたが、女の子は両手に抱えていた。

「大事にします、絶対」

「そう言つてくれるとプレゼントした甲斐があるよ」

女の子はふやけるように笑つた。言葉だけの感情でないのはよく伝わってくる。実際、

前にプレゼントしたヒヨコのぬいぐるみも大切にしているようだ。女の子のブログにも数回出てきているのも見てている。

車を走らせ、ドライブをしながら向かつたのは海景色の見える場所だった。男は決意

に搖らぎそうになると、こいつたところを訪れる。夜景を眺めていると、心を奮わされる。闇に浮かぶ光に口を重ね、葛藤の促進と沈静を同時にう。左隣で女の子が綺麗ですねと漫つていて、男にはもっと別の感情が増していく。女の子の知らない裏の感情が。

「運転手さん、これをはめてもらつていいですか」

そう女の子は先程購入した指輪の提げ物を見せてくる。

「ああ、いいよ」

梶包を解き、中にある指輪を取り出すとむづくつ女子の薬指に通した。初めて薬指にはまつた指輪を眺め、女子は感慨深そうに微笑む。同じよひこと、女子は男の薬指にも指輪を通した。男も女子に似た反応を繕う。男には既に表面と裏側の思いが共存しだしている。

「綺麗ですね」

女子は自らの左手の薬指と男の左手の薬指を合わせ、互いの指輪を触れさせる。その光沢を通し、先にある夜景を映す。とてもロマンチックな感情に浸れ、それは全く恥ずかしいとは思わなかった。

横にある男の顔を覗く。男の顔もこぢりへと向く。女子の感情は確かにいる。この想いに間違はない。そう決し、静かに目を閉じる。少しすると、唇に柔らかい感触が被さってきた。薬指を絡めたまま、幸福に身を委ねていく。この時間がいつまでも続いてくれれば、と思いながら。

帰りの車の中は無言の空間が続いた。車内に広がっている清福に浸っていたくて、意図的にそうしていた。自宅まで送り届けると、女子はおやすみなさいと満ち足りた表情で車を後にしていく。男は女子の姿がなくなるのを見届け、胸に手をあてる。車中のありったけの正氣を吸い込む。この体が悪魔に汚染されてしまわぬように。男は複雑な心中を抱え、瞳を暴化させる。時は来た。

時間は二十三時になろうとしていた。車は柴村忍の自宅マンションの駐車場に停め、

誰の存在もることを確かめながら女性の部屋へと向かう。予めに連絡は入れておいたので、インター ホンを鳴らすと女性はすぐに反応した。部屋へ入つていく。意識は雑にならないよう、極力に保つ事を心掛けている。何か飲み物でもと聞かれたが、何もいらぬと断つた。

「さて、何か面白いネタでも見つかったのかな」

久留米雀とのスキンandal記事に代わるネタなどない。掲載を防げる方法も見つからなかつた。女性もそうであるひつと踏んだ上で話している。形成は完全に敗北に向けての一直線を辿つていた。

話したい事がある、と男は女性に電話を入れていた。女性は男がきつと土下座まがいの陳謝でもしてくるんぢやないかと予想していたが、男の決断はもつと別の道に行き着いていた。女性の思考では辿り着かない場所にある結論に。男には、女性が見ているものよりも更に奥の感情が存在していたのだ。

「いえ、あの記事の掲載をなんとか無しにしてもらいいかと思つて」

そう男は頭を下げる。最後の選択肢を女性に投げ掛けた。相手はそんな裏がある言葉だとは思いもしないだろうが。

「無理に決まつてるでしょ、そんなの。もつ原稿も仕上がりなんだし。あなたと久留米さんには悪いけれど、あとは明日になつたら上に見せるだけよ。

みんな驚くでしょ

うね。まさか、私が一週も連續でスクープを出してくるなんて思つてもいないでしょ

から

女性の頭にはもう未来図が完成されている。この後の男の無念さを押し出した表情、

感嘆の声を上げる同僚たち、邪な感情で雑誌を見開く市民たち、自分へと舞い込む賞賛。

どれもが快感を与えてくれるに違いない。自分にこれから人生一の頂点期が訪れようと

しているのだ。

「『めんなさいね』。いつも記者として、おいしいネタは載せなきゃいけないのよ」

「もう、こっちには何の手立てもないということか」

「まあね。でも、あなたが一生私のモノになってくれるなら考え方もいいかも」

挑発的に女性は投げる。そんなこと、男がするはずがないと分かりながら意図的に。

一生をこの女性のためにフイにするなど有り得ない。こんな低等な関係を続けられなど

しない。こんなプラスのない、マイナスだけの関係なんて耐えられない。精神が持ちこたえられない。

男は歯を軋ませ、悔しがる。女性はそれを見て、思わず声を出して笑った。上位にいる人間が下位にいる人間に対して浮かべる笑い、それが男の理性の幅を振り切る扉を開錠させた。

瞬間に男は目を据わらせ、女性を睨みつける。女性はすぐにその異変に気づいたが、

時は遅い。男は女性へ歩み寄り、何度も思いきり蹴りつけた。ケースから革手袋を取り

出して着けると、女性の髪をグッと掴んで床へ叩きつける。息が荒くなってきた女性は

この場から逃げようとするが、すでに男の影は女性の体に被さっていた。恐る恐る後ろ

に顔を向けると、男はダイニングの椅子を上に振りかぶっている。

「やめて……」

微かに搾り出した声は男の耳に入ることなく消えてしまつ。男は椅子を女性の背中に

叩きつけ、部屋に木材の衝撃と人間の悲鳴が響く。椅子は雑に床に倒れ、女性はあまり

の苦痛に声にならない声をあげて転がる。男はケースからロープを取り出し、女性の視

界に入れる。女性は声を止め、涙を流し、言葉の代わりに首を横に振り続けた。どうか

止めてください、という命乞いとして。ただ、その思いは男の鬼気の制止に繋がることはない。

「原因を作ったのはお前だ。責任を取るのもお前だ」

最後の抵抗で女性はなりふり構わず暴れ狂う。だが、立てないほどの痛みを負つてしまっている女性の底力では大したものにはなれない。男は女性の顔や腹を殴りつけて戦

意を喪失させ、ロープを首に巻く。

「記者なんて人の恨みを買ってナンボだろ。恨むんなら、自分を恨むんだな」

ロープを引き、思いきり力を込める。女性も必死に抗うが、もはや無力でしかない。

反発する力が衰えていき、下にかかる重力が増していく。なおも、

男は女性の息の根が

止まるまで腕の力を込め続けた。

抵抗する全ての感触が無くなると、男はロープを緩める。女性の体は崩れ落ち、男はその場に尻餅をつく。息を切らしながら、女性に近づく。心臓と脈の動きを確かめる。

どちらも動いていなかつた。自分はまた殺人を犯した。そう現実が全身へと行き渡り、様々な感情にやられてしまいそうになる。

でも、男にはそればかりに浸つていてる時間はなかつた。すぐに立ち上がり、各部屋の

捜査を始める。久留米雀との写真とネガを探し、男は家中を荒らしまくつた。対象の物

は最初に目をつけていた、玄関側の部屋で見つかつた。それらをケースに仕舞い、部屋を後にする。誰にも見つからないように慎重に行動し、駐車場の車で外の世界へと脱出した。

家に帰るまでは夢中だつた。興奮状態が続いていたので、何も考えないよにと心掛けた。

自宅マンションへ到着し、ベッドに倒れ込むとよつやく成功を噛みしめる余裕に行き着いた。口角からとめどなく溢れ出していく不適な笑みはいつまでも絶えることはなかつた。

その9（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいーいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

翌日、男は新幹線にいた。今日の仕事は休暇を取り、朝早くから家を出た。移りゆく

景色の中で、男は多様な感情を募らせていく。その中心にあるのは、当然に昨日の己の

凶氣だつた。あの時、一体どんな顔を自分はしていただろう。同時に、柴村忍の悲惨な

表情も頭から離れようとしている。あの時、女性にはどう自分が映つていただろう。正解

は見つかりやしない。女性はもつ口を開く事はないのだから。かといって、この記憶が

脳内から忘れ去られることもないのだろう。この先も携えていかなければならぬ記憶、

それが俺に与えられた罰だ。

正午過ぎ、男は徳島に到着した。約半年ぶりの故郷だったが、目新しい変化は見られ

ない。長閑な雰囲気は人間の氣にも表れている。この空気が自分には合っている。正直、

昨日の罪事で腐りかけていた心を和らげるにはもつてこいの環境といえた。

駅の改札を抜けると、外にはすでに野木晃彦の姿があつた。三十分前に連絡を入れておいたので、前もつて来ていたようだ。

「久しぶり」

「ああ、久しぶり」

毎度の調子の低い挨拶を交わす。たまに会う程度の旧知の間柄、

その瞬間に当時の関

係へ戻ることが出来る。大抵は子供の頃の活発な状態になるのだろうが、男と男性の関係は違つた。大人しく落ち着いた状態、それが子供時代からのものと思えば乾いた間柄といえる。

「ずいぶんな荷物だな」

男が引いてきたのは青のスーツケースだった。田帰りの荷物としては確かに気には掛かる。

「いや、お土産を大量に頼まれてるんだ。無理言つて休みにしてもらつたから、断りきれなかつた」

「ふうん、そうか」

それ以上の話にはならず、道に停めてあつた男性の車に移動し、トランクにスーツケースを入れる。これまでの帰省時と同様に男は後部座席に乗り、男性の運転で車は動いていく。車内では軽い会話はいくつか交わすが、どれも内容に乏しく長くは続かない。

半年前に妊娠したと聞いていた男性の奥さんはもう間もなく出産になるようだが、そんなことは男には関係ない。男としては昨夜の記憶がまだ鮮明に残っているので、それぐらいの程度の話の方が気が掛からなくてよかつたが。飯屋にでも寄るかと聞かれたが、九時過ぎに朝食を摂つたからいいと言い、車はどこにも立ち寄らずに目的地へと進んでいった。

目的地は吉野川流域のキャンプ地だった。帰省時には必ず自らの

軌跡の巡りとして寄

る場所だが、今日は滞在として訪れた。暑さこそあつたが、風も爽快に吹いていたので心地悪さはない。

「じゃあ、五時前には戻つてくるから」

「ああ、分かった」

到着してからは自由行動になつた。男の帰り時間までの四時間前後をそれぞれに過ごしていく。男性は川で釣り、男は付近の自然の中で散歩と休息をすることに決めていた。

だが、男の提示は建て前だつた。男性にはそう言つて消えれば、四時間は誰の気も止まらないで済む。

男は釣りの地点に向かつた男性の後を追い、取りたい荷物があるからと車の鍵を借り、

車に戻るとスーツケースごと取り出し、鍵を閉める。すでに釣りの地点に着いていた男性に鍵を返すと、男は大荷物を手に歩き出した。人目には絶対に触れないよう極力の注意をし、人気すらない高地の森へと入つていく。道中、何度も右に視線を向け、何度も後ろを振り返る。誰の視界も届いてはいなことを確認し、暗がりの奥へと歩みを進めていく。

懐かしい感覚があつた。景色、香り、匂い、音、風、土、どれもこれもが意識を幼い頃へと戻してくれる。小さい頃にはよくこの森に来ていた。他人と群れることはせず、自意識の中へ治まり、周囲とは違つことをするのに自らを見い出していた孤独な少年。

少年はいつも自然の集まるこの場所へ来ては、独りきりでいる時間と空間を特別なものとしていた。ここに来れば、日々の喧騒や戯言も消化されることが出来る。ここは少年における聖域だった。

少年は大人になり、同じ場所を歩いている。体は大きくなり、心は荒んではしまつたが、

あの頃の感覚を忘れてはいない。あの頃の自分が一番純粹に自分らしくいたはずだから。

金だの復讐だの野望だのは一切なく、ただ自己の世界にいることだけに幸せを感じられて

いたのだから。出来ることなら、あの頃に戻りたい。のまま、あの心を抱えたままで

大人になりたい。ずっとずっと、独りきりでいたい。そう心を潤わせながら、男は歩いていく。

ふと我に返ると、それなりの距離を進んできていた。少なくとも、スーツケースを手

に引いてくるような場所ではない。誰の視界にも入らないし、誰が來ることもまずない。

周りには木々が無造作に生え並び、その間を冷感のある風が吹き通り、草花が日の陰で

小さくも力強く育っている。それが快い。ここでいいだろう。そう定め、男は息を一つついた。

スーツケースを開き、中に入れておいた伸縮の自由がきく作業用タイプのシャベルを

取り出す。それを目の前の地面へ突き刺し、土を掘り起こす。その繰り返し、シャベル

を地面に突き刺し、土を掘り起こすだけの作業を続けた。五分、十

分、三十分、一時間、

二時間、三時間、男はただそれだけの作業を一心不乱に続ける。息が切れているのも、

腕の力が減つていくのも、空腹である」とさえも忘れていた。ただただ、穴を深く掘つていく。

三時間が過ぎ、男は腕を止める。成果を改めて見直してみる。これだけの深さがあればいいだろう。男はスーツケースから黒のポリエチレン袋を出し、力いっぱいに穴の奥へと投げ入れる。重さのある黒袋は鈍い音を出して穴に落ちた。これでおさらばだ、と心の中から穴の奥へ言葉を送る。またシャベルを掻むと、掘り起こしてきた土を穴の中へと埋めていった。

「どうだ、成果の方は」「おお、戻ってきたか」

有言の通りに十七時前に男はキャンプ地まで帰つてきた。男性は四時間を釣りにだけ費やしたようで、数匹の結果には繋がつたらしい。出した荷物だけ仕舞つてくるからと車の鍵を再び借り、男性が釣り道具をまとめて戻つてくる前にスーツケースをトランクに詰め込んだ。

帰りも男性の運転で、男は後部座席に乗つた。相変わらずに会話はありきたりで乾いていたが、男にはそれでよかつた。飯屋に寄るかと聞かれたが、電車の時間が迫つてたのでいいと断る。

駅に着くと、往路よりも格段に軽くなつたスーツケースの扱いが

楽になつた。往路は

重い荷物なのに軽いとする演技をする必要があつたため、普通の対応でよいのでやつや

すい。

「そういうえば、今日はどうしたんだ」

今頃聞くのもなんだけど、と後付けが入る。

「どうした、って何が

「いや、急に帰つてくるとか言い出したからさ。東京で仕事でなんかあつたんかなあ

とか思つて

仕事でミスをして傷心、とでも思つたのだろうか。あいにく、そんな低度のところに

などいない。

「まあ、そんなところかな。でも、今日のリフレッシュショウできたよ。ありがとう」

「そうか、そんならよかつた」

リフレッシュショウなんかしてるとわけがない。一生ものの傷が増えただ。そう簡単に癒え

るはずがない。

「じや

「ああ、そんじやあな」

また連絡でもする、とも言つことなく一人は別れた。この関係にはそんな一般的な形式は当たらぬ。連絡など、滅多なことでもなければしゃしない。それでも成立してしまう関係なのだ。

帰りの新幹線で、男はようやく食事に有り付く。昨夜から続いた体内の乱雑を一応に

落ち着けることができたが、その末に辿り着いたのはこれまでよつもさらに深い闇の中

だった。

翌日は朝から仕事だった。久留米雀が出演する一時間ドラマの撮影に同行し、昨日の休暇の謝罪を取り巻きのスタッフへしていく。昨日の動向については、友人の結婚式に出席していた事にしてある。あとは、適当に相手^じとに細かい嘘をついておけばいいだけだ。

この日は一日中、女の撮影現場にいた。ドラマの内容は、憎悪の果てに犯された殺人事件に対する真相究明といつも一時間ドラマにはよくある話だ。自分が視聴者の立場なら、間違いなくチャンネルは他に回すだろう。

撮影の様子を見届けながら、男は自らをそこへ当て嵌めた。憎悪の果ての殺人、そこに己を重ねるのは容易だった。自分を失わないために犯した罪、そこにはどれほどの意味があるんだろうか。分からぬ。ただ、短絡的な考えじゃないのは確かだった。自分自身を無意味にさせないこと、それは人間として必要不可欠なものだ。それを否定するのなら、もはや死ぬしかない。でも、俺は違う。だから、やつた。俺は俺自身を見捨てたりはできない。

昼休憩が入り、午後の撮影に入る直前に携帯に電話が入る。妥当に適する対応をし、電話を切る。

「誰からかしら」

漏れていた言葉を聞き拾っていた女に訊かれる。確認はしておく

べき会話の内容だつたから。

「女性生活の方からです」

「柴村さんじやなくて」

「はい、違う方でした」

それはそうだろう。柴村忍から連絡が入ることは金輪際ない。

「どうこう話だったの」

「いえ、実は・・・・」

男は言葉をあぐねる。当然、演技として。

「どうかしたの」

「柴村さんの行方が分からなくなつた、つて」

男は息をついてから言葉を出した。何も知らないはずの人間からすれば、これから仕事に向かう女性に言つのはためらうものだらうから。それでも、黙つておくべきレベル

の内容ではない。

「どうこう」と

「昨日、仕事を無断欠勤したらしくて。連絡をしても繋がらなかつたけど、その日は

そこまで大事になるとは思つてなかつたからそのままにしたのです。でも、今日も連絡が取れなくて、会社の人気が自宅に行つてみたら誰もいなかつたみたいで。実家や仕事

関係をあたつてみても、一向に足取りがつかめないそうです」

女は驚きを見せていたが、そつとポツリと零しただけで表情を曇らせる。結局、何も

ないままで撮影現場へと戻つていった。心配をしてるのだらうが、

そんな必要はない

言つてやりたい。あいつはあなたを裏切つた、その制裁を受けただけだ、と言つてやり

たい。

翌日、柴村忍の両親から警察へ捜索願が提出された。失踪の前日までは通常に仕事をこなしていた、信頼もあつて眞面目な性格、友人関係や恋人関係でのトラブルは今まで一度もない、などの生活状況が考慮されたため、特異家出入として捜索活動が行われることに決まった。

とはいって、手掛かりとなる情報は非常に少ない。事件や事故へと繋がる可能性が低い

人間だからこそ、そこの線を見つけるのは困難となる。ただ、唯一に線へと導かれそう

だと思えるのは女性の職業だ。週刊誌の記者となれば、怨恨を向けられることはあるのではないだろうか。そこを主線とし、過去に女性が担当した記事のネタを次々に洗い出していく。しかし、十数年の記者生活の記事の総数から割り出す作業はまた困難にしかならない。それでも、捜索側はそこに焦点を絞り、女性を捜していった。それが意味のない作業と知らずに。

久留米雀との写真は廃棄され、世に出回る事はない。片柳彩子との写真も廃棄され、

誰の目に止まる事もない。どちらも女性が記事を他人に触れさせる前に対処したため、

男と女性以外の人間がそれを知ることはない。つまり、警察が男へと行き着く術は限りなく無いに等しいといえる。安心とまで氣を緩めはしないが、ひとまず氣を難しくさせ

ておく段階は越えただろう。

これで事件は闇に葬られる、そう煙に巻いた思いでいる男の予測の外で危険信号が点滅していた。いつでも可動が可能な状態で待ち構えている者がその動きを始めようとしている。亀谷右京、男もその存在には気づいている。だが、自分に辿り着くことはないだろうと踏んでいた。むしろ、ここまで来れるものなら来てみるという挑発的な思いもあつた。

那一週間後、亀谷右京に衝撃が走った。男の足跡を追い続けてきた彼がその異変を察知したのだ。久留米雀との不謹慎な関係に疑問を抱いてから、彼は女についての調査を開始した。個人的な意向のため、通常の仕事とは重ならないようにならぬ、その分だけ時間も掛かつたがある程度の面については把握する事ができた。当然に女優として作品を通しての女は知っていたが、それ以外の個人としての詳細部分の情報を。

そうしていふうちに、一人の女性の名前が目に映り込んできた。
柴村忍、特異家出入として搜索が始められた女性だ。名前を目にしたのはたまたまだつたが、見覚えのある字だと気には掛かった。そして、女の調査をしている時に再びその名前を目にすることになる。柴村忍、女が連載を持っている週刊誌の担当者だ。その女性がなぜ搜索される

ことになつたんだ。彼はすぐに女性の捜索の担当の人間に経緯を聞きに行く。不審とも

捉えられる失踪、意図的な何かが動いている可能性がそこにはあつた。彼の頭には大田

恵一の顔が浮かんでいく。

男は女の運転手として勤務していたが、いつからか女のマネージャーとなつていた。

どうしてそつなつたかは分からぬが、おかしいと思わざるを得ない。これまで運転手

だけをしてきた人間を急にマネージャーになどするのだろうか。会社に例えるならば、

昨日まで社長の運転手をしていた人間が今日から秘書をするようなものだ。疑いを抱く

のはなんら変わつたことじやない。自分の側に置いておきたい、という女の思いなのだ

ろうか。だとしたら、あの一人は完全に異質な関係にある。女の支配欲も相当なものと

いえるが、男の欲もそれに劣らぬものといえるだろつ。

男と柴村忍には繫がりがある。女と女性が仕事をする場に、マネージャーとして同席

はしているだろう。女と女性は仲が良く、仕事以外でも交流があつたらしい。そこにも

男の姿があつたりしたのだろうか。女を介し、女性と交流があつたりしたのだろうか。

その先に、何かトラブルがあつたのではないだろうか。やつうまく話がいくはずはない

と思うが、あの男の事とすると可能性は無いとは言いきれない。あの時の男の瞳を思い起こすと。

その日の夜中、男は久留米雀の体を抱いていた。もう、何度この

細く弱々しい老体を

包んできただろう。もはや、感情は大きく崩れ去り、慣れすら生ま

れてしまっている。

こんなことに慣れが生じるのは危機感が募らなければならぬことなのだろうが、この

先も続けていくにはそれなりに心を枯れさせてしまつ必要もある。正常でなど、いら
れるはずはない。

「柴村さん、どうなつてしまつたのかしら」

行為の後、女が独り言のように呟く。女は女性の事を気に掛けていた。女性の失踪か

ら一週間以上が過ぎるが、一向に発見される気配はない。仲が良かつた女からすれば、気掛かりなのは当然だらう。だが、事実を知つてゐる男には裏切られてゐる女の惨めさも濃く映つてくる。

「無事を信じたいですけど。ただ、これだけ時間が経つても音沙汰がないと、何かの揉め事に巻き込まれた事も考えられるかもしません。仕事柄、恨みは買いやすいですし

ようし」

男の言葉に、女は無言で息をつく。女も心配は続けてゐるが、さすがに事件や事故が絡んできている可能性も示唆されてくる。最悪の事態も何回かは考えてしまい、頭を悩ませた。

翌朝、仕事が休日なので女を自宅まで送り届け、男はそのまま車で渋谷に向かった。

夜中まで賑わいを見せている中心街も、朝となると静けさに覆われ

ている。人もまばら

にしかおらず、店も閉まつており、ここが日本の中心地区である事を忘れそうになる。

逆に、これだけ熱のある街が冷えている状態の中にいるといつのも気持ちはいい。贅沢な気分にすらなる。

そんな安息にいられるのはこの時だけだった。光村沙耶のマンションに到着し、中へ入ろうとすると横から何者かが割つて入つてくる。その姿を目にすると、男は急速に身構えた。

「よお」

亀谷右京は精悍な面持ちで男へ近づく。男は事態の重さを考える。

彼がこんな男の女

先へ姿を見せることはなかつた。遠目からは見ているのだろうが、男にも分かる程度に姿を見せるのは自宅付近が常だつたから。何だ。何があつたんだ。そう男の胸を不定にわだかまりが動いていく。

男は何も言葉は返さない。彼の言葉があろつとも、大抵は素通りをしていく。男は彼を昔から知っているが、もう関わりたくないと決めている。刑事の責任か分からないけれど、ここまで長く執拗に追いかけられるのは良い気などしない。もう一十年になる

のに、一人の事件関係者に何故そんなにもこだわるのだろうか。男は自分の本質を彼に嗅ぎつけられてるような気がしていた。それでも、ここに届くことなど出来やしないだろうが。

「いつもの通りに男は彼の横を過ぎていこうとする。だが、彼の顔がこちらに向き、左

横に来た時に言葉を投げられた。

「柴村忍はどこに行つた」

威勢のいい張りのある声が耳元に響く。その言葉に、思わず男も彼に顔を向けた。何

かを見据えた、相手の奥底を見るような目でこちらを見ている。長年刑事をやつてきた

人間の、何一つの証拠も見落とさない観察力や洞察力が読み取れた。でも、それぐらいで怯むわけにはいかない。

「どういう意味ですか」

男も目を細める。睨むとはならぬように意識して。彼の言葉を怪しむ、という程度のものとして。

「週刊誌の女性生活の記者、柴村忍の行方不明は知ってるな」「はい」

それがどうした、と言い加えたくなるのを抑える。

「お前、どこに行つたのかは知らないか」

知つてゐるんだろ、と含めたような語調だつた。

「知つてゐるわけないでしょ。何を言つてるんですか」

心外だ、という空氣を醸し出す。この時点で、もう彼が男に疑いを掛けてるのは汲み取れた。

「何か知つてゐるのなら言つておいた方がいいぞ」

「いや、俺も早く無事に見つからないかと心配してゐんです」

お互いの視線がぶつかり合つ。鋭い彼の視線と無心な男の視線。

彼の方から視線は

外れ、舌打ちをして去つていく。

男も高級マンションへ入り、女の部屋でベッドに倒れ込む。亀谷

が自分と女性の関係

に疑惑を持っている。大田恵一を追つてきた彼からすれば、そこへ行き着くのは難しくないのかもしない。ただ、そこから解明までの様々に絡む糸を解くのは不可能に違いない。

そう経たないうちに、女は仕事から帰ってきた。甘えてくる女の服を脱がし、望むがままに行行為に及んでいく。いろいろな体位で喘ぐ女が視界にいながら、男は何度か亀谷の存在が頭に浮かんだ。行為が終わり、裸で抱きついてくる女をなつかせながら心は別にあつた。

睡眠を取り、夜からは片柳彩子と会った。男が女性を殺める前に会つて以来、女の子の接し方は多少変わった。表面的にも心的にも距離を縮め、恋人としての関係を紡いできている。男がプレゼントした指輪は仕事の時は体裁を考えて外しているが、デートの時には嵌めてくる。そして、女の子はよく幸せだなあと言ひ零すようになり、その言葉に男は心をくすぐられた。

亀谷右京は柴村忍の失踪時近辺の男の動向を調べた。女性が最後に目撃されているのは仕事を終え、帰宅する時の姿。別に、その後に誰かに会つ約束をしているという話は聞かれていらない。当日の様子も特にといった変化は見られていない。今この状況を予測していたわけではないのだろう。おそらく、女性は意図していな

い状況へと追い込まれたのだ。

男はその日は休日だった。つまり、一日どうとでも動けたといえる。休日の男の通常

の動向は、久留米雀と自宅で一夜を過ごし、渋谷にある高級マンションの一室で朝から

夕暮れまでを過ごし、夜は片柳彩子と外で食事をする。男は休日には、数ヶ月前から大

概はこの流れで動いている。久留米雀とは異質な関係を築き、自らの疑惑と交換してい

るのだろう。渋谷のマンションに行くのは、光村沙耶という女に会うのが目的だろう。

二人でいるところは一度しか見たことがないが、それ以外の住人といたことはないので

間違はないはずだ。女はキャバクラで働いている。それも中々の有名店で人気もある

ようだ。男と知り合ったのは、タクシーかキャバクラのどちらかだらう。男の自発的な

趣味で行く店ではないので、前職の時に年長の同僚にでも連れていかれたと考えるのが

妥当だ。本命なのがどうかは分からぬが、あのキャバ嬢なら接する客も高等になると

すると利用に値する人間ではあるかもしだれない。片柳彩子はモデルとして、それなりの

地位を確立している。同世代の憧れの的、といつやつだ。最近は女優業にも進出している

らしい。男と知り合ったのは、タクシーの乗客としてだろう。少なくとも、久留米雀の

マネージャーとして係わる事はない。本命なのがどうかは分からぬが、会っても食事

だけとすることも多く、スマートな関係といえるし、モデルという職業が利用に値する

ものかは疑問ではある。

男と女性に当田の接点があつたとするなら、その後の夜の深い時間になる。どちらも誰かに会つていた形跡はない。だからといって一人が会つていたわけではないが、その可能性は否定されることにはなる。

そして、彼には追い風が吹いた。その翌日、男は仕事を休みにしてもらつてゐるのだ。

前職から、男が病気や旅行の類の他に自ら休暇を願い出た事はなかつた。友人の結婚式に出席していたという理由だつたが、俄かに信じがたい。男には結婚式に参列するほど

仲の良い人間などいない。いるとするなら・・・・野木晃彦、あいつぐらいだが、

既に結婚しているから対象から外れる。結果として、当田の男の動向には疑いを拭い去れるだけのものはないことになる。

男が女性に手を掛ける理由はあるだろう。久留米雀との関係を掴まれたか、片柳彩子

との関係を掴まれたか。光村沙耶にしても、仕事上で何か裏社会に通ずるものがあるのかもしれない。いずれにしろ、男は探られれば悪意を抱くだけの事をしております、悪意を

抱くだけの人物もある。男が女性に手を掛けたとするなら、男は休暇を取つた一日に何をしてたのだろうか。

女性が生きてるにしろ、そうでないにしろ、自宅に置いておく事はないだろう。俺が

嗅ぎつく事ぐらいは予想してゐるはずだ。自宅に踏み込めば一発でバレてしまつ。とするなら、女性をどこかへと移動する必要が出てくる。どこか、つてどこだ。隠し場所なら無数に存在する。大きく言えば、一田で日帰りができる場所の全てが対象になる。そんなことを考え出したら切りがない。男が隠し場所として選択するところ、男が犯罪の末として選択するところ……あそこか。

それから一週間が過ぎた。柴村忍の捜索について、警察から進展の一報は届かない。もう無事では帰つて来ないのかもしれない、親近者にもそう覚悟せざるを得ない状態となってきた。

男は久留米雀の現場にいた。一時間ドラマの撮影は佳境に入り、刑事が犯人を追い詰めるシーンとなつてゐる。推理から導いた事実を突きつけ、犯人はその場に崩れこむ。弱つた体を起こし、手錠をかけて連行されていく。

男自身、今回のドラマの内容には自らを投影する機会は多かつた。ならば、自分にもこういうシーンが巡つてくるのだろうか。迫りくる追つ手から逃げ切る術はないのだろうか。いや、そんなことはないはずだ。女性を殺める場も、沈める場も誰にも見られてはいないのだから。ここにまでなんて、辿り着きようがない。そうだ、もっと心を広く持つていればいい。

ただ、亀谷の不気味な存在感も拭いきれないのも現実だった。あ

の男は大田恵一とい
う人間に勘付いている数少ない一人だ。表向きに繕つたものじゃなく、裏側に潜めてる凶気に。

亀谷に初めて会つたのはもう一十年も前になる。あの時は今のようにではなく、子供に接する優しげな大人というふうに映つた。しかし、次第に彼は優しさを薄めていった。

そして、男の現状を逐一に確かめるようになると、どこに行こうと、その視線は男に着いてきた。

「じゃあ、明日は八時に迎えに来ます」

「ええ、お疲れ様」

仕事終わりに女を自宅まで送り届ける。女はもう女性の事について口にしなくなつた。危険を心配するのを止めたわけじゃないが、もしかすればの事態も考えるようになったのだろう。

その10（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

深夜、タクシードライバーの業務を終え、帰ろうとする野木晃彦の前に懐かしい顔が現れた。亀谷右京が東京へと勤務地を移したのが六年以上前になり、それ以来になる。

彼は大田恵一が上京する後を追つよつて徳島を離れ、それからは男からも話を聞いたことはない。

「どうしたんですか」

「よお、ちょっと時間作れるか

「はい、構いませんけど」

一人はファーストフード店へ移動した。ともにホットコーヒーを注文し、対面の席に

座る。彼が上京してからは年に一回ほど電話でやり取りをしていたが、改めて直接近況でも聞かれるのかと思った。しかし、それにしてもこんな深い時間に連絡もなしに待たれてるのも不思議だった。

「最近はどうしてる」「

「特に変わりはありませんけど。もうじき、一人目が産れます」
「そうか、と彼は目を配らせながら小さく言つ。子供が産まれる事は、彼にとつてそう

大したものじやないと思つたから付け足し程度に添えた。

「大田とは連絡は取つてるか」

通常通りの会話の進行。ただ、今回に限つては違つた。これが本

題への切り口。この

言葉への返信次第で進行は大きく変わる。

「はい、そんなに小まめじゃないんですけど。あつ、でも一週間前
ぐらいに急に掛かつ
てきましたね」

彼の目が開く。一週間前なら、彼の望んでいた女性の失踪のタイ
ミングにばっちりと
合づ。

「急に掛かつてきた、つてのはどうこうことだ」

「いつもは一年から三年に一度しか掛かつてこないんですよ。何
日かしたら帰つてく
るから時間取れないが、つてふうに。なのに、その時は前に来てか
ら半年しか経つてな
いのに掛かつてきて」

「何の話をした」

「いや、時間を取つて欲しいって言われて。いつもは勤務中にタ
クシーに乗せて懐か
しい場所を回るんですけど、その時は一日開けてくれつて言われた
んで休暇を取つて会
いました」

急な連絡、急な帰郷、男への怪しさは募つていぐ。これは掘れば
先に行き当たるかも
しれない、と刑事魂に火がつく。

「どうして、休暇を取るよつに大田は言つたんだ」

「分かりませんけど……まあ、ゆっくりしたかったんじ
やないですかね」

そんなところまではいちいち考えない。この年齢になれば、相手
の言葉はそれなりに
尊重する。

「その日の事、詳しく聞かせてくれないか」

前傾で聞きに来る彼に対し、男性は当然に異変を感じた。彼は一

週間前の男の動向を

なぜ知りたがっているんだ。

「あいつ、何かあつたんですか」

「分からん。それを調べるために聞いてる」

それは、ほぼ疑いに掛かつてゐよう」聞こえた。男に一体何の疑惑があるのか。それをしてからぬまま、話してしまつていいのだろうか。自分が素直に話す事は男にはまずい事になるのだろうか、と葛藤する。同時に、田の前の亀谷からの圧力に似たものも寄せてくる。

「大田くんとは駅で待ち合わせをしました。正午過ぎに着くと連絡が来たので、そのまま自分の車で迎えに行きました。そこから吉野川のキャンプ地まで移動して、あとは自由行動つてことになつて。僕は川で釣りをして、向こうは散歩に行くと言つて別れました。そんで、大田くんの帰り時間に合わせてまた駅まで送つた、つていうところだと思ひます」

彼はしばし考へ込む。男性の言葉の中にある違和感を探り出そうと頭内に反芻させていく。

「それは具体的に何田の事だ」

「多分、一週間前の木曜日だったはずです」

木曜日、柴村忍が最後に確認されたのが水曜日だから次の日だ。タイミングは合います

きている。

「大田はその日のうちに徳島まで来て、帰ったんだな」

「はい」

「お前に休暇を取るよつに言つてきたのはいつだ

「その前の前の日だつたから、火曜日です」

男は何か理由があり、女性に手を掛けた。しかも、それは事前に考えられていた用意

周到な計画。女性の身を奪い、そのまま故郷にまで連れ運ぶ。生まれ育った場所なら地

の利はあるし、東京からも距離が離れている。女性の失踪が水曜の夜からなので、この筋書きは見事に嵌る。あくまでも仮想にすぎないが、仮想に留めておけないものだと彼は思った。

「あいつ、何か大きめの荷物を持つてはいなかつたか」

「ああ、スーツケースを持ってましたね」

ハツとなる。スーツケース、大きさとしては可能だ。まさかだが、その中に女性の体があつたんじや。そうだとしたら、おそらく女性は助かつていないことになる。

「その、キャンプ場からあいつが散歩に行つたのはどこだ」

「さあ、そこは全然分かりません」

肝心なところにある穴に彼は息をつく。そこをえ分かるのなら、話は大きく進むはずなのに。

「おい、そこのキャンプ場を案内してくれないか

「えつ、今からじゃないですね」

辺りに視界が広がり、ようやくハツとなる。こんな深夜に行つたところで何も出来やしないじゃないか。男性の話がタイムリーすぎて、集中しすぎていた。

「明日、時間空いてるか

「明日は夜からだから、それまでなら

昼前からの約束を取り付け、一人は別れた。男性が去ると、彼は

掴んだ成果の大きさ

を噛みしめる。一週間かけて休暇を作った甲斐は充分にあった。野

木晃彦なら何か知つ

てるかもしれない、と踏んだのは正解だつた。大田恵一の本質を分かつている数少ない

人間の一人、そこを突くために徳島まで足を運ぶ事を決めてからは時間が長く感じれた。

男が逃げたりなどしないことは分かつてゐるが、早く真相を知りたくて気があくせくして

いたから。ただ、それだけ待つた分の返りがあつてよかつた。これで、あの男を崩せるかもしけない。

翌朝、十時に二人は駅で待ち合わせた。男性は自宅へと戻り、彼は漫画喫茶で睡眠をとつた。もうすぐ謎が解明されるかもしえないとと思うと、あれこれ考えを巡らせて眠りにつくのが遅れてしまった。

男性の車で移動する間、会話は特になかった。男性は喋り上手ではないし、彼は妙な緊迫感を携えていて、なにより一人の関係性が駄弁を振るい合うものでもない。それで空気が張り詰めることもない。

一週間前に男と行ったキャンプ場へ着くと、男性はその時に自分が釣りをしていた場所と男が散歩へ向かつていった方向を教える。彼はその道を進み出し、男性もその後ろを走していく。男が歩いていったであろう道は普通の道だった。車道はあるが相対する

車一台の通過はギリギリ、歩道も人一人ぐらいの幅しかない。それでも、キャンプ地に入るほど奥入った道なので大きな問題はないといえる。そんな道を二人はただただ歩いていく。

しかし、逸る彼の思いは眼前の光景に寸断されてしまう。十五分ほど歩いていると、やがて田の前の道が行き止まりになってしまったのだ。彼には現状の理解に少しの時間がいった。

「どうこうことだ」

振り返り、後ろに着いてきていた男性に訊く。この道を男が散歩で歩いてきたのなら、

その先がここになるのはおかしい。

「あいつはどこに行つたんだ」

「どこかは分かんないですけど、適当に曲がったとかじゃないですかね」

ここに来るまで、右手には住宅が幾らかあり、左手には森が続いていた。曲がつたと いうのなら、右手になる。住宅地の方へと行き先を変えたのか。だが、どうにも納得がない。散歩なら、もつと広々とした場所がいいんじゃないだろうか。都会ならまだしも、こんな地方なら長閑な風景を田にしたいものなんじゃないだろ ろうか。日々を都会で過ごし、たまに帰ってきた男なら特に。右手に田を向ける。住宅地の方にもこれ

といった休息の場所は見当たらぬ。思考がつまく男の行動へと重ならず、気が焦ってくる。

「何か知らんのか。何でもいい」

「そう言われても・・・・・・ずっと釣りをしてただけなんで」
目を閉じ、落胆に近い息をつく。「ここまで来たのに、根っこを掘り下げることが出来ないのか。

「あいつの行きそうな場所は分からんか」

「行きそうな場所っていうか、あいつが帰ってきた時にいつも行く場所なら」

「そこだ。教えてくれ」

二人は来た道を引き返し、男性の車で移動を始める。最も有力としていたポイントで活路を見出せず、気が落ちてしまつ。なんとかここから盛り返したい。そう信じるしかなかつた。

一つ目の場所は小学校だつた。男や男性が通つていた小学校、この地に住んでいた彼

も当然知つてゐる。授業中だつたせいか、静けさが目立つてゐる。一応に考えてみると、すぐに振り払つ。いくらなんでも、こんなところに女性を移動させるような事はしないだらう。男の顎口の空白の時間は平日の昼間、誰にも気づかれ

ずに小学校に入り込めはしないはずだ。

一つ目の場所は林檎山だつた。小学校から数分の距離にある中学校の裏手にあり、子

供たちの隠れ基地とされてゐる場所。林檎山は通称で、実際は山とは到底言えない広さ

しかない。遠くからの見た目から、そういう名前がどこからか付いただけだ。隠れ基地というのも、それが大人まで伝わつてゐるようでは疑わしい。実際のところは、小学生が

授業終わりに溜まる場所になつてゐるらしい。それも、学校で大将を張つてるような奴らが主に。

ここも移動は難しい気がする。男の当口の空白の時間は、詳しくは十三時から十七時まで。後半は小学生の下校時刻と重なつてしまつ。それに、ここは授業をサボる小学生や中学生の集まる場にもなつてゐるらしい。前半にも、ここを誰かが訪れる可能性はある。

そうなると、ここも違うのかもしれない。

三つ目の場所は一軒家だつた。男がここにいた時に住んでいた家だ。元々は家族三人で暮らすためにと購入したものだつたが、父親は男が幼い頃に女を作つて出てつてしまつたらしい。それからは母子二人で貧しい生活を続け、その母親も八年前に帰らぬ人となつた。

ここも移動は無理だらう。今は別の一家の住まいとなつている。庭では母親らしき人が洗濯物を干しており、家の中からも足音が聞こえてきた。

四つ目の場所は吉野川だつた。男や男性だけでなく、そこは彼にとっても決して忘れ去ることの出来ない場所だ。十七年前のあの忌まわしき過去、ここに来るだけでそれはすぐに思い返されていく。目を覆いたくなる光景、多くの生命が失われた一時、廃と化された亡骸。今もある惨事から抜け出すことのできない人達がいる。彼も、男性も、男もその一人だつた。

ここなら、有り得るだらうか。あの男をああいう人間にさせてし

まったくあらうこの

場所なら。しかし、ここもキャンプ場である以上、オープンな場所だ。人間を移動させ

るのは容易ではない。誰の目があるかなど分からぬ。

「本当にここが最後なのか」

「はい。いつもこう回つてます」

男の四つの思い出の場所、可能性としてはこの吉野川が高い。だが、ここだと決める何かは全くない。そんな段階の中での「安易にここ」としていいのだろうか。ここではない気がしてならない。

「他に何か知つてゐやつはないのか。何でもいい。大田について、何か手掛けたりなるものがあるやつは」

懇願するような思いだった。この徳島ではあるはずなんだ。とうより、ここでないなら全ては振り出しに戻されてしまう。それも、そこから抜けることの難解な振り出し

へと。

「手掛けりになるかは分かりませんけど、鞆谷さんに電話してみましようか」

「鞆谷」

その名前にはどこか聞き覚えがある。

「大田くんの近所に住んでいた子です」

その言葉で、彼の記憶の中と鞆谷の名前が一致した。実際に会つたことはなかつたが、

名前だけなら資料で数えきれないほど田にしてきている。

鞆谷は、十七年前にここで起つたあのキャンプ場の火事に遭つた学級の生徒の一人

だ。彼女が生き残つてゐるのは、当田の病氣でキャンプを欠席して

いたから。やむなく
の欠席が自らの命を救うことになつた。確かに、彼女なら男のこと
を何か知つてゐるか
もしけない。

「ああ、その子に連絡つけてくれ」

鞆谷に連絡を取ると、行けることは行けると返答が来たのでここ
まで来てもらひうこと
にした。

鞆谷とは男性も特に連絡は取り合つてゐるわけではないらしい。た
だ、過去にあれだけ
の共通点が生まれた三人には言葉にはじにくらい変な関係が互いにあ
り続け、連絡先は今
でも知つてゐるようだ。

二十分ほどで鞆谷はキャンプ場へ姿を見せた。既に結婚し、息子
は今年から小学生に
なつていると男性から聞いていたとおり、髪型やら服装やら全体的
な気にもそんな感じ
は出でている。若々しいものといつより、一段落して落ち着いたよう
な印象。もとより、
この辺には東京のように奇抜な若者は少ないといえるが。

亀谷はこれまでのことを抜本的に説明する。無論、男性同様に奥
底の方は包み隠して。

「何でもいい。大田について、何か知らないか」

また彼は懇願するように訊ねた。おそらく、男性はこれ以上に女
性の移動場所に繋が
るものを持つていらない。となれば、彼にはもう彼女しかいない。そ
んな強い思いで返答
を待つていく。

「さつき、野木くんが釣りをしてたつて言つてたところって、こ
の先のキャンプ場の

といふかな

「ああ、あそこだよ」

その言葉に、彼女は一つ頷く。何かが頭内で結びついたような反應に見える。彼はただ先の言葉を待つ。

「じゃあ、あの辺に大田くんがよく行つてたところがあるけど」
男が散歩に行くと消えたところの近くに、そんな場所があつたのか。
しかも、男性と
行つてきた四つの場所ではなく、断念をした元々の本命の場所。何
か大きな活路が開けたような気がした。

「すまないが、そこを案内してくれないか」

力強く頼むと、それに圧倒されたのか彼女ははいと頷いた。移動する間に聞いた話に

よると、男はその場所を頻繁に訪れていたらしい。幼稚園や小学校から帰宅するとそこ

へ行き、何をする目的もなく時間を過ごしていく。家が近く、同学年ということもあり、

彼女は何度かそこへ連れてつてもらつた事があつたが、やはり何をすることもなく適当に話をして過ごしたようだ。そこを訪れる目的を訊くと、男は何も考えなくていいから落ち着くと言つていたらしい。

やがて、数時間前に最初に訪れたキャンプ地を通過し、男が散歩へと消えていった道を歩き出す。そして、数分が経つ頃に彼女は左へと曲がった。当然、男性と彼は驚く。

その道の左手にあつたのは森なのだから。

「もしかして、ここに入つてくの」

「うん、そうだよ」

まるで当たり前のことを口にした。彼女は言った。どんどん茂みの中へと入っていく彼女を追いかけ、男性と彼も森へ入っていく。森の中には道らしき道はなかつたが、人一人が歩ける程度のスペースはあった。それでも、森林に密閉された山なりの中を登つていくのは蒸し暑く、中々に体力を消耗する。子供ならこれぐらいは平気で登つてしまえるんだろうが。

「ここに来ですね」

そう彼女が立ち止まつた場所を見てみると、何も新鮮さは感じられない。そこに、これまで歩いてきた景色と何の変化もなかつたからだ。山登りの休息地点とまで言わずとも、何かしら印象のある物でもあるのかと思つたが完全に裏切られた。单なる森の一部、それでしかない。

「どうして、ここだと分かるんだ」

「なんとなく、勘です。でも、大体合つてゐるはずです」

子供の頃の記憶、ということか。彼は滲み出でていた額の汗を拭い、息をつく。周りを見渡してみると、「これというものはやはりない。ただの森の中だ。だが、気を落とすことはない。ここが男の昔の隠れ場だったことは間違いない。男は

小さい頃にここを安息の場所としていた。あの惨事が起つた前後もそうだったはずだ。

そして、男が一週間前に散歩へと歩いた道もここへと繋げられる。女性がここへ移動させられた可能性は現時点でも最も高い。

男は付近をしばらく歩いてみる。足場は悪いが、作業は不可能で

はない。ただ、数分

歩いてみると、それらしき跡は見当たらない。ただ、この付近とも限らない。この森の

全体が対象ともいえる。そうなると、範囲はずいぶんと広がつてくる。彼自身、取つて

きた休暇は今日が限りだ。それだけの広さを調べ上げる時間など到底ない。どうすればいいんだ。

その日の夜、男は片柳彩子と会っていた。朝方までは久留米雀の老いた体に身を崩し、

夕方までは光村沙耶の若い体に身を治す、いつもの流れで。夕食は個室のある店で鍋を

食べ、帰りがてらに遠回りをして夜景を見ながらドライブをした。

女の子の表情は終始緩みっぱなしで、男の側に寄りながら何度も幸せだなあと零していく。男もそれに合わせるように笑みを見せていく。

ドライブの後、車は男の自宅マンションへと行き着く。通常なら女の子の自宅へ送り届ける流れだが、今日は男の部屋に上げる口約束をしていた。男の部屋を見せてもらいう

という名目だが、それでも女の子はこの上なく嬉しかった。一つ一つ進展していく二人の関係は喜色そのものだから。しかし、純な想いを続ける女の子には予想だにしない現実が訪れようとしていた。

マンションの地下駐車場に車を停め、エレベーターへと歩くうち男は異変を察した。

駐車場にあつた車の隙間から四人の男性が急に飛び出して、あつと

いう間に男の周囲を

取り囲んでいく。その中には、亀谷右京の姿もあつた。急すぎる展開に男の頭も複雑に回転している。

「大田恵一、今から署まで同行してもらひ」

今さら警察手帳の提示なんて必要ないだろ？といつ眞理にいきなり言葉から入ってくる。眉間に皺を寄せ、険しい表情。ただ、その奥に芯のあるものも見えた。ここまでしてくるということは、自信に繋がる何かを得たのだろ？男は抗争の覚悟を心に決めしていく。

「連れていけ」

彼の一言で、他の三人の刑事が男を連行していく。男が抵抗をしなかつたので、無理な力は加えられなかつた。

「あなたにも来てもらいます」

彼の一言は女の子に向けられた。だが、女の子はそれどころではなかつた。目の前で

起こっていく非現実的な現実の場面に着いていけず、不定な心情に身を侵されそうになつていて。仕方なく、彼が女の子の肩を引いて歩かせた。

マンションの表に停めてあつた一台の車の一方に男、もう一方に女の子が乗せられ、

車は動き出す。後部座席に刑事と乗せられた男はこの先に起こるであろう出来事を様々

に頭に思い巡らせていく。警察はどれだけ捜査を進めたのか、それに対してどんな対応

をすればいいのかと。女の子の方は顔色が悪くなるほど、思いを詰めていた。まさか、

自分の人生の中でこんなことが起るなんて思いもしていなかつたから。ただ、刑事が名前を発したのは男の方だ。自分はその付属のよつな扱いだつた。それはそれで、男はどうしてこんなことをされるんだらつかと頭を悩ませ、詰まつていく思いは増すばかりになる。

警察へ着くと、男は取調室へと連れて行かれる。亀谷ともう一人の刑事が残り、男と対面の椅子に彼が座つた。

「やつと、こうやつて話せる時が来たな」待ち望んでいた、という感じに彼は言い放つ。男は動搖はない素振りを表面に出していく。

「どうじい、じいに自分がいるのかは分かるな」

「ああ、どうしてですか」白を切る男にカチンとくるが一時の感情は押し込める。男のペースに持ち込まれはない。

「前にも聞いたが、もう一度確認のために聞く。週刊誌の女性生活の記者をしている柴村忍を知ってるな」

「はい、知っています」

「どういう関係だ」

「僕が女優の久留米雀さんのマネージャーをしていて、久留米さんが女性生活に連載を持っているので仕事で接していました」

用意していた言葉を並べるように男は喋つていぐ。まあ、いい。前半はジャブで相手の出方を窺う。

「柴村忍と仕事以外で接する機会はなかつたか」

「仕事以外で」

「ああ、久留米雀と柴村忍は仕事場以外でも交流があつた。そこにお前がいてもおかしくはない」

マネージャーがタレントの食事に付き合わされるのはよくある話だ。女性と男は仕事で接しているのだから、その場に同席しても変じやない。

「はい、何度か一緒に食事はしました」

「二人で食事をすることは」

「ありました。仕事の打ち合わせをしたい、と言われて」

「その後、柴村忍から言い寄られるようなことはなかつたか」

「どうこうの意味でしょう」

「好意を持たれはしなかつたか、ということだ」

そこを突いてくることは予測できた。男と女性の間を怪しむいたら、そこを見るのは自然だろう。

「さあ、僕は彼女じゃないんで分かりません」

「そういう節はなかつたか、ということを聞いてるんだ」

「なかつたと思います」

食い気味に男は言った。彼の目を直視し、余裕を含ませて。相手もそれに怯む様子は全くない。

「では、柴村忍が失踪したことは知ってるな」

「はい」

「お前、何か知つてはいないか」

「どうして」

あくまで、男は白を切り通す氣だ。お互いがお互いの思惑を知つたまま、探り合いを続けていく。

「じゃあ、もつと直接的に聞こい」

彼は姿勢を前傾に構える。男の目を一点に見突く。

「お前は柴村忍の失踪に係わってるな」

「意味が分からない」

「お前が実行犯だ」

「全然分からぬ」

「理由は分からんが、お前はしつこく柴村忍に脅しを掛けられた。

おそらく、出され

たら困るような写真でも撮られたんだろう。お前は彼女の存在が邪魔になつた。だから、

消したんだ

「勝手な想像は止めてもらえませんか」

だんだんと二人の言葉は強くなつていく。ムキになりそうになるが、冷静さを保とう

と氣を落ち着ける。

「柴村忍の行方が途絶えた夜、お前には決定的なアリバイはない」

「アリバイがないから何だつて言うんだ。そんな奴、探せば腐るほどいる」

「その翌日、お前は仕事を休んでいるな」

「単に休暇を取つただけだ。数日前から申請してあつた」

「ああ、つまりは衝動的にではなく計画的に行われた犯行ということだ」

「馬鹿馬鹿しい。聞いてられない」

男は彼から視線を外した。攻められてはいるが、所詮は外壁から中には入らずに無駄

な球を投げてるだけだ。

「そこまで言うなら、何か証拠があるんだろうな」

挑戦的に男は投げた。こちらに致命傷を負わせるような重い球など持つてやしないだ

ろうと。

「あるぞ」

男の目が開く。再び彼の方へ向けると、鋭い視線が一矢ちらに向かっていた。

「柴村忍が発見された」

男の目も鋭くなる。相手の田の奥の真意を掘もつと。ただ鎌を掛けているだけに違いないと。

「どこにいたんですか」

「知りたいか」

「それはもちろん」

次の彼の言葉で真意は判明する。真実なのか、嘘なのか。緊張が男の体の中を駆け巡つていく。

「吉野川付近の森の中だ」

男は笑みを浮かべそうになり、それを必死に打ち消す。上歯と下歯の間に舌を入れ、軋ませるのを防ぐ。

「昨日と今日、徳島に行つてきた。野木晃彦に会つたためにだ。あいつなら、何か知ってるんじゃないかと思つてな。案の定、お前が休暇を取つたという日に日帰りで帰郷をしていたことが分かつた。俺はここに柴村忍の行方があると確信しお前が帰郷する度に回るつていうコースを野木に連れて行かせた。だが、どこにもそれらしき場所はなかった

男は彼の話を聞くだけだった。あとほんままでが調べ上げられているか、それ次第になる。

「そこで捜査は一度止められてしまった。でも、ここに柴村忍が

いることだけは確か

だと思っていた。そうしたら、野木が鞘谷を紹介してくれたんだ」「鞘谷という名前に男は意表を突かれる。もつ十七年、一度も顔を合わせていなかつた

女性だ。

「彼女に経緯を話したら、一つの場所を教えてもらえたんだ。一週間前、お前が野木とキャンプ場から離れて散歩へ行つたつていう道の先にある森だ。昔、子供の頃によく行つていた場所だそうだな。そこに行つた時、俺はここだと思ったよ。だから、地元の

警察に協力を依頼して捜索をした。昔の仕事仲間も多かつたから、頼み込んだら力を貸

してくれたよ。俺は途中で東京に戻らないとならなかつたが、途中で柴村忍の遺体

が見つかつたと報告が入つた

男も彼も視線を外すことなく、お互いを強く見ていた。その間に優劣は大きく変わつていた。

その11（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一眼置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらじのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやしきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追い続いている）

光村沙耶・みつむらさや（キヤバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーを誇る）

「それで。それが僕がやつた証拠になるんですか」

現場状況はお前がやつたと指示している上

「それが何だつていうんだ。僕がやつたという決定的な証拠にはならない」

お前 当田入一

「どうだろ」「だんだんと、遺体を入れて運んだんだが、中に誰かいたよ。」

「ま、星へ二つ町上りバ十二へ量り二三切三精、ソーハ

証言は取れて
いる。

だが、行きの中味は証明できない

にそのスースケース

を擡げてぐるから調べてみるかと

「アーリはヨシニ一ツニ。アーリ、アーリ、アーリ

「どうせ、そのつまづき前の犯行だと全然

めでたしめでたし

「自由。自由はやつた人間がするものだ。僕がする必要なんてない」

た屈辱に理性を振る

されるが、まだ首の皮一枚つながっている事実で押し留める。まだだ、まだ俺は崩され

ちやいない。

そこで、一旦に話は途切れた。外壁を壊し、中へ侵入し、最後の牙城を崩そうとする亀谷。己の運命が掛けられた牙城を崩させやしないとする大田。両者の睨み合いが続けられている。

「すまんが、席を外してくれ。一対一で話がしたい」

彼は取調室にいたもう一人の刑事へ言つた。刑事は驚いていたが、彼の気に押されて部屋を出て行つた。

一人減つたことで、取調室はより狭まつた気がした。閑散とした空気が余計に不穏さを際立たせる。

「自白をする気はないのか」

「その必要がないと言つてている」

「そうか、と彼は息を一つつく。

「十七年前の吉野川での火事を覚えてるな」

「忘れるはずがない」

「俺はあれもお前がやつたと思つてきた」

正確に言つなら、途中からそつ思い出した。事件当時には、男の裏にある凶氣に気づけなかつたから。

「馬鹿馬鹿しい」

「ああ、俺も何度とそう思つたぞ。だが、小学生が人を殺められないわけじゃない」

「ふざけるな。いくら刑事だからって、何から何まで事件に結びつけていいつてもんじやない」

そう言い投げると、彼は少し黙つた。返答がなく、それが男には奇妙に感じられた。

「野木が全て話したよ」

彼の言葉に、男はまさかという顔を見せる。心を崩され、その事実を受け入れられはしなかつた。

「あの火事はお前が起こしたものである事。そして、それが事前に計画された残虐な

大量殺人だつた事もだ」

それを男性から聞かされた時、彼も驚きを隠せなかつた。それを長年疑つてきたのに、

事実として告げられるときすがに重いものだつた。

「どうして・・・・・・」

どうして、野木がそれを亀谷に話したんだ。俺はあいつを助けたんだぞ。あいつには俺を助ける義務があるはずだ。

「お前が柴村忍を殺めたであろうことをあいつに話した。あいつは本気で落ち込んでたよ。お前が全うな人間になつてくれるのを誰よりあいつは望んでたからな。だから、

俺はあいつに訊いた。十七年前の火事の真実を教えてくれ、大田恵一がやつたんだろ、

とな。それでも、当然あいつは口を割らなかつた。でも、あいつの反応を見ていれば、

それがどういうことなのかぐらい簡単に分かる。もう時効は過ぎてるから大田やお前が

罰せられる事はない、その事について俺が二人を個人的に攻める事もしない、と言い加

えた。それでも、あいつは口を閉ざした。自分を助けてくれたお前を裏切ることが出来なかつたんだ。だから、俺は最後にあいつに言った。お前が本当に

大田を助けたいと思

つてゐるなら眞実を話してくれ、償わないとあいつはこつまでも罪の世界から抜け出せ

ない、と。そうしたら、あいつは全てを話してくれたよ」

男の体に彼からの言葉が沁み込んでいく。もつ罪に苦しむのは終わりにしたい、と前

に男性から言われたことを思い出した。

「野木は十七年も苦しんできたんだ。ずっと闇の中から抜けられないお前をして。

お前がそこから出ないと、あいつも出られないんだ。あいつは独りでそこから出るよう

な奴じやない。抜けれるならお前と、と思つてゐ

「・・・・・うるさい」

小声で呟く。男の体の中が迷いで疼く。

「最後、あいつは泣きながら話してたんだぞ。もしかしたら自分がいけないのかも知れない、こうなる前にもつと早くお前を助け出していればよかつたのに、つて」

「・・・・・うるさい」

また小声で呟く。機能は壊滅する寸前まで迫つてきていた。

「お前は独りきりなんかじゃない。これだけ心配してくれる人間がいるんだぞ」

「うるさいって言つてるだろ」

男はありつたけの声で怒鳴り、ありつたけの力で机を殴り、ありつたけの感情で亀谷

を睨み、溢れてくる涙を抑えきれなかつた。

「俺も同じだ」

感情を曝け出した男から視線を外すことなく、彼は言いつける。

「十七年前の火事の時、眞実に気づいてやれなかつた事を後悔してる。あの時に俺が

本当のお前を分かつてやれていたら、こんなに長い間お前が苦しむ

ことはなかつたし、

こんな事件も起きなかつた

この十七年間を雑に急速に思い起こす。どれだけの思いを男と男性と彼はそこに費やしてきただろう。

「すまなかつた」

その言葉は、男の長年に渡つて留めてきた感情を崩した。男の中で何が解放された気がした。

「柴村忍を殺したのは・・・・・お前だな」

呴くほど声で彼は言った。男は何も言わず、ゆっくり首を縦に振つた。長きに渡つて築き上げられてきたものが許された瞬間だった。

取調室を出ると、亀谷は大きく息をついた。自責の念に駆られながらも、十七年分の葛藤からの解放感もやつてきた。昨日から今日まで稼働しまくった体への疲労感も同時に

に襲つてくる。今は取り合えず休みたい。

自分のデスクには戻らず、外に向かって歩き出す。狭い部屋の中にいたので、外界の

空気を吸いたくなつた。外へと出ると、涼しい空気が真正面から当たつてきて気持ちが

いい。しかし、落ち着いて何氣なしに田を配らせると、視界に数メートル先に佇む人物の姿が捉えられた。彼はその人物の方へ近づいていく。不定な表情をして立つていたのは片柳彩子だつた。

「大田なら、待つても来ないぞ」

女の子への聴取はとつくに終わっていたのだろうが、それからこ

ここで待っていたんだ

ろう。聴取を担当した刑事がどう説明したかは知らないが、おそらく大体の事は伝わっているはずだ。

「ここにいつまでもいない方がいい。そのうち、報道の人間も詰め掛けるはずだ」

その時に女の子がここにいるのはまずい。恰好の報道のネタとして取り扱われるに違いない。

「教えてください」

署内に戻ろうとすると、言葉を掛けられた。

「何だ」

「教えてください。あの人のこと、全部

その不定な表情は言葉の通りに女の子の感情を示していた。男の繕つた表面的な姿を信じてきたのだから、今の状況を素直に受け入れられはしないだろう。

「これ以上に首を突っ込んで、あなたの立場がまずくなるだけだぞ」

殺人犯の交際相手、そんな事がマスコミから世間に出来されたら女の子の芸能人としての人気は終わりだ。これ以上を知る事は、それだけでなく彼女自身の精神的ダメージを増やすだけにしかならない。

「・・・・・違うんです」

女の子は首を振り、弱い言葉を吐く。何を違うと言つてゐるのか、彼には全く分からなかつた。

「あの人はそんな悪い人なんかじゃないんです。もっと、心が優しくて、時に弱くて、

温かい人なんです

「それは、あんたの前ではそう見せていただけだ」

「そんなことありません。あれは絶対に嘘なんかじゃない」

女の子の気迫のこもった言葉に、彼は息をつく。完全に男の表面の姿を信じてしまつていてる。

「あんたはあいつの何なんだ」

そう煙たがるように言い投げると、女の子は考え込んでしまう。

「分かりません。私があの人の何なのか」

信じたい、自分が想いを寄せる人を。でも、現実は信じがたいものばかりを突きつけられている。

「それでも、あの人は私にとつて大切な人なんです」

女の子の芯のある視線に、彼は手を上げる。

「分かった。全てを話そう」

このまま、男の本性を知らない今までこの先を歩かせるのはあまりに酷だ。それなら、

いつそ一思いに苦しみを一瞬にしてあげた方が楽になるだろう。

「その代わり、最後まで背けずに聞いて欲しい。今から言う事は全て真実だ」

女の子は息をつき、覚悟を決めたように頷いた。

「大田恵一は徳島のごく一般的な家に生まれた。両親は将来を思い、あいつを妊娠し

た時に一軒家を購入したが、結局子供はあいつ一人だけだった。あいつがまだ一歳の時

に、父親は他に女を作つて家を出て行つた。元々が遊び人の気質だったらしいが、母親

と出会つてからは大人しくなつたので安心してたらしい。ただ、元来のものはそう簡単

には消えなかつたようだ。だから、あいつは父親の顔も知らない。

まあ、知りたくもな

いだろうがな。それ以来、あいつは母子家庭で育てられた。生計を

成り立たせなければ

ならないから、母親は外で働き、その間あいつは祖父母に預けられていた。それでも、

育ち盛りの子供をそうそつ手放すわけにもいかないし、父親がいな
い負い目を味わわせ

たくはなかつたから、母親は仕事もパートの数時間だけにして、な
るべくあいつの側に

いてやつたらしい。それもあって、生活は苦しかつた。父親からの
養育費はあつたが、

かなり貧しい毎日を過ごす必要があつた。それでも、二人はそれで
いいと思つてたんだ。

だが、周囲の心ない人間がその慎ましい生活を突いてきた。小学校
に入ると、あいつは

特定の数人から貧乏を離され、いじめを受けるようになつた。時に
は中傷され、時には

暴行され、心と体を痛めつけられた。教師も現場を目撃した時でな
いと助けてはくれず、

同級生も見て見ぬフリをし、学校にあいつの休まる場はなかつたん
だ。家に帰つても、

いじめつ子が罵つてくる言葉の通りの生活で、次第にそこにすら滅
入るようになつてき

てしまつた。あいつの中での小学校の六年間は地獄の日々だった。

それを吐き出せなか

つたのは、自分のために働いてくれる母親の存在とそこ以外に居場
所がなかつたからだ。

六年間であいつはだんだん自分自身を閉塞させてしまい、精神的に
限界が近づいてきた。

来る日も来る日も罵倒され、暴力を振るわれ、やがて理性で押し留

めていたものを本能

が追い越してしまった瞬間が訪れた。小学校の卒業式の一週間前に、

あいつのクラスでは

キャンプが行われ、そこを逆襲の場として選んだ。全員が寝静まつた夜、あいつは全て

のテントに入口から火をつけていったんだ。俺はその時に現場に行つたが、火は無尽に

燃え盛つていて手の施しようがなかつた。結果、テントで寝ていた十七人が全員死んだ。

俺の刑事生活の中でも最大の惨劇だつた。あんな長閑な場所に起るはずのない事件だ。

だが、当時はあの事件は事故として扱われた。現場には事件性を思わせるものではなく、

花火もやっていたので発火の恐れのあるものもあり、なにより小学生があんな事を起こ

せるはずがないと決めてかかっていたからだ。ただ、当時どうしても気に掛かつたこと

はあった。事故関係者に話を聞いている中で、あいつの瞳だけはやけに印象的に映つた

んだ。険しく鋭くつていうような分かりやすいものじゃなく、静かなのに過ぎるほどの

感情を内に押し込めているような感じだつた。事故の後も関係者のケアにはあたつてい

たが、大田恵一だけは明らかに他の人間とは違つていた。事故による悲しみじやなく、

もっと別の悲しみを自身の中に抱いていた。そして、あいつに接していくうちにある仮

説が俺の中に浮かび上がってきたんだ。あの火事は事故じゃないかもしれない、という

とんでもない説だ。あまりに突拍子のない仮説だったから誰にも言

わなかつたが、俺は

それが頭の中から消せないようになつた。大田恵一はとてつもない凶氣かもしれない、もしかしたら何か次に遭つてのけるんぢやないか、という思いが離れなくなつてしまい、

いつからか俺はあいつの行方を追い掛けようになつていつた。定期的に、あいつの姿を確認するために仕事の後の時間を使つた。中学生以降、あいつはいじめを受けること

はなくなつた。明るさを前面に出すようになつたんだ。もちろん、それがあいつの本質ではなく、意図的に作り上げたものだ。中学と高校と大学と、あいつは特に大事を起こ

さずに無難に進学を続けていった。大学の卒業を控えてる頃に母親が亡くなり、あいつは卒業と同時に上京してタクシードライバーになつた。俺もなんとか後を追おうと、熱心に頼み込んで東京の署に異動することが出来た。仕事でもあいつは周囲に溶け込み、

無難に毎日を過ごしていった。ただ、一つだけ俺には気になつていたところがあつた。
どうして、あいつはタクシードライバーを仕事に選んだんだろうと。大学を卒業していくれば普通の会社員に落ち着くことができるのに、何故そこについたんだろうと。当時は

行き着くことができなかつたが、今なら分かる。あいつは復讐を続けていたんだ。昔に受けてきた傷への思いをずっと消してなかつたんだ。対象は人間ではなく、金。貧乏を

貶され続けてきた過去を蹴散らすために、何不自由のない生活を送

れるだけの富を手に

する人生に向かう決断をあいつはしていたんだ。そのためには、し
がない会社員として

一生を平凡に暮らしていく道は沢べなかつた。出来るかぎりの富を
築く一攫千金を狙う

人生、その道にその職業は合つていた。現実に、あいつは様々な有
権者と関係を持つ事
になつた。そして、そこへうまく取り込み、ヘッドハンティングさ
れた。

だが、あいつの前に大きな壁が立つた。柴村忍があいつに逆境とな
る写真を撮り、それ
を週刊誌に掲載すると言い出した。ネガごと処分したらしいから[写
眞の内容はつかめて

ないが、あいつとしてはこんな復讐の半ばで線を断たれるわけには
いかない。あいつは

柴村忍を殺め、その遺体を故郷の山に埋めた。十七人を手にかけた
人間にとつて、十八
人目に対する迷いは自己制御の範疇にはならなかつた。そうして、
あいつは新たな犯罪
に手を染めてしまつたんだ」

男の人生を言いあげるうち、途中から女の子は涙を流していた。
悲しみなのか、憐れ
みなのか、もつと他の感情なのか。その涙の真意は分からないし、
あえて聞くこともし
ない。

「あの人人は・・・・・私のせいで」

「それは違う。今回の事件について、あんたに責任などない。こ
れはあいつが独断で

遣つた行為であつて、あんたが強く心を痛める必要はない」

元々、男が柴村忍に手を掛けた理由はそこではないだろう。おそ

らく、男が女性から

脅されてたのは久留米雀との関係の写真のはずだ。

だが、彼はそこに關しての言葉は避けた。知らなくてもいい事實を無理に知らせることは止めておく。どのみち、これだけの眞実を突きつけられ、男のところに留まつてはいられないはずだ。

大田恵一の逮捕により、柴村忍の失踪事件に終止符が打たれた。男は女性を殺めて、さらにそれを山に埋めるという殺人と死体遺棄の罪を重ねた。当然、この事件は報道で世間へ知れ渡る事になり、関係者たちに激震を与えた。

亀谷からの聴取に対し、久留米雀は男との深い関係について否認を貫いた。柴村忍が

自身で撮影した写真で男を脅した事が事件の原因に繋がったのは調査済みで、その写真は久留米雀との只ならぬ関係を証明するものに違いない。ただ、女はそこを否定し続け、男の方もそこについての詳細を一切吐かなかつた。現物が廃棄されている今、当人が口を割らないと前進は難しい。

光村沙耶にも話を聞いたが、ここも否認を貫くだけだった。もどり、こととの写真

が撮られたところで脅されるようなことはないだろ？。彼自身も特に疑いを持つていな

かつたので、あまり深く突くことはしなかつた。ただ、久留米雀も男を単なるマネージャーと言い切つたように、女も男を単なる友人と言い切るぐあいがどうにも腹立たしか

つた。女の部屋に男が何度も入っていく姿も、一人で仲睦まじく出かけてる姿も目撃していると言おうとも、単なる友人としか言わない。自分を守ることに必死で、見ていて無様だつた。

それに比べ、片柳彩子は正反対といえる対応に終始した。男との交際を認め、柴村忍が撮影した男との写真についても自分とのものだと断言した。それによつて自分がどれだけのものを失うか分かつてゐるはずなのにそこまで為し得る潔さは脱帽に等しいほどだつた。そこまですることで現実に手を背けず、男との関係をきつぱりと絶とうとしたのだろうと思つた。

世間へと流れた報道では、久留米雀は加害者と仕事上での付き合い、光村沙耶は全く零れなかつた。逃がしてやつたわけではない。知らなくてもいい事實を無理に知らせることはない、それだけだ。片柳彩子については、彼女の証言がそのまま世間に流れた。

女の子の記事は社会を賑わせ、周囲には常にマスコミがへばりつく日々が続き、右肩上がりだつた人気は急落し、モデルを務めていた雑誌との契約は解除、所属事務所も解雇され、女の子の芸能人としての地位は消え去つた。こんな時、世間というのは冷たいものだ。数日間は恰好の餌食として突つきまくり、やがて話題がなくなればあっさり捨ててしまつ。

報道も一段落がつき、世間から次第に事件の記憶は薄れ出していった。亀谷右京は東京

拘置所の側に車を停め、窓を全開にして空を眺めている。雲は流れ、時間は流れ、記憶

も流れ始めている。忘れるなど決してないが、それでも日々は続していく。新しい

一日は訪れ、そこを生きていかなければならぬ。十七年間という長い年月を費やしてきたが、ようやく自分も解放される時が来たんだ。

昨日、野木晃彦へと電話を入れた。徳島でも今回の事件は大きな衝撃となっていた。

地元の山へ死体が埋められ、その犯人が出身者だったのだから当然だ。男性は今回の件

について、誰に何を言われようと眞実を話さなかつた。知らない、分からぬ、連絡を取り合つてない、と他人同然に振る舞つた。よく知りもしない人間に余計な詮索をされないために。

野木は一度、拘置所に面会に訪れた。その時の男は下に俯き、生氣の弱まつた病人の

ような印象だつたらしい。そこでは男性の方が一方的に喋り、男はそれを聞き続けた。

内容は思い出話がほとんどだつたが、大人になつてからはそんな話もしてなかつたので

新鮮にもなれた。話が一つ落ち着くと、職員から終了の時間の旨を告げられる。特に何

をしに来たわけではないが、実際何も得るものはないのかと思つた時、急に男がごめんと謝ってきた。何について言つたのか分からなかつたが、おそらく一連の事件について

総じての謝罪だつたんだと思つ。男性はそれを笑つて払つたが、男の思ひは嬉しかつた。

男にとって、自分はそんなに大した存在ではないんだろうと思つてきたところもあつたから。

大田恵一と野木晃彦が出会つたのは小学校五年生の時だつた。二人はすぐにお互いの

存在を認識する事になる。一人は、共にいじめられつ子だつたから。男は家庭の貧しさ、

男性は気の弱さがその原因だつた。ただ、二人が絆を深めるシーンというものは中々生まれはしなかつた。傷の嘗め合いをする気もなかつたし、弱者同士が集まると、より負のパワーが増しそうで嫌だつた。でも、男性は男に親近感を覚えていたのも事実だつた。

そんな微妙な関係は一年近く続き、まもなく卒業を迎へようとしていた。小学校からの解放にこれといった意味はない。中学に進んだとしても、自分の立ち位置に期待を持つ

ことなどなかつたから。そんな中で行われた卒業間近のキャンプも行事として参加すること

程度の思いにしかならない。だが、そこで男性は生涯忘れられない体験を目にする

となる。皆が寝静まつた夜中、同じように眠りについていた男性は体を揺らされて目を

覚ました。目を開くと、そこにいた男は口元に人差し指を当て、喋るなどいう無言の要

求をしてくる。そこから男の誘導で周りの人間を起こさないようこ

慎重にテントを出た。

時間は分からなかつたが、外は暗闇に包まれている。何をするのか

と思つたが、男は紙

と着火機を取り出し、おもむろに火をつけた。すると、男はそれを

同級生のいるテント

の中へと何度も投じたのだ。男性は田の前で起こっている現実が強烈すぎて、何の言動

も出来なかつた。その間にも、男は他のテントにも同じ事をしていつた。止めるべきだ

つたが、まだ小学生だった男性は完全に気持ちが疎んでしまい、体は全く動かなかつた。

外で寝に入つていた引率の教師が気づいた時にはもう火の手は人間たちを網羅して、何

の手の出しようもなかつた。膝から崩れ落ちる教師、現実を拒否する男性、その横で何

の感情にも行き着かないような乾いた瞳をしていた男は恐怖そのものだつた。日は経ち、

地元では歴史的な惨劇とされた十七人の犠牲者を出した火事は事故と判断された。当然

に男から口止めを強くされ、夜中に恐くて男に付き添いをしてもらつてトイレに行つて

いる間に火事が起つてたと男性は主張した。それ以来、男と男性には妙な仲間意識が

生まれた。仲良くはしないが、変な繋がりを感じる関係。近づきます、離れることも

しない。そんな関係がずっと続いていつた。

本人に確かめた事はないが、何度も心内に抱いてる事がある。どうして、男は十七年

前の火事の時に自分だけには手に掛けなかつたのだろうかと。一人でやつた方が実行も

スマーズにいくし、その後の証言などにも手を焼かずに済む。リスクを背負つてまで、

何故そうしたのだろうか。それについて、男と接していくうちに辿り着いたものがある。

男は自分の事を仲間と思つてくれていたんじゃないだろうか、同じようにいじめられている自分に同情してくれていたんじゃないだろうかと。だから、自分には手を掛けなかつたし、その後にも付かず離れずの距離を持ち続けた。それが男なりの友情だったのかかもしれない。そして、男性もその男の思いに応えていった。男性にとっても、男は人生で唯一の友達だったから。

同様に、もう一つ心内にだけ留めてる事がある。それは男の幼少期からの知り合いで、

小学校の五年生と六年生の時に同じクラスだった鞆谷のことだ。彼女は自分たちとは違ひ、学級内でも中心的な存在だった。正義感が強く、クラスでいじめがあつた時に報復も恐れずにいじめっ子に食つてかかつた。といつても、次やつたら先生に言つからねと強めの口調で言つただけだが。それでも、他のクラスメイトはそれも出来なかつたわけだから彼女の行動は勇気あるものだつた。実際、それから学級内でいじめられることもなくなつた。そんな彼女に対しても、男は手を掛けるつもりだつたのだろうか。十七年

前のある火事の日、彼女はインフルエンザで泣く泣くキャンプへの参加を断念する事になつた。あの日、もしも彼女が病氣にならずに参加していたら、男は彼女を十八人目の犠牲者にしていたんだろうか。何度か心内に浮かんだが、それを聞

くことはしなかつた。

殺すつもりだった、なんて聞きたくはなかつたから。彼女も助けるつもりだった、と勝

手な想像のうちにしておく。鞆谷は男性の初恋だった。同級生の中で唯一自分を助けて

くれた彼女へ淡い恋心を持っていた。決して届かせない、己の中だけで処理させる一方

通行の想い。自分にとつての彼女がそうだったから、同じ境遇にいた男には彼女に好意を持つついてもらいたかった。

龜谷は姿勢を直し、車のエンジンをかける。これでもう大田恵一に係わることはない

だろう。男は多くを失つたが、一つの確かなものを得られた。友情、それで男は未来へ

歩いていけるはずだ。時間は長く掛かったが、男はようやく人間らしい人生を生きていける。

そう彼は一つ息をつき、車を走らせていく。拘置所前の長い道を走つていくうちに、

一人の人間と擦れ違つた。ただの通行人と思つて通り抜けたが、すぐには彼は車を停める。

振り返り、後ろ姿をしばらく眺める。彼の思いはどうやら外れたようだ。友情の他に、もう一つ男には得られたものがあつた。

大田恵一は東京拘置所でしめやかに毎日を過ごしていた。心身が萎えてくるのは当然

だつたが、それでも芯まで腐ることはない。男には生きていく糧ができるから。これま

では他人の人生なんてどれも同じであつぽけなものでしかなかつた

が、やつと心を通じ

合わせられる人間ができた。亀谷から、今回の逮捕によつて野木以外の全員が自分から

離れていつたものだと思つてもらいたいと言われた。でも、それでいい。たつた一人で

あろうとも、大切な存在に気づけたのだから。

今は裁判が始まるのを待つ日々だ。刑の重さは覚悟しなければならないが、命を奪わ

れることはないようだ。柴村忍の殺害については裁判で刑罰の対象となるが、十七年前

の事件については対象外になる。時効が成立しているのもあるが、

亀谷がそこに關して

の全ての真実を隠したのだ。男を今まで闇から救つてやれなかつた自らへの咎めとして、

男が新たな道を歩むために伏せる事に決めた。

「面会だ」

職員からの言葉に、男は顔を上げる。亀谷からは前回の面会時にこれが最後になると

言わっていたし、野木にしても前回の面会から時間がさほど経っていない。それ以外の

人間が来ることも考えられなかつたため、疑問を携えたまま男は面会室へと入り、そこ

にいた人物に吃驚する。

「どうして……」

自然と漏れた言葉は、ガラス越しに立つていた片柳彩子にも伝わつた。

「来ちゃいました」

久しぶりに男を目にできた感動で女の子はすでに涙ぐんでいた。

それでもなんとか喜

色を表そと、精一杯の笑顔を零していく。

「なんで、ここに」

「なんで、つて・・・・・・会いたかつたからです」

「ここに君が来ちゃいけない」

「どうしてですか」

どうしてもなにも、これから輝かしい未来がある人間が犯罪者に感情を注ぐなんてあっちゃいけない。

「君は俺から離れないといけない」

「何言つてるんですか。私は離れたりしませんよ」

「君の立場がますくなる」

突き放そうとする男の言葉に、女の子はかぶりを振る。

「そのぐらいで離れるなら、それだけの関係だつたってことです」

その言葉は、今ここにいる一人に投じてるものにも思えた。なら、ここまで来た女

の子の男に対する想いはどれだけのものなのか計り知れない。

「知つてるだろ。俺は殺人犯なんだ。ただの極悪人だ」

「そんなことありません。あなたはそんなに悪い人なんかじゃない」

「君の事を利用しようとしたかも知れないんだぞ」

「初めて会つた時、私の事なんて何も知らないけど助けてくれましたよね。だから、

それが本当のあなたなんです。あなたは優しい人なんです
かぶりを振る女の子の両側の瞳から涙が流れしていく。その健気さの一つ一つが男の胸を刺していく。

「そういえば、まだ言つてませんでしたよね」

女の子は今出来得る最高の笑顔を見せ、ガラス越しの男を見つめる。

「・・・・・私、運転手さんの方が好きです」

女の子からの言葉に、男はその場に崩れ落ちた。自分の犯した過

ちに、今頃気づいて
しまった。

「私があなたに本当の愛を教えてあげますから」

こんなにも純粋な想いを自分は裏切ってしまったんだ。これだけの無垢な感情に、自

分はなんてことをしてしまったんだ。そう罪に悔いると、とめどなく感情の線を破つた

涙が溢れてきた。

「待ってます、ずっと」

片柳彩子への恋情、野木晃彦への友情の他に男が得られたものだつた。

その11（後書き）

これで「黒く滾る炎」は完結となります。
最後まで読んでくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0901j/>

黒く滾る炎

2011年2月17日23時27分発行